

田宮遺跡

緊急地方道路整備事業（常三島中島田線）関連埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

田宮遺跡

緊急地方道路整備事業（常三島中島田線）関連埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



田宮遺跡遠影



土師質土器



輸入青磁



貝類

序 文

田宮遺跡は、吉野川によって形成された徳島平野上の、徳島市南田宮4丁目5番地他に立地しています。

遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業（常三島中島田線）関連埋蔵文化財発掘調査の実施に伴い、徳島県土木部（現徳島整備部）都市道路整備局より依頼を受けた徳島県教育委員会文化財課からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが、平成9年度より平成15年度までの7カ年間に5次の発掘調査を実施いたしました。

調査地内からは、中・近世の遺構や遺物が多く出土しました。

中世遺物に関しては、徳島県内では出土の範囲が限られた、古備系土師器なども出土しており、本遺跡より東に約3kmに立地する中世の大規模遺跡である「中烏田遺跡」「南島田遺跡」との関連が注目されます。

また、近世の遺物においては、瀬戸美濃系や京信楽系、肥前系、備前系等の陶磁器、土師質土器や土製品、石製品等の日用雑器類が多く出土しました。

徳島城下中心部については、調査事例も多く中・上級武士層の豊かな生活状況や流通の一端を垣間見ることができましたが、本遺跡の調査により城下町周辺部に暮らす、庶民の生活の一端を明らかにすることができました。

これらの成果をまとめた本報告書が地域の歴史解明の資料として活用され、埋蔵文化財に対する关心と理解を多くの人に深めていただくことが出来れば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、多くの地元の皆様及び関係機関に多大の御援助・御協力並びにご教示をいただきましたことに深く感謝をいたします。

2006年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 佐 藤 勉

例　　言

- 1 本書は緊急地方道路整備事業（常三島中島町線）に関連して、平成9年度から平成15年度に亘り5次の調査を実施した田宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県教育委員会文化財課が平成8年度に試掘調査を行い、中近世の遺構面等が存在することを確認したことから、5次に亘る調査と報告書作成を文化財課から委託を受けた（財）徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
 - ・発掘調査期間　　平成8年10月23日・12月4日（試掘調査）
　　平成9年6月1日～平成9年7月31日（1次調査）
　　平成10年4月1日～平成10年8月31日（2次調査）
　　平成12年9月1日～平成12年12月31日（3次調査）
　　平成15年2月1日～平成15年3月31日（4次調査）
　　平成15年6月1日～平成15年8月31日（5次調査）
 - ・報告書作成期間　　平成17年4月1日～平成18年3月31日
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

SD 溝	SK 土坑	SP 柱穴	SE 井戸
SR 自然流路	SX 不明遺構		
- 5 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001年版によった。
- 6 遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 7 第7図の「周辺の遺跡分布図」は、国土地理院発行の1/50,000の地形図「徳島」を80%に縮小し使用した。
- 8 発掘調査、整理期間を通じての方々、機関の御協力、御教示を得た。

佐藤　陽一　　中尾　賢一　　徳島県立博物館　　徳島城博物館(五十音順・敬称略)
- 9 自然科学分析（貝類）は徳島県立博物館主任学芸員の中尾賢一氏からご寄稿いただいた。自然科学分析（骨角類）は徳島県立博物館専門学芸員の佐藤陽一氏に鑑定をお願いした。

- 10 本書の執筆・編集は、田所賢治が行った。写真は、遺物のエックス線撮影を植地岳彦、遺物撮影を杉本昌弘、遺構は調査担当者が撮影した。

本文目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	3
2 調査の経過	6
(1) 調査の経過	6
(2) 調査区割	6
(3) 調査日誌抄	10
II 遺跡の立地と環境	13
1 地理的環境	15
2 歴史的環境	17
III 調査成果	25
1 基本層序	27
2 遺構と遺物	33
(1) A 区（第3遺構面）	33
(2) B 区（第2遺構面）	57
B-1 区	57
B-2 区	59
B-3 区	60
(3) C 区（第2遺構面）	79
(4) D 区（第2遺構面）	111
(5) E 区（第1遺構面）	119
(6) F 区（第1遺構面）	141
F-1 区	141
F-2 区	148
3 まとめ	154
IV 自然化学分析	159
田宮遺跡から出土した貝類についてのコメント	161
田宮遺跡出土の獸骨について（獸骨同定結果一覧）	163

挿図目次

第 1 図 田宮遺跡位置図	3
第 2 図 調査区位置図	6
第 3 図 グリッド配置図	8
第 4 図 各年次の調査区の配置と新開査区の対応	9
第 5 図 徳島県の地形図	15
第 6 図 周辺の地形分類図	16
第 7 図 周辺の遺跡分布図	18
第 8 図 田宮遺跡周辺の歴史的環境（中世）	20
第 9 図 田宮遺跡基本上層図	29
第 10 図 A 区流拂配置図	31
第 11 図 A 区 SR3001 流路内出土遺物実測図(1)	35
第 12 図 A 区 SR3001 流路内出土遺物実測図(2)	36
第 13 図 A 区 SR3001 流路内出土遺物実測図(3)	37
第 14 図 A 区 SD2001 実測図	38
第 15 図 A 区 SD2001 出土遺物実測図(1)	39
第 16 図 A 区 SD2001 出土遺物実測図(2)	40
第 17 図 A 区 SK2003 実測図	41
第 18 図 A 区 SK2003 出土遺物実測図	41
第 19 図 A 区 SK2004・2005 実測図	42
第 20 図 A 区 SK2004・2005 出土遺物実測図	42
第 21 図 A 区 SK2006 実測図	43
第 22 図 A 区 SK2006 出土遺物実測図	43
第 23 図 A 区 SK2007 実測図	44
第 24 図 A 区 SK2007 出土遺物実測図	44
第 25 図 A 区 SK2008 実測図	45
第 26 図 A 区 SK2008 出土遺物実測図	45
第 27 図 A 区 2 号 SP 群出土遺物実測図	47
第 28 図 A 区 SX2001 実測図	47
第 29 図 A 区 SX2001 出土遺物実測図	47
第 30 図 A 区 SK1001 実測図	49
第 31 図 A 区 SK1001 出土遺物実測図	49
第 32 図 A 区 1 号 SP 群出土遺物実測図	49
第 33 図 A 区 SX1002 実測図	50
第 34 図 A 区 SX1002 出土遺物実測図(1)	51
第 35 図 A 区 SX1002 出土遺物実測図(2)	52
第 36 図 A 区 SX1003 実測図	53
第 37 図 A 区 SX1003 出土遺物実測図	53
第 38 図 A 区 第 1 包含層出土遺物実測図	54
第 39 図 B 区 流拂配置図	55
第 40 図 B-1 区 SD2102 実測図	58
第 41 図 B-1 区 SD2102 出土遺物実測図	58
第 42 図 B-1 区 SK2102 実測図	58
第 43 図 B-1 区 SK2102 出土遺物実測図	58
第 44 図 B-1 区 第 2 包含層出土遺物実測図	59
第 45 図 B-2 区 SD2101 実測図	60
第 46 図 B-2 区 SD2101 出土遺物実測図	60
第 47 図 B-2 区 第 2 包含層出土遺物実測図	60
第 48 図 B-3 区 SR2001 実測図	61
第 49 図 B-3 区 SR2001 出土遺物実測図	61
第 50 図 B-3 区 SR2002 実測図	61
第 51 図 B-3 区 SR2002 出土遺物実測図	61
第 52 図 B-3 区 SR2003 実測図	63
第 53 図 B-3 区 SR2003 出土遺物実測図	63
第 54 図 B-3 区 SD1001 実測図	64
第 55 図 B-3 区 SD1001 出土遺物実測図	64
第 56 図 B-3 区 SK1017 実測図	64
第 57 図 B-3 区 SK1017 出土遺物実測図	64
第 58 図 B-3 区 SK1018 実測図	65
第 59 図 B-3 区 SK1018 出土遺物実測図	65
第 60 図 B-3 区 SK1030 実測図	66
第 61 図 B-3 区 SK1030 出土遺物実測図	66
第 62 図 B-3 区 SP1040 出土遺物実測図	66
第 63 図 B-3 区 SX1001 実測図	67
第 64 図 B-3 区 SX1001 出土遺物実測図	67
第 65 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(1)	70
第 66 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(2)	71
第 67 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(3)	72
第 68 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(4)	73
第 69 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(5)	74
第 70 図 B-3 区 第 2 包含層出土遺物実測図(6)	75

第71図	B-3区第2包含層出土遺物実測図(7)	76
第72図	C区遺構配置図	77
第73図	C区SR2001出土遺物実測図(1)	81
第74図	C区SR2001出土遺物実測図(2)	82
第75図	C区SR2001出土遺物実測図(3)	83
第76図	C区SR2001出土遺物実測図(4)	84
第77図	C区SR2001出土遺物実測図(5)	85
第78図	C区SR2001出土遺物実測図(6)	86
第79図	C区SR2001出土遺物実測図(7)	87
第80図	C区SR2001出土遺物実測図(8)	88
第81図	C区SD1001実測図	89
第82図	C区SD1001出土遺物実測図(1)	89
第83図	C区SD1001出土遺物実測図(2)	90
第84図	C区SK1003・1005実測図	91
第85図	C区SK1003出土遺物実測図	91
第86図	C区SK1005出土遺物実測図	91
第87図	C区SK1004実測図	92
第88図	C区SK1004出土遺物実測図	92
第89図	C区SK1014実測図	93
第90図	C区SK1014出土遺物実測図	93
第91図	C区SK1038実測図	93
第92図	C区SK1038出土遺物実測図	95
第93図	C区1面SP鉛出土遺物実測図	96
第94図	C区SR1001実測図	97
第95図	C区SR1001出土遺物実測図(1)	99
第96図	C区SR1001出土遺物実測図(2)	100
第97図	C区SR1001出土遺物実測図(3)	101
第98図	C区SR1001出土遺物実測図(4)	101
第99図	C区SR1001出土遺物実測図(5)	102
第100図	C区SR1001出土遺物実測図(6)	103
第101図	C区SR1002実測図	104
第102図	C区SR1002出土遺物実測図	104
第103図	C区第1包含層出土遺物実測図(1)	105
第104図	C区第1包含層出土遺物実測図(2)	106
第105図	C区第1包含層出土遺物実測図(3)	107
第106図	C区第1包含層出土遺物実測図(4)	108
第107図	D区・E区遺構配置図	109
第108図	D区SD2001実測図	112
第109図	D区SD2001出土遺物実測図	112
第110図	D区SK2001実測図	114
第111図	D区SK2001出土遺物実測図	114
第112図	D区2面SP群出土遺物実測図	114
第113図	D区SD1009実測図	115
第114図	D区SD1009出土遺物実測図	115
第115図	D区SD1015実測図	115
第116図	D区SD1015出土遺物実測図	116
第117図	D区SD1016出土遺物実測図	116
第118図	D区SK1007実測図	117
第119図	D区SK1007出土遺物実測図	117
第120図	D区SE1001実測図	118
第121図	D区SE1001出土遺物実測図	118
第122図	D区1面SP群出土遺物実測図	119
第123図	D区第2包含層出土遺物実測図(1)	120
第124図	D区第2包含層出土遺物実測図(2)	121
第125図	D区第2包含層出土遺物実測図(3)	122
第126図	E区SD1001実測図	123
第127図	E区SD1001出土遺物実測図	123
第128図	E区SD1002実測図	125
第129図	E区SD1002出土遺物実測図	125
第130図	E区SD1004実測図	125
第131図	E区SD1004出土遺物実測図	125
第132図	E区SD1006実測図	125
第133図	E区SD1006出土遺物実測図	125
第134図	E区SD1008実測図	126
第135図	E区SD1008出土遺物実測図	127
第136図	E区SD1013実測図	128
第137図	E区SD1013出土遺物実測図	128
第138図	E区SD1014実測図	128
第139図	E区SD1014出土遺物実測図(1)	129
第140図	E区SD1014出土遺物実測図(2)	130
第141図	E区SK1001実測図	130
第142図	E区SK1001出土遺物実測図	130
第143図	E区SK1002実測図	132
第144図	E区SK1002出土遺物実測図	132
第145図	E区SK1003実測図	132
第146図	E区SK1003出土遺物実測図	132
第147図	E区SK1011実測図	134
第148図	E区SK1011出土遺物実測図	134
第149図	E区SK1012実測図	134
第150図	E区SK1012出土遺物実測図	134

第151回	E 区 SP1002出土遺物実測図134
第152回	E 区 SX1001実測図135
第153回	E 区 SX1001出土遺物実測図135
第154回	E 区第1包含層出土遺物実測図(1)136
第155回	E 区第1包含層出土遺物実測図(2)137
第156回	E 区第1包含層出土遺物実測図(3)138
第157回	E 区第1包含層出土遺物実測図(4)139
第158回	F 区遺構配図140
第159回	F-1 区 SK1001実測図142
第160回	F-1 区 SK1001出土遺物実測図142
第161回	F-1 区 SK1005実測図142
第162回	F-1 区 SK1005出土遺物実測図142
第163回	F-1 区 SK1007・1008・1009実測図143
第164回	F-1 区 SK1007出土遺物実測図145
第165回	F-1 区 SK1009出土遺物実測図145
第166回	F-1 区 SK1008出土遺物実測図146
第167回	F-1 区 1面 SP 群山出土遺物実測図149
第168回	F-1 区 第1包含層出土遺物実測図150
第169回	F-2 区 SD1002北壁実測図152
第170回	F-2 区 SD1002出土遺物実測図152
第171回	F-2 区 第1包含層出土遺物実測図153

表 目 次

第1表	A 区検出掲載遺構一覧表167
第2表	B 区検出掲載遺構一覧表168
第3表	C 区検出掲載遺構一覧表169
第4表	D 区検出掲載遺構一覧表170
第5表	E 区検出掲載遺構一覧表171
第6表	F 区検出掲載遺構一覧表172
第7表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)175
第8表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)176
第9表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)177
第10表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(4)178
第11表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(5)179
第12表	A 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(6)180
第13表	A 区出土遺物觀察表石製品・金属製品181
第14表	B-1 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等182
第15表	B-2 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等182
第16表	B-3 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)	182
第17表	B-3 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)	183
第18表	B-3 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)	184
第19表	B-3 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(4)	185
第20表	B-3 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(5)	186
第21表	B 区出土遺物觀察表石製品・金属製品186
第22表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)187
第23表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)188
第24表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)189
第25表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(4)190
第26表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(5)191
第27表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(6)192
第28表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(7)193
第29表	C 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(8)194
第30表	C 区出土遺物觀察表石製品・金属製品194
第31表	D 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)195
第32表	D 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)196
第33表	D 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)197
第34表	D 区出土遺物觀察表石製品・金属製品197
第35表	E 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)198
第36表	E 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)199
第37表	E 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)200
第38表	E 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(4)201
第39表	E 区出土遺物觀察表石製品・金属製品201
第40表	F-1 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)	202
第41表	F-1 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)	203
第42表	F-1 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(3)	204
第43表	F-2 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(1)	204
第44表	F-2 区出土遺物觀察表土器・陶磁器等(2)	205
第45表	F 区出土遺物觀察表石製品205

図版目次

図版1 A区 調査前風景	209	D区 SE1001断面	229
A区 第1遺構面掘削状況	209	図版22 E区 西側完掘状況	230
図版2 A区 第1遺構面検出状況	210	E区 東側完掘状況	230
A区 SX1002遺物出土状況	210	図版23 E区 南壁上層断面	231
図版3 A区 第2遺構面検出状況	211	E区 確認トレント掘削状況	231
A区 SD2001遺物出土状況	211	図版24 F-1区 調査前風景	232
図版4 A区 SD2001偏右検出状況	212	F-2区 調査前風景	232
A区 SD2001完掘状況	212	図版25 F-1区 機械掘削状況	233
図版5 A区 SK2006遺物出土状況	213	F-2区 人力掘削状況	233
A区 SK2007遺物出土状況	213	図版26 F-1区 SK1008遺物出土状況	234
図版6 A区 SK2007遺物出土状況	214	F-1区 SP1001遺物出土状況	234
A区 SK2007完掘状況	214	図版27 F-1区 SP1002遺物出土状況	235
図版7 A区 SR3001遺物出土状況	215	F-1区 北壁土層断面	235
A区 第3遺構面完掘状況	215	図版28 F-1区 北側完掘状況	236
図版8 B区 調査前風景	216	F-1区 南側完掘状況	236
B区 機械掘削状況	216	図版29 F-2区 北壁土層断面	237
図版9 B-1区 第2遺構面完掘状況	217	F-2区 完掘状況	237
B-2区 第2遺構面完掘状況	217	図版30 A区 SR3001流路内出土遺物	238
図版10 B-3区 第1遺構面完掘状況	218	図版31 A区 SD2001(1)	239
B-3区 第2遺構面完掘状況	218	図版32 A区 SD2001(2) SK2003 SK2004 SK2005 SK	240
図版11 B-3区 SK1017遺物出土状況	219	2006	240
B-1区 SD2102小柄出土状況	219	図版33 A区 SK2007 SK2008 第2遺構面SP群 SX	241
図版12 B-2区 SD2101貯蔵状況	220	2001	241
B-2区 SD2101完掘状況	220	図版34 A区 SK1001 第1遺構面SP群 SX1002(1)	242
図版13 C区 調査前風景	221		242
C区 重機掘削状況	221	図版35 A区 SX1002(2) SX1003 第1包含層	243
図版14 C区 人力掘削状況	222	図版36 B-1区 SD2102 SK2102 第2包含層 B-2区	243
C区 作業状況	222	SD2101 第2包含層 B-3区 SR2001 SR2002	244
図版15 C区 第1遺構面(南側)完掘状況	223	SR2003	244
図版16 C区 第1遺構面(北側)完掘状況	224	図版37 B-3区 SD1001 SK1017 SK1018 SK1030	245
図版17 C区 第2遺構面(北側)完掘状況	225	SP1040 SX1001	245
図版18 C区 第1遺構面遺物出土状況	226	図版38 B-3区 第2包含層(1)	246
図版19 D・E区 調査前風景	227	図版39 B-3区 第2包含層(2)	247
E区 人力掘削状況	227	図版40 B-3区 第2包含層(3)	248
図版20 D区 西側完掘状況	228	図版41 B-3区 第2包含層(4)	249
D区 東側完掘状況	228	図版42 C区 SR2001(1)	250
図版21 D区 南壁土層断面	229	図版43 C区 SR2001(2)	251

図版44 C 区 SR2001(3).....	252
図版45 C 区 SR2001(4).....	253
図版46 C 区 SD1001	254
図版47 C 区 SK1003 SK1004 SK1005 SK1014	255
図版48 C 区 SK1038 第1遺構面 SP群	256
図版49 C 区 SR1001(1).....	257
図版50 C 区 SR1001(2).....	258
図版51 C 区 SR1001(3) SR1002	259
図版52 C 区 第1包含層(1)	260
図版53 C 区 第1包含層(2)	261
図版54 C 区 第1包含層(3)	262
図版55 D 区 SD2001 SK2001 第2遺構面 SP群 第1遺構面 SP群	263
図版56 D 区 SD1009 SD1015 SD1016 SE1001 SK1007	264
図版57 D 区 第2包含層(1)	265
図版58 D 区 第2包含層(2)	266
図版59 E 区 SD1001 SD1002 SD1004 SD1006	267
図版60 E 区 SD1008 SD1013	268
図版61 E 区 SD1014	269
図版62 E 区 SK1001 SK1002 SK1003 SK1011 SK1012 SP1002 SX1001	270
図版63 E 区 第1包含層(1)	271
図版64 E 区 第1包含層(2)	272
図版65 F-1区 SK1001 SK1005 SK1007	273
図版66 F-1区 SK1008 SK1009	274
図版67 F-1区 第1遺構面 SP群	275
図版68 F-1区 第1包含層	276
図版69 F-2区 SD1002 第1包含層	277

写 真 目 次

写真1 田宮遺跡より出土した貝（一部）	163
写真2 田宮遺跡より出土した獸骨	164

資 料 目 次

資料1 田宮遺跡出土獸骨同定結果	163
------------------------	-----

I 調査の経緯



1 調査に至る経緯

都市計画道路常三島中島田線は、徳島市街地北西部吉野川南岸地域において、国道192号線バイパス的役割を果たす幹線道路であり、沿線には学校・公園等の公共施設、住居、商店等が密集している。しかしながら、本路線は、歩道が未整備であるうえ、道路幅員が4.0m～7.5mと狭小であることから朝夕の通勤時には交通混雑をきたし、幹線道路としての機能を著しく低下させてきた経緯がある。こうした支障を解消すべく、徳島県は平成5年度から常三島中島田線のうち、徳島市中吉野町4丁目から同市南田宮2丁目の延長5.45kmの区間において車道の拡幅と歩道の設置を中心とした事業計画を進めてきた。

事業計画の進捗に伴い、平成6年度に徳島県土木部（現徳土整備部）都市道路整備局（以下、「都市道路整備局」という。）から徳島県教育委員会文化課（現文化財課、以下、「文化財課」という。）に対し、当該事業区間の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての協議の申し入れがあった。当該区間の終点である南田宮2丁目から西方およそ600mの地点では、平成3～5年度にかけて、やはり常三島中島田線の工事が実施されており、中世の集落遺跡である中島田遺跡が確認されている。今回の工事区間は、市街化により表面的な遺跡の存在把握が難しい地域であり、中島田遺跡の東側に隣接する地域でもあることから、未知の遺跡が存在する可能性が考えられた。そこで文化財課は、同年7月に開催された埋蔵文化財発掘調査連絡調整会議において、都市道路整備局に対し、工事着手前に埋蔵文化財の有無確認のための試掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認された場合は、その取り扱いについて、改めて協議を持つこと等の方針を示した。これを受けて都市道路整備局は、文化財課に対し、試掘調査を依頼（平成8.10.1 都道局第334号）し、文化財課がこれを承諾（平成8.10.18教文課第474号）した。

前述したように常三島中島田線は事業区間が市街地にあり、延長距離も比較的長いことから、用地取得には時間を要した。そのため、試掘調査は平成8年12月以降、新たに用地が取得される度に順次実施し、また、官民境界として本体工事に先行して施工される側溝工事等に伴う立会調査を繰り返すこと



第1図 田宮遺跡位置図

発掘調査必要区間の絞り込みに努めてきた。その結果、徳島市南田宮3丁目から4丁目にかけての区間で中世集落遺跡の存在が確認され、新たに田宮遺跡と呼称することとされた。文化財課と都市道路整備局は、田宮遺跡の取り扱いについて、改めて協議を持ち、工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、取得用地が一定のまとまりをみた段階で年次毎に財団法人徳島県埋蔵文化財センターに委託して、平成9・10・12・14・15の5ヶ年間に順次実施された。

調査体制及び整理体制は以下のとおりである。

<総括、総務担当>

○財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理 事 長 安藝 武（平成9年度）

青木 武久（平成10・11・12年度）

松村 通治（平成13・14・15・16年度）

佐藤 勉（平成17年度）

専務理事兼所長 筒井 豊祐（平成9年度）

寒川 光明（平成10・11・12年度）

本淨 敏之（平成13・14・15年度）

浦上 純二（平成17年度）

常務理事兼事務局長 庄野 徳保（平成9年度）

細川 靖夫（平成10年度）

伊丹 康裕（平成13年度）

西村 和博（平成14・15年度）

河野 幸一（平成16年度）

次長兼総務課長 長江 仁（平成9年度）

井後 伸一（平成10年度）

高野 明（平成13年度）

山本 高史（平成14・15年度）

古田 哲朗（平成17年度）

調査課長 島巡 賢二（平成9年度）

苔原 康夫（平成10・11・12・13・14年度）

新居 文和（平成15年度）

整理普及課長 島巡 賢二（平成17年度）

調査係長　南　信義（平成9年度）
　　　　　市村　みね（平成10年度）
　　　　　武市　文雄（平成10・11・12年度）
　　　　　光山　忠幸（平成12・13年度）
　　　　　新居　文和（平成14年度）

設計係長　原田　敏夫（平成14年度）
整理係長　豊田　大之介（平成17年度）
普及係長　関本　秋夫（平成17年度）
総務係長　福本　紀美子（平成12・13・14年度）
　　　　　坂尾　俊一（平成15・16・17年度）
事務主任　鈴木　智栄（平成15・16年度）
　　　　　浦川　明美（平成17年度）
事務主任　西木　未香（平成9年度）
　　　　　佐藤　真紀（平成10年度）

<発掘調査担当>

○徳島県埋蔵文化財センター

研究員　近藤　玲　湯浅　文剛（平成9年度）
　　　　　大石　修一　志摩　誠一（平成10年度）
　　　　　須崎　一幸（平成12・14・15年度）
　　　　　梶河　智恵（平成12年度）
　　　　　前田　隆司（平成14年度）
　　　　　庄司　俊也（平成15年度）

<整理担当>

○徳島県埋蔵文化財センター

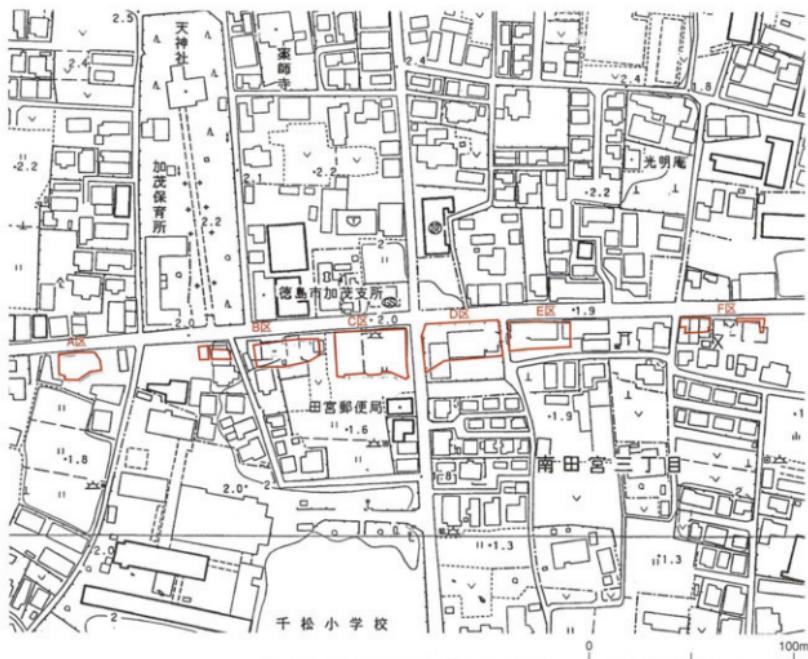
研究員　田所　賢治（平成17年度）

2 調査の経過

(1) 調査の経過

今回の調査は、街路事業常三島中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財調査で、道路部分に限って調査区を設定し、平成9年6月1日～平成15年8月31日の7か年間に亘り5次の発掘調査を実施した。総面積は2,745m²である。調査区は、県道沿線の主に商業地で個人商店などとして利用されてきた場所でもあり近世以降も継続して生活が営まれたことによって遺構面は大きな攢乱を受けている部分が多い。

調査区は大きくはA～F区の6調査区に区割しての調査を実施した。



第2図 調査区位置図（徳島市全図）

(2) 調査区割

調査区グリッドの設定に際しては、第IV系国土座標を基準とした。5m間隔のメッシュを1グリッドとして調査対象地区を包み込む形で設定した。

南西隅を基準として、全調査区をX軸・Y軸線上に北にABC…、東に123…の順に記号を振り、それらの組み合わせによって南北方向からA-1, A-2, A-3…J-75のようにグリッド名を表すこととした。（第3図）各調査区の詳細は以下の通りである。

平成9年度（1997年度）第1次調査は遺跡全体の西端部にあたるA調査区で、遺構面の広がりが予

想される部分420平方メートルについて平成9年6月1日から7月31日までの3か月間実施した。

遺構面は調査区により異なるが、A調査区には第3遺構面までが確認出来た。調査区は全体に擾乱され、特に東側、南側が大きく影響を受けた状況であった。

第1遺構面は中～近世の遺構で第2遺構面が中世の遺構面、第3遺構面は全面が自然流路の砂層堆積層である。検出面より15cm下の標高0.85mより湧水のため完掘は出来なかった。

平成10年度（1998年度）第2次調査は東西に延びる遺跡のほぼ中央部にあたるC調査区で、平成10年4月2日から8月31日までの5か月間820平方メートルを実施した。

C調査区には第2遺構面までが確認出来た。第1遺構面からは近世の遺構と中近世の遺物が、また第2遺構面ではA区で確認された自然流路が同様に全面にわたり確認された。

平成12年度（2000年度）第3次調査は、A調査区とC調査区の中間に位置するB調査区で、平成12年9月1日から12月31日までの4か月間に495平方メートルを実施した。B調査区は3地点に分割されておりそれぞれ西側よりB-1区、B-2区、B-3区と細分した。

B調査区においてもそれぞれの調査区で第2遺構面までが確認出来た。3地区とも調査前の標高は1.9m、地表の下約40cmまで盛土や表土が堆積していた。第1遺構面は中近世の遺構が第2遺構面はA・C地区同様の自然流路が確認された。

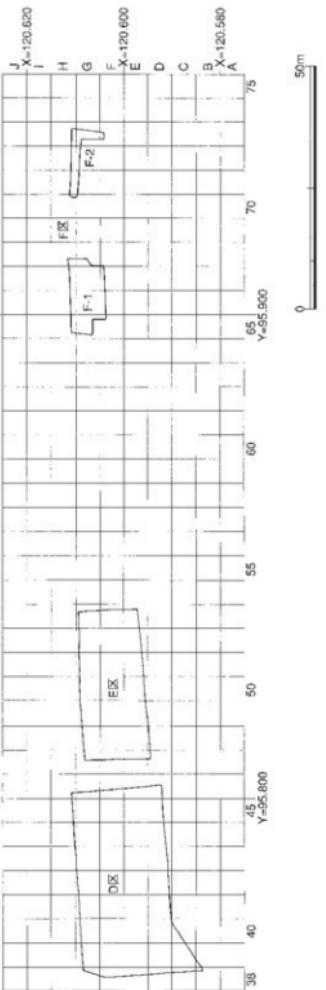
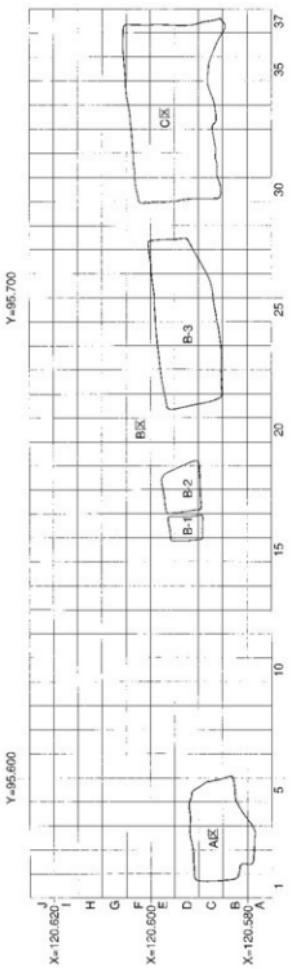
平成14年度（2002年度）第4次調査は遺跡東端部にあたるF調査区で、平成15年2月1日から3月31日までの2か月間に135平方メートルを実施した。F調査区は2地点に分割されており、それぞれ西側をF-1区、東側をF-2区と細分した。

F調査区においても建物基礎による擾乱が多く両調査区共に道路面から約60cm深く下がる位置より調査を開始した。遺構面はどちらも1面のみで、F-1区においては大きな擾乱が東西にあり、確認出来た遺構は中央部のみで同様にF-2区においても西側のみの調査となつたが、中近世の遺物が確認された。遺構面の標高はF-1区が0.9m、F-2区が0.85mであった。

最終調査の第5次調査は平成15年度（2003年度）にC調査区とF調査区の中間点に西側をD調査区、すぐ東側をE調査区に設定して平成15年6月1日から8月31日までの3か月間に875平方メートルを調査した。

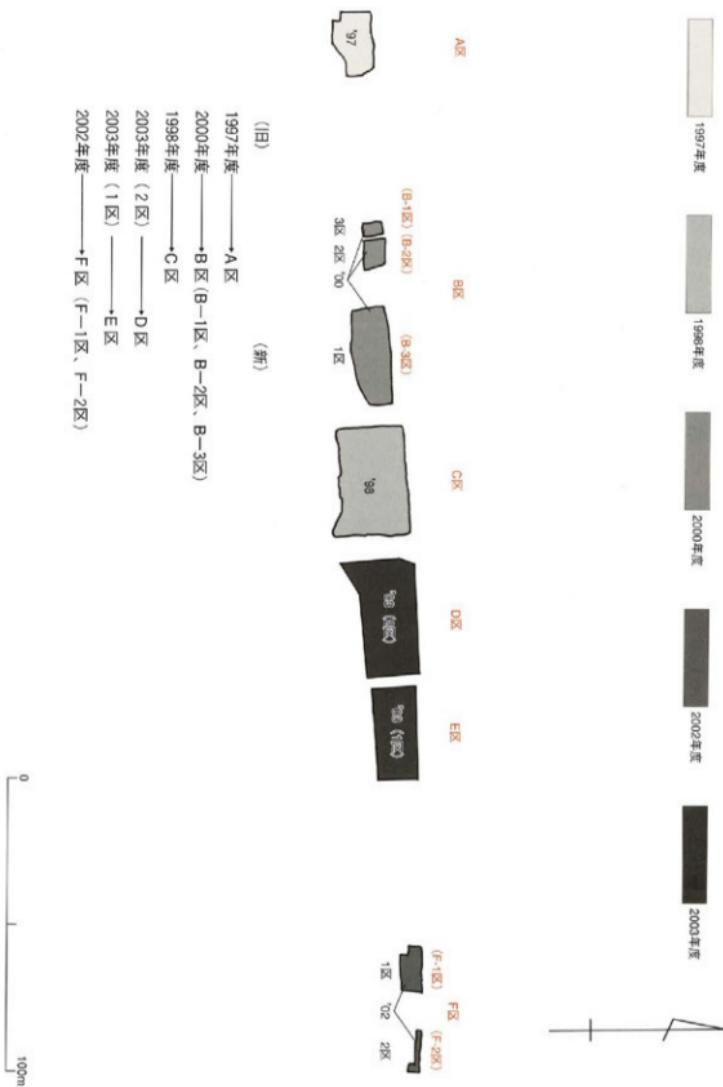
D・E区共他の調査区同様建物基礎による擾乱が多く、特にE区においては、擾乱により遺構の全体像を把握することも難しく、第1遺構面のみ確認出来た。中世末以降の遺構面と考えられる。D区については2面の遺構面を確認出来た。第1遺構面はE区同様中世末以降の遺構と考えられ、第2遺構面は遺構が南北隅に集中し中央から東側には遺構が途切れる。

—



第3図 グリッド配置図

第4図 各年次の課題区分の配置変動調査区の対応



(3) 調査日誌抄

1997年度 (A 区)

6月2日 調査準備開始
 6月10日 機械掘削開始
 6月12日 人力掘削開始
 6月16日 第1造構面 A 造構検出
 6月17日 第1造構面造構掘削開始
 6月18日 第1造構面 A 完掘
 6月19日 人力掘削開始
 6月26日 第1造構面 B 造構検出
 6月27日 造構掘削開始
 7月3日 第1造構面 B 完掘
 7月4日 人力掘削開始
 7月8日 第2造構面造構検出
 7月14日 第2造構面造構内掘削開始
 7月16日 第2造構面完掘・写真撮影
 7月18日 埋め戻し開始
 7月30日 調査終了

1998年度 (C 区)

4月2日 調査準備開始
 4月28日 (南側) 機械掘削開始
 4月30日 人力掘削開始
 5月26日 (南側) 第1造構面 A 完掘
 6月8日 (南側) 第1造構面 B 完掘
 6月16日 (南側) 第2造構面完掘
 6月18日 埋め戻し (南側)

機械掘削開始 (北側)

7月14日 (北側) 第1造構面 A 完掘
 8月4日 (北側) 第1造構面 B 完掘
 8月10日 (北側) 第2造構面完掘
 8月14日 引っ越し
 調査終了
 8月17日 埋め戻し (北側)
 8月20日 仮開い撤去
 8月28日 プレハブ撤去

2000年度 (B 区)

9月1日 調査準備及び機械掘削開始
 9月7日 B-3区人力掘削開始
 10月3日 B-3区第1造構面造構検出
 10月4日 B-3区造構掘削
 B-2区機械掘削・人力掘削開始
 10月6日 B-2区第1造構面造構検出
 10月12日 B-2区造構掘削開始
 10月13日 B-3区第1造構面完掘
 10月17日 B-2区第2包含層人力掘削開始
 10月24日 B-3区第2包含層人力掘削開始
 11月6日 B-1区機械掘削開始
 11月7日 B-1区第1造構面造構検出
 11月8日 B-3区第2造構面造構検出
 B-2区機械掘削 (東半分)
 11月9日 B-3区第2造構面掘削開始
 B-2区第2造構面造構検出
 11月13日 B-1区第2造構面造構検出
 11月27日 B-1・B-2区第2造構面完掘
 11月29日 B-3区第2造構面完掘
 12月1日 B-3区第3包含層人力掘削開始
 12月7日 B-3区第3造構面造構検出
 12月8日 B-3区第3造構面造構掘削開始
 12月13日 B-3区第3造構面完掘
 12月19日 調査終了

2002年度 (F 区)

2月3日 洞室準備開始
 2月17日 F-1区人力掘削開始
 2月19日 F-2区人力掘削開始
 2月20日 F-1区第1造構面造構検出
 2月21日 F-1区第1造構面造構掘削
 2月24日 F-2区第1造構面造構検出
 2月25日 F-2区第1造構面造構掘削
 F-2区第1造構面造構完掘

2月27日 F-2区空掘 調査終了
2月28日 F-2区埋め戻し開始
3月6日 F-1区遺構完掘
3月7日 F-1区調査終了
3月11日 F-1区埋め戻し開始
3月12日 調査終了

2003年度（D区・E区）

6月2日 調査準備開始
機械掘削開始
6月9日 E区人力掘削開始
6月23日 D区機械掘削開始
7月2日 E区第1遺構面遺構検出
7月7日 D区人力掘削開始
7月16日 E区遺構掘削開始
7月25日 D区遺構検出
遺構掘削開始
8月4日 D区・E区第1遺構面遺構完掘
D区・E区空掘
8月5日 E区確認トレンチ掘削
D区人力掘削開始
8月6日 E区埋め戻し開始
8月19日 D区第2遺構面検出
8月25日 D区第2遺構面完掘
D区埋め戻し開始
8月26日 D区埋め戻し完了
調査終了
8月29日 引っ越し

整理作業

2005年

4月2日 整理作業開始

2006年

3月31日 整理作業終了



II 遺跡の立地と環境



1 地理的環境

本遺跡は、徳島県の北東部、徳島市南田宮4丁目他に所在する。

当地は四国最大の河川、別名「四国三郎」と称される吉野川が西から東に流れ形成された沖積平野である徳島平野上に位置する。

吉野川は水源を高知県瓶ヶ森山南方に発し、四国山地から中央構造線に沿って東流し、紀伊水道に注いでおり、総延長は194km、流域面積は3,750km²に及ぶ。その吉野川下流域に楔形に細長く広がる沖積平野が徳島平野であり、河口付近は網目状に発達した三角州と自然堤防からなる。徳島市は、この吉野川河口付近の右岸に市街地を形成してきた。

吉野川河口部の汀線は、海面変動により歴史的に大きく変動してきた。ヴュルム氷河期最末期にあたる約28,000～18,000年前には、海面の高さは現在よりも100m前後低かったと想定され、当時四国は本州と陸続きであったばかりでなく、日本列島自体が大陸と陸続きであったと考えられる。その後の温暖化により海面が次第に上昇し、紀文海進のピークにあたる約6,000年前には、吉野川河口部の汀線は現地標高5m付近の内陸部まで進入していたと推定されている。

その後、弥生時代以降の寒冷化による海面の低下と、吉野川から運ばれる土砂の堆積により、デルタが発達した。吉野川河口部には近世初頭までラグーン状の入り江がみられたが、以後の新田開発によって次第に陸地化され、今日の徳島平野が形成された。

吉野川の流路の安定は、元禄期以降における新川掘抜による直流化と、明治になってオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらによる近代技術の導入によって、ようやく達成されるのである。吉野川中流から下流域にかけて、島・洲・須・須賀・塚などのつく地名が数多く残るが、こうした場所に旧来は集落が形成してきた。これは自然堤防が発達隆起したもので、集落は自然堤防の形にそって東西方向のものが多い。

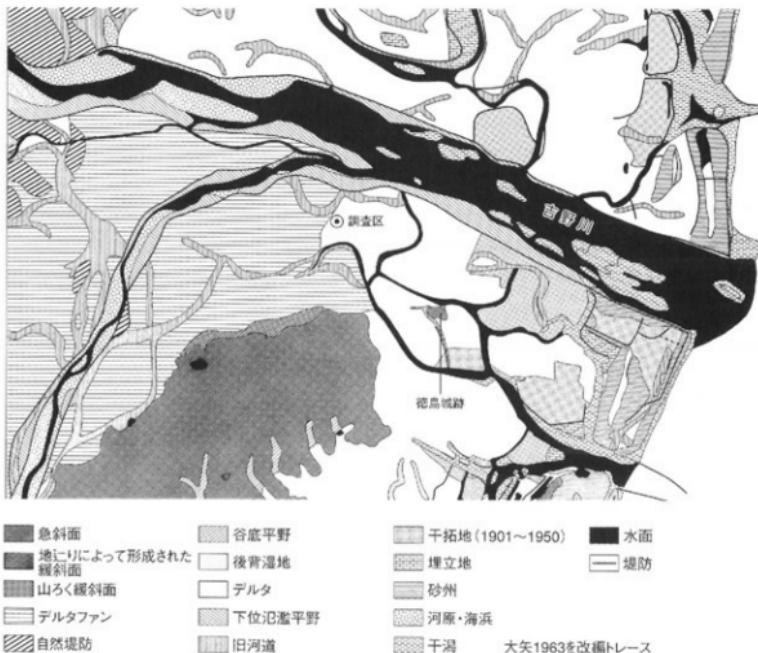


第5図 徳島県の地形図

徳島は面積の約80%が山地であり、北から讃岐山脈、四国山地、海部山地等が東西方向に連なっている。吉野川北岸に沿って東西に延びる中央構造線により、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯とに分けられる。北側（内帯）は中生代の和泉層群を主体とする讃岐山脈が、南側（外帯）は北から順に三波川変成帯、御荷鉢変成帯、古生代の砂岩泥岩互層の秩父帯、中生代から古第三紀にかけて堆積した砂岩泥岩互層の四十万十帯が配列し、四国山地、海部山地を形成している。このうち、三波川帯は緑色片岩（慣用名「青石」）、黒色片岩等の結晶片岩で占められている。

本遺跡は、徳島市の中心部よりやや北西の周辺部に位置し、徳島市南田宮四丁目その他に所在する。この地区は吉野川河口南岸のデルタのひとつである吉野川と鮎喰川の合流する地点の南で、田宮川の左岸、標高約2m前後の沖積地に立地する。

調査区の現状は、県道常三島中島田線沿いの主に個人商店等が立ち並ぶ商業地であった。周辺は都市化が進み近世以前の面影は全く見られない。



第6図 周辺の地形分類図

(参考文献)

- 福井好行「吉野川下流域に於ける流路の変遷」「阿波の歴史地理 第一」 1964
 寺戸恒夫「徳島県の地形」「阿波の絵図」 徳島建設文化研究会 1994
 平井正午「城下町起源の都市徳島」 寺戸恒夫著「徳島の地理」 香島地理学会 1995
 古田昇「徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程」「立命館地理学」 8号 1996

2 歴史的環境

ここでは、本遺跡が所在する吉野川とその支流鮎喰川、さらに剣山系の雲早山と高丸山を水源とし、徳島市南東部で紀伊水道に注ぐ勝浦川が形成する沖積平野と、その周辺部に立地する遺跡を取り上げ、歴史的環境を概観する。

縄文時代

縄文時代の遺跡として知られるものに、城山貝塚、三谷遺跡、庄遺跡、名東遺跡などがある。城山貝塚は、城ノ内の城山のふもとの洞窟や岩陰に残る貝塚であり、縄文時代後期の土器の他、3体の屈葬人骨も出土している¹⁾。また、肩山北麓の旧河道の後背湿地上にあたる佐古六番町の三谷遺跡からは、貝塚より出土した7体の犬の埋葬遺体が注目されるほか、晩期の突帯文土器が出土している。さらに北陸系の注口土器に類似する形態文様をもつ鉢や三叉文をもつ楕円土器、舟形土器など広範囲にわたる交流を示す遺物が出土している²⁾。ほかに、鮎喰川右岸の微高地に位置する庄遺跡（日赤血液センター）からは晩期前半の貝殻条痕文をもつ深鉢が、同じく庄遺跡（蔵本閉地）の自然流路からは晩期の浅鉢や石鋤が³⁾、鮎喰右岸の名東遺跡（天理教会地点）からは晩期の浅鉢・深鉢、石器類がそれぞれ出土している⁴⁾。

一方、鮎喰川左岸の矢野遺跡からは、縄文時代後期から晩期にかけての上器・石器が多量に出土している。ことに赤彩土器や土製仮面は祭祀の様相をうかがわせ、水銀朱の精製に使用された石杵・石臼の出土とともに注目される⁵⁾。

弥生時代

弥生時代には鮎喰川が形成する沖積地、すなわち東は庄町から西は国府町にかけての広い範囲内で遺跡が確認される。右岸の眉山北西麓に展開する庄遺跡・南庄遺跡・鮎喰遺跡・名東遺跡、左岸の矢野遺跡がそれである。庄遺跡・南庄遺跡は眉山裾に展開した県内最大級の弥生時代の集落遺跡であるが、地形的には小規模の自然流路が錯綜しており、微高地上を中心に大規模な集落が営まれた。まず、南庄遺跡では中期後半から後期前半にかけての竪穴住居跡群が検出されたほか、微高地縁辺部では環濠も確認されている⁶⁾。

遺物として注目されるものに、弥生時代後半の土器を含む流路内より出土した鉄劍がある。切先から茎までほぼ完全に遺存しており、長さ28cmを測る。また、庄遺跡（徳島大学医学部構内）からは、総数20基以上の土壙墓をはじめ箱式石棺・配石墓・甕棺墓が検出されているのをはじめ⁷⁾、朱塗りのミニチュア砧・平鍬・臼・梯子・人物像を刻んだ板状木製品などの、祭祀具から農耕具にわたる木製品が出土している⁸⁾。隣接する庄遺跡（兵営西内線地区）からも平鍬・二又鍬・横槌・匙・装飾付把手状木製品・長柄鎌・田舟などの木製品が出土している⁹⁾。また、近年の医学部構内の調査では弥生段階の大規模な本格的溢流水路が発見されている¹⁰⁾。また、鮎喰遺跡からは弥生後期から古墳前期にかけての住居跡が¹¹⁾、名東遺跡からも住居跡や方形周溝墓などが検出されている¹²⁾。

鮎喰川左岸の矢野遺跡は、丁寧に埋納された銅鐸が集落内から出土したことで注目される、大規模な弥生時代の集落遺跡である¹³⁾。銅鐸のはか、朱の付着した土器や石杵、蛇紋岩製勾玉の工房の発見でも重要である¹⁴⁾。この庄遺跡や矢野遺跡が所在する鮎喰川沿岸は、多くの銅鐸が出土していることでも注目される。前述の矢野銅鐸や、同じく発掘調査によって出土した名東銅鐸のはか¹⁵⁾、安都真銅鐸¹⁶⁾や源田銅鐸¹⁷⁾が知られる。なお、源田遺跡からは銅鐸とならんで銅劍も伴出している。



第7図 周辺の遺跡分布図

1 田宮遺跡（本調査区）	10 徳島城下町遺跡	18 寺島本町東3丁目遺跡	27 延生軒跡
2 中島田遺跡	中島田町1丁目地点	19 寺島本町西2丁目遺跡	28 畿山古墳
3 南島田遺跡	新島町1丁目遺跡	20 弓町1丁目遺跡	29 橋口古墳
4 庄遺跡	新島町3丁目遺跡	21 富田橋遺跡	30 橋口遺跡
5 南庄遺跡	中徳島町2丁目遺跡	22 勢見山古墳群	31 八人塚古墳
6 名東遺跡	福島2丁目遺跡	23 恵解山古墳群	32 穴不動古墳
7 黙喫遺跡	常三島遺跡	24 川河内美田銅鐸出土土地	33 節勾山古墳群
8 三谷遺跡	北常三島町1丁目遺跡	25 天神山古墳	34 守護町勝瑞遺跡
9 城山貝塚	城ノ内遺跡徳島城跡	26 向寺山古墳	35 正貴寺遺跡

古墳時代

古墳時代になると、国府町を取り囲む山塊に古墳が数多く築かれる。南東部にあたる眉山山塊の北西麓には、県内最大級の巨石を用いた横穴式石室をもつ穴不動古墳、節勾山古墳群、積石による前方後円墳の八人塚古墳などがある。一方、西の気延山山塊には県内最大の古墳群が形成されている。奥谷古墳群²⁴⁾、宮谷古墳²⁵⁾、矢野古墳・尼寺古墳群²⁶⁾、ひびき岩古墳群²⁷⁾・利包古墳・山ノ神古墳群・高良古墳・清成古墳²⁸⁾・曾我氏神社古墳群²⁹⁾・長谷古墳など、約100基の古墳が確認されている。ことに、ひびき岩古墳群は17基の古墳から構成されるが、そのうちの16号墳が平安時代末期から鎌倉時代にかけて火葬墓として再利用されていたことがわかる。

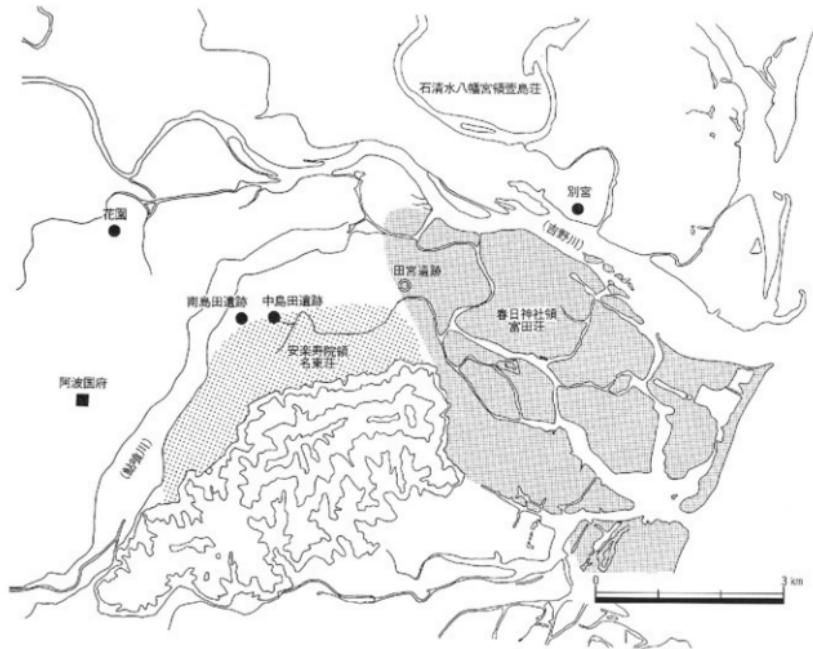
矢野古墳は結晶片岩の巨石を用いた両袖式の横穴式石室をもつ長方形の玄室平面プランを示しており、吉野川中流域の横穴式石室とは異なった畿内的な様相が想定されている。宮谷古墳は、県内で初めて三角縁神獣鏡が出土している。また、奥谷古墳群1号墳は、県内で唯一の前方後方墳である。

また、眉山山塊の東南麓や園瀬川南岸地域にも古墳群が広がる。眉山東南麓には勢見山古墳・恵解山古墳群・園瀬川南岸の丘陵部にも天神山古墳・向寺山古墳・樋口古墳群・巽山古墳・鶴鳥山古墳群³⁰⁾などが知られている。なお、この時期の集落跡が徳島大学蔵本キャンパス内の庄・蔵本遺跡で発見されている³¹⁾。

古代

律令制時代に推移すると、矢野遺跡の所在する現国府町域に国府が営まれる。政府跡の確認は現段階では明確でないものの、徳島市教育委員会の数次にわたる調査によって、觀音寺付近が有力となってきている³²⁾。そのほか、この時期に該当する遺跡として阿波国分寺跡³³⁾・阿波国分尼寺跡³⁴⁾・石井廃寺³⁵⁾・高畠遺跡³⁶⁾や、国分寺等に瓦を供給していたと考えられる内ノ御田瓦窯跡³⁷⁾、さらには名東郡衙跡に関わると考えられる大規模な掘立柱建物跡や墨書き土器、卉串・刀形・鳥形・舟形などの木製祭祀具が認められた庄遺跡（徳島大学蔵本園地）³⁸⁾などが知られる。また、庄遺跡（加茂名中学校体育館）においても奈良時代の赤色顔料塗彩土器が出上している³⁹⁾。なお、鮎喰川が眉山山塊西側を通り抜け、沖積平野に流れ出ようとする名東町3丁目の眉山西麓に位置する大浦遺跡から、平安時代末期の密教法具・僧具・梵音具の梵鐘等の仏具の土製鉢型や輪羽口・塔壇などが出土していることも注目してよい⁴⁰⁾。

文献史料からは、律令時代には東大寺の初期莊園である新島莊が名方郡内に成立している。東大寺に伝えられた絵図類を通してその所在地が検討されるとともに、吉野川河口付近での低湿地の開発のあり様をうかがわせる、総面積80余町の莊園である⁴¹⁾。



第8図 田宮遺跡周辺の歴史的環境（中世）
（「中島田遺跡」「南島田遺跡」より転載）

中世

中世になると、近傍では安楽寿院領名東荘・春日神社領富田荘・石清水八幡宮領萱島荘などの所領が文献史料より確認できる³⁰⁾。遺構・遺物で注目されるのが、中島田町2丁目に所在する中島田遺跡の成果である。中島田遺跡は、旧河川の「中州」に立地した都市的様相をもった鎌倉時代後期の遺跡で、青磁・白磁や東播系須恵質土器・備前焼・吉備系土器質碗などの国内外からの搬入土器が多量に出土し、広範な海上交易を具体的に示している³¹⁾。

また、中島田遺跡の西に位置する南島田遺跡では14~15世紀の遺構・遺物が発見されている³²⁾。しかしながら、中島田遺跡も中世後期にかけては存続せず、近世にかけては水田として土地利用された模様である。ほかに、名東遺跡（天神地区）でも中世段階の溝などが検出されている³³⁾。

近世

1585年、豊臣秀吉は四国討伐に従い功績のあった蜂須賀氏に、阿波國17万5千石を与えた。父正勝に変わり蜂須賀家政が領有することになり、当初は長宗我部氏の旧城である一宮城を居城に据えていたが、すぐに徳島城に移転した。徳島城は現在の城山付近に位置し、その前身である猪山城の起源及び蜂須賀氏入城の正確な時期は不明であるが、蜂須賀氏阿波入部の数年前には徳島城に移転していたと考え

られる。

蜂須賀氏の徳島入部に伴い、城下町の建設も平行して進められた。城下町は吉野川分流の新町川、寺島川、助任川、福島川、沖洲川等の網状河川を利用した「島普請」により建設され、これらの河川により形成された三角州上に、城郭の置かれた徳島をはじめ、出来島、寺島、福島、常三島、住吉島の6つの島と、それらの島を取り囲むように配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区が建設された。中心部の徳島、寺島地区には上級藩士屋敷、城下の入口にあたる周辺の富山、佐古、助任地区には、町屋を並ぶした下級武士屋敷が配置されて、城下町の防御線とされた。その内で徳島に位置する新蔵町は、藩の新御蔵（米倉）があったので、御新蔵丁と呼ばれた。1640年代にはおおむね城下建設が完成し、急速に人口も増加した。急速な城下町建設を促進させた背景には、蜂須賀氏による大規模な土木建設資本注入のほかに、近世初頭の海退も多分に影響したものと考えられる。その後、徳島藩は国替えもなく幕末まで蜂須賀氏25万石による支配が継続と続いた。

(注)

- 1) 島居龍藏「徳島城山の岩窟」「考古学雑誌」12巻9号 1922, 同「徳島城山の岩窟と貝塚」「教育画報」16巻5号 1923
- 2) 森 敬介「徳島市水道三谷滝過池に於ける原始独木舟発見の顛末（上）（下）」「歴史と地理」18巻1号・18巻5号 1926, 勝浦康守「徳島市三谷遺跡－徳島の縄文晚期突帯文土器の終焉」「文化財学論集」 文化財学論集刊行会 1994, 「第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る」 徳島市教育委員会 1995, 勝浦康守「三谷遺跡－徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査－」 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会 1997
- 3) 「埋蔵文化財速報展 縄文の彩り」 徳島県埋蔵文化財センター 1996
- 4) 「第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る」 徳島市教育委員会 1988, 「名東遺跡発掘調査概要」名東町2丁目・天理教国名人教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』 名東遺跡発掘調査委員会 1990
- 5) 前掲注3)
- 6) 滝山雄一「徳島県庄遺跡」「日本考古学年報37（1984年度版）」 日本考古学協会 1985, 「第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る」 徳島市教育委員会 1986
- 7) 岡内三真・河野雄次「徳島県庄遺跡－徳島大学医学部同窓会館建設に伴う調査－」「日本考古学年報39（1986年度版）」 日本考古学協会 1988
- 8) 菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988
- 9) 「第6回埋蔵文化財資料展 庄遺跡の人々のくらしと文化」 徳島市教育委員会 1985, 一山典・滝山雄一「徳島県庄遺跡出土の弥生時代木製品」「考古学ジャーナル」252号 1985, 滝山雄一「徳島県庄遺跡」「日本考古学年報37（1984年度版）」 日本考古学協会 1986
- 10) 北條芳隆「吉野川下流域における初期灌漑施設と条里地割」「デルタにおける古代の開発に関する地図的情報の収集と解析」「科研費報告書（代表 丸山幸彦）」 1998
- 11) 「庄・鮎喰遺跡－一般国道192号拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」 徳島市教育委員会 1985
- 12) 前掲注4)「名東遺跡発掘調査概要」、「名東遺跡（天神地区）－県営名東町団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」 徳島市教育委員会 1990, 藤川智之・氏家敏之他「名東遺跡」 徳島市教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター他 1995
- 13) 藤川智之他「矢野遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報」4号 1993, 「矢野銅鐸」 徳島県埋蔵文化財

- 14) 栗林成治「矢野遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報」5号 1994, 北條芳隆「徳島県における弥生の朱」「考古学ジャーナル」394号 1995
- 15) 前掲注4)『名東遺跡発掘調査概要』
- 16) 三木文雄「阿波国安都真出土の銅鏃とその遺跡」「考古学雑誌」50巻4号 1965, 魚島純・「銅鏃の自然科学的調査 一徳島市出土安都真銅鏃に見られる鉄掛けについてー」「文化財学論集」奈良大学文化財学論集刊行会 1994
- 17) 三木文雄「阿波国源田出土の銅劍銅鐸とその遺跡」「考古学雑誌」36巻2号 1950
- 18)『埋蔵文化財資料展 古墳時代の徳島市』徳島市教育委員会 1981
- 19)『徳島市文化財だより』No. 23・24 徳島市教育委員会 1990, 「第12回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る」徳島市教育委員会 1991, 一山 典・三宅良明「徳島県徳島市宮谷古墳」「日本考古学年報(1989年度版)」日本考古学協会 1991, 同「徳島県徳島市宮谷古墳」「日本考古学年報(1990年度版)」日本考古学協会 1992
- 20)『清成・尼寺古墳発掘調査概報』石井町教育委員会 1969
- 21) 結城孝典「ひびき岩16号墳発掘調査報告書」石井町教育委員会 1986
- 22) 天羽利夫「石井町清成・1号墳の調査」「徳島県博物館報」8号 1968, 前掲注20)『清成・尼寺古墳発掘調査概報』
- 23) 徳島県博物館「曾我氏神社古墳群発掘調査報告」「徳島県博物館紀要」13集 1982, 岡山真知子「曾我氏神社古墳群」「考古学ジャーナル」225号 1983
- 24)『徳島市鶴島山古墳群の調査ー発掘調査報告書』元興寺文化財研究所 1979
- 25) 徳島大学埋蔵文化財調査室編「庄・藏本遺跡ー徳島大学藏本キャンパスにおける発掘調査ー」徳島大学 1998
- 26)『阿波國府跡第1次調査概報』~『同 第10次調査概報』徳島市教育委員会 1983~1992, 「第16回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」企画展示「阿波國府とその周辺」と最近の発掘調査」徳島市教育委員会 1996
- 27)『阿波國分寺跡第1次調査概報』~『同 第3次調査概報』徳島市教育委員会 1979~1981
- 28)『阿波國分尼寺跡緊急発掘調査概報』・『同 第2次緊急発掘調査概報』徳島県教育委員会・石井町教育委員会 1971・1972
- 29) 斎藤 忠・三木文雄「石井廬寺跡第一次調査概報ー徳島県文化財報告書」徳島県 1958, 斎藤忠他「石井廬寺跡第二次調査概報ー徳島県文化財報告書三」徳島県 1959
- 30)「高畠遺跡ー県立国府養護学校プール建設工事に伴う発掘調査概要報告書ー」徳島県教育委員会 1990
- 31) 立花 博・天羽利夫「徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報・徳島県那賀郡古原岩陰遺跡調査概報」徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会 1970, 「内ノ御田須恵窯跡発掘調査中間報告」徳島市教育委員会 1981
- 32) 福家清司「庄遺跡出土の黒青土器銘「賀専尊」について」「高校地歴」20号 徳島県高校地理学会 1984, 福家清司・久保脇美朗「徳島県庄遺跡ー徳島大学藏本地区体育館地点の調査ー」「日本考古学年報36(1983年度版)」日本考古学協会 1986, なお、庄遺跡(兵營西内線)からも斎半・人形等の木製祭祀具が出土している。(前掲注6))
- 33) 勝浦康守「庄遺跡(学校施設建設工事)」「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6」徳島市教育委員会 1996

- 34) 一山 典・滝山雄一「徳島県大浦遺跡」『日本考古学年報38（1985年度版）』 日本考古学協会 1987
- 35) 丸山幸彦「古代の大河川下流域における開発と交易の進展—阿波國新島庄をめぐってー」『徳島大学総合科学部紀要（人文・芸術研究篇）』2巻 1989, 同「瀬戸内型の庄園」『新版古代の日本4 中国・四国』 角川書店 1992, 同「低湿地開発の進展と庄園返還運動—九世紀の阿波國新島庄ー」『徳島大学総合科学部 人間社会文化研究』2巻 1995, 同「南海道支道と庄園—新島庄勝浦地の位置づけをめぐってー」『徳島大学総合科学部 人間社会文化研究』3巻 1996, 福家清司「阿波國新島莊の所在地と条里の復原」『新版古代の日本10 古代資料研究の方法』 角川書店 1993, 同「阿波國名方郡新島莊図・大豆処図」金田章裕他編『日本古代莊園図』 東京大学出版会 1996, 金田章裕「阿波國東大寺領莊園の成立とその機能」虎尾俊哉編『伴侶国家の地方支配』 青川弘文館 1995。特に、丸山氏は東大寺による低湿地の開発には、折津国（讐波）で低湿地の開発に関わっていた日下部忌寸氏を中心に視点を据え、金田氏は絵図に描かれた堤が海水の進入による塩害を防ぐためのものであったと指摘されおり、注目される。
- 36) 福家清司「阿波國中世所領研究ノート」「四国中世史研究』1号 1990 また、富田莊については福家清司「阿波國富田莊の成立と開発」「徳島地方史研究会創立10周年記念論集 阿波・歴史と民衆」 南海ブックス 1981, 同「阿波富田莊の成立と変遷」「史窓』21号 徳島地方史研究会 1990, 阿部 猛「惡党大江泰兼—阿波國富田莊史断片ー」『日本社会史研究』35号 1994 などがある。鳴島莊については、福家清司「吉野川水運と莊園の成立」「学会誌古野川』創刊号 1997 がある。
- 37) 福家清司編「中島田遺跡・南島田遺跡—県道徳島鳴島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー」徳島県教育委員会 1989, 山下知之・小林一枝・石尾和仁「中島田遺跡II—都市計画道路常三局中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー」徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター 1996, 福家清司「中世土器の流通をめぐってー徳島市中島田遺跡出土遺物を通してー」「中世土器の基礎研究』IX 1993, 同「阿波中世水運史小考」「三好昭一郎先生還暦記念論集 歴史と文化・阿波からの視点」 同論集刊行会 1989, 同「遺跡が語る阿波中世の流通」「鳴門史学』7集 1993, 同「徳島市中島田遺跡の歴史的位置ー特に『名東庄倉本下市』との関係をめぐってー」「社会と信仰・阿波からの視点」 三好昭一郎先生古希記念論集刊行会 1999
- 38) 前掲注37)「中島田遺跡・南島田遺跡」
- 39) 前掲注11)「名東遺跡（天神地区）」、勝浦康守「名東遺跡発掘調査概要—老保健施設建設工事に伴う発掘調査ー」「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 2」 徳島市教育委員会 1992

（参考文献）

- 「角川日本地名大辞典36 徳島県」 角川書店 1986
菅原康夫「日本の古代遺跡37 徳島」 保育社 1988
「徳島城」編集委員会編「徳島城」 徳島市立図書館 1994
「日本歴史地名大系37 徳島県の地名」 平凡社 2000



III 調 査 成 果



1 基本層序

本遺跡全体の土層は、試掘調査を元に発掘調査を実施し1時期から3時期の遺構面（中世～近世）を確認した。遺跡周辺は都市化が進んだ市街地で、近世以前の面影は全く見られない。AからF区の調査区はすべて、主要道路に向した場所であり、遺跡は東西におよそ370m、南北におよそ40mの範囲に及ぶ。道路を除く、そのほとんどに古くから民家や店舗などの家屋が建てられていた跡地である。そのため、多くの擾乱が確認され、地面深くにまで及ぶ擾乱も少なくない。

A区（97年度）1次調査（第9図）

調査区は全体に擾乱され、特に東側と南側が大きく影響を受け、土層の確認も難しく、調査区の上層断面図も、北側と西側のみである。北側の断面を観察すると、大きく6層に分けることができる。1層は盛土・擾乱層、2・3層は中世～近世の遺物包含層、4・5層は中世の遺物包含層、6層は自然流路の砂層堆積層である。調査は4層上面を中世～近世の第1遺構面、5層上面を中世の第2遺構面、6層上面を第3遺構面として遺構検出をした。

B区（00年度）3次調査（第9図）

B-3区は大きく7つの層に分けることができる。元々1層の上部には、約40cm程度の盛土や表土が堆積しており、調査前の地盤は標高1.9m付近にあった。1層の黄褐色シルトが第1包含層であり、その下層にぶい黄褐色層には、遺物や炭化物が含まれており、第2包含層は暗褐色シルト層までである。この層には中世の遺物が多く含まれ、にぶい黄褐色砂質土の上面が第2遺構面である。

B-2区についても3区同様、地表の下に約40cmの盛土があり、その下に約20cmほど灰色砂質土層が堆積している。第1包含層ではなく、2層上面が第1遺構面であり、B-3区2層に対応する。さらにその下4層、黄褐色砂質土上面が第2遺構面であり、第3遺構面は確認出来なかった。

B-1区の堆積状況は、B-2区とはほぼ等しい。ただSK2102埋土の立ち上がりは不明瞭で、上面までの立ち上がりは確認出来なかった。B-1区においても第3遺構面は確認出来なかった。

C区（98年度）2次調査（第9図）

C調査区は数年前までは水田であった。東西におよそ40m、南北におよそ20mの範囲に及ぶ調査区である。最下層は砂層（流路）の第2遺構面であり、全面が自然流路である。その上に5層が確認出来る。基本的には水平に堆積しており、最上層部は耕作土である。

D区・E区（03年度）5次調査（第9図）

民家の跡地であったため、建物基礎による擾乱が多い。D区の堆積は、1層褐色シルト層、2層にぶい黄褐色シルト層、3層灰黄褐色シルト層、4層暗褐色砂質土層、5層褐色砂質土層である。第1遺構面は、基本的には4層暗褐色砂質土層上面と考えられるが、4層は部分的にしか残存しておらず、東側では5層褐色砂質土層上面が第1遺構面となっている。第2遺構面は基本的には5層褐色砂質土層上面と考えられる。

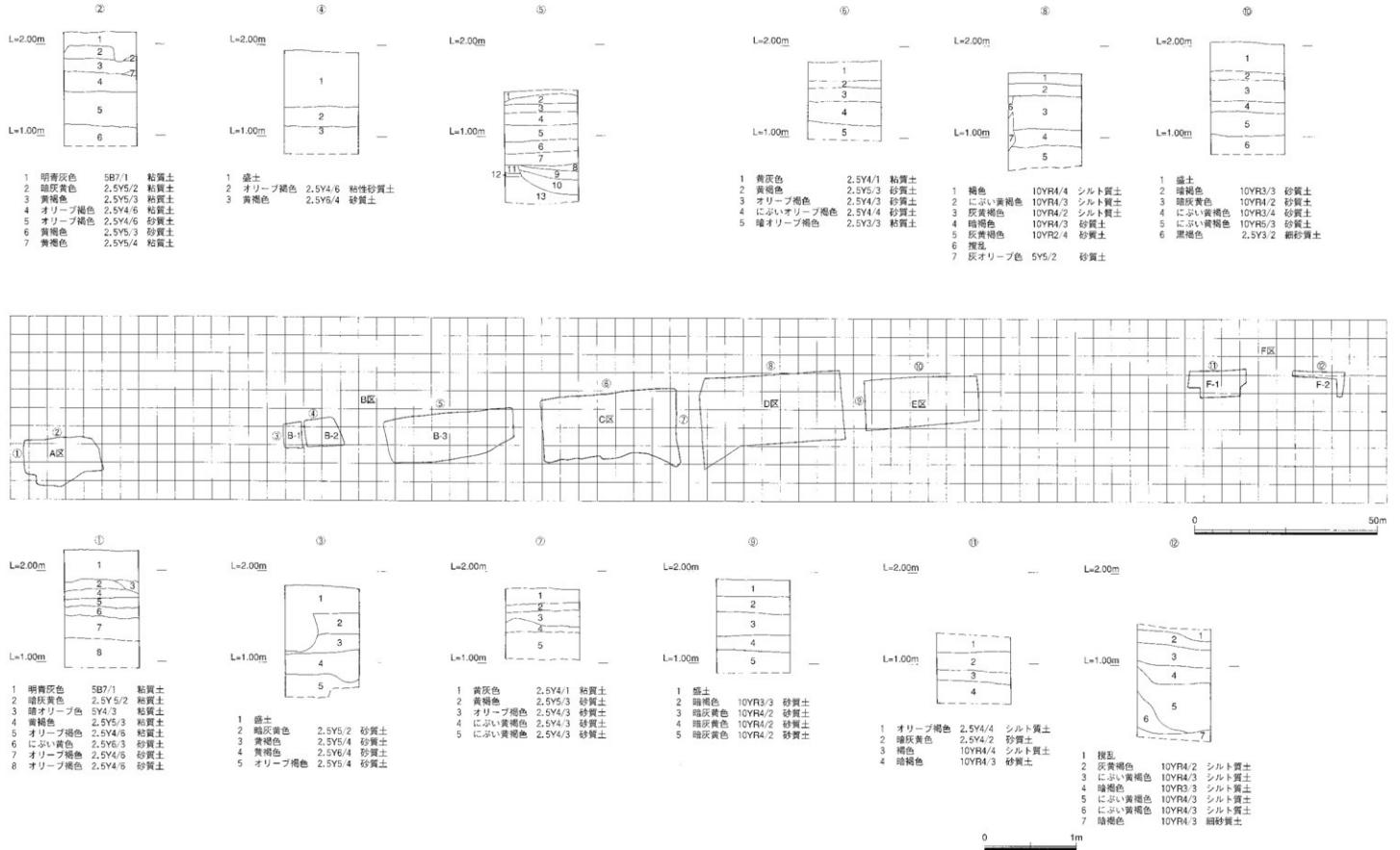
E区の基本堆積は、盛土、暗褐色砂質土、暗灰黄色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色細砂である。

包含層は4層暗灰黄色砂質土層で、5層にぶい黄褐色砂質土層上面が遺構面であるが、調査区西側では5層にぶい黄褐色砂質土層と7層にぶい黄褐色砂質土層がなく6層の細砂層がみられる。

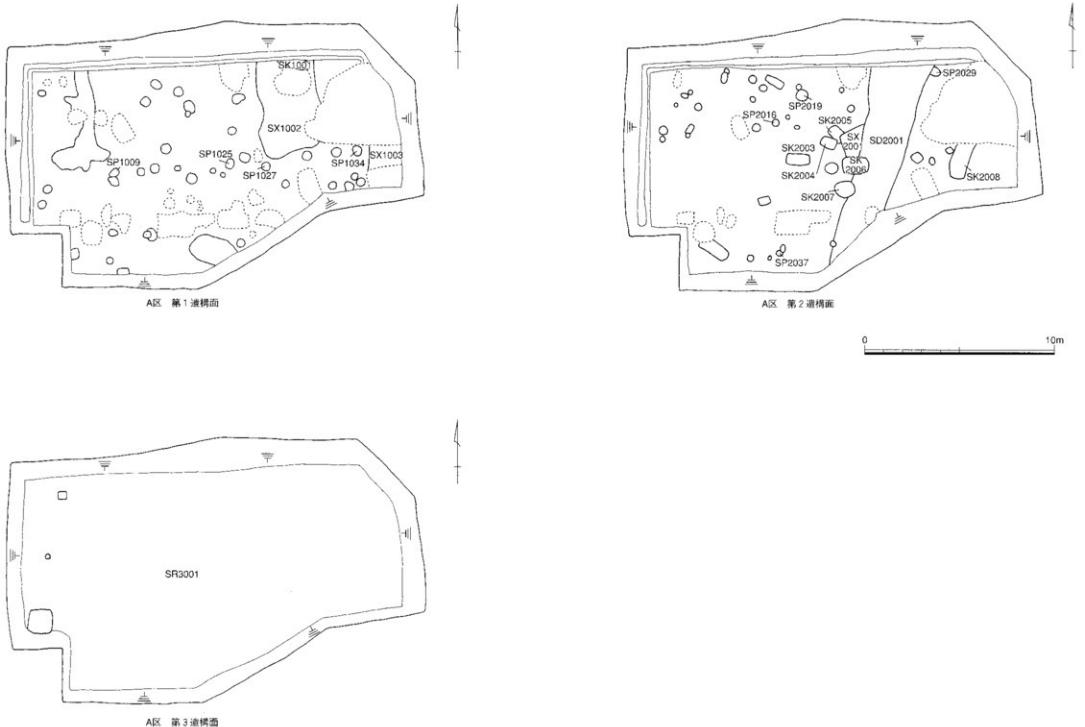
なお遺構面の標高は、D区第1遺構面で約1.05m、第2遺構面で約0.90m、E区第1遺構面約1.30mであった。

F区（02年度）4次調査（第9図）

民家や飲食店、消防分団等の跡地であるため、建物基礎による搅乱が特に多い。建物基礎の除去後は隣接する田宮街道道路面より約60cmほど深くなってしまっており、この面よりの調査となった。F-1区ではオリーブ褐色シルト層の下に暗灰黄色砂質土層がある。全体的に黒っぽく見えるこの層は炭化物・土器片を含んでおり、遺物包含層と考えられる。暗灰黄色砂質土層より明るく見える褐色シルト層上面に、遺構が構築されており、ここを遺構面として遺構検出を行った。F-2区もF-1区同様、道路面よりおよそ60cm深い所より調査を開始した。西側の基本的土層の堆積は、オリーブ褐色シルト、暗灰黄色砂質土、褐色シルト、暗褐色細砂でF-1区のオリーブ褐色シルト層が対応し、暗灰黄色砂質土層が遺物包含層、にぶい褐色シルト層上面が遺構面をそれぞれ形成している。5層は近世以降の堆積土、6・7層はSD1002埋土である。なお遺構面の標高は、F-1区が0.90m、F-2区で0.85mであった。



第9図 田宮遺跡基本土層図



第10図 A区構造配置図

2 遺構と遺物

(1) A 調査区（97年度）1次調査（第10図）

第1次調査は遺跡全体の西端部にあたるA調査区で、遺構面の広がりが予想される部分、420平方メートルについて実施した。遺構面は調査区により異なるが、A調査区には第3遺構面までが確認出来た。調査区は全体に搅乱され、特に東側と南側が大きく影響を受けた状況であった。

第1遺構面は中・近世の遺構で、第2遺構面が中世の遺構面、第3遺構面が全面が自然流路の砂層堆積層である。検出面より15cm下の標高0.85mより湧水のため完掘は出来なかった。

検出した遺構は

第1遺構面	SP…37基、SK…1基、SX…3基	計 41基
第2遺構面	SD…1基、SP…31基、SK…8基、SX…1基	計 41基
第3遺構面	SR…1基	計 1基
合計		83基であった。

第3遺構面

自然流路

SR3001（SR2001）（第10図）

調査区の全面にわたって検出された自然流路である。埋土は、暗灰黄色の砂層である。検出面より15cm下の標高0.85mからの湧水のため完掘できず、この砂層がどこまで続いているのかわからなかつた。出土遺物は、土師質皿、杯、碗、陶器片、須恵器片、瓦器片、北宋銭などで、この流路の埋没時期は13世紀末から14世紀前半である。おそらく田宮川の旧河道と思われるこの流路の埋没後、田宮遺跡周辺の開発が進んでいたものと思われる。上部には流れ込みと思われる近世の遺物もみられた。

出土遺物（第11図～13図）

1は土師質の杯である。器壁を薄く仕上げ体部をやや外反させる。外面底部は回転ヘラ切り痕を留める。2は土師質の杯である。器壁は薄く底部外面には回転ヘラ切り痕を留める。3は土師質の皿である。底部外面に回転糸切り痕を留める。4は土師質の皿である。外面底部回転ヘラ切り痕を留める。古備系土師質の皿である。5は土師質の皿である。体部直線的な立ち上がりで底部回転糸切り後ナデが施されている。6は土師質の碗である。底部より内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ断面三角形の高台が貼り付けられている。特徴より古備系土師器碗である。7は土師質の碗である。底部より内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖る。断面三角形の高台が貼り付けられている。特徴より古備系土師器碗で山本吉備系土師器碗類形のⅢ－3期C－3類に比定される。8は土師質の鍋である。口縁部を「く」の字状に屈曲する。内面にはハケ目10条/cmが施されている。9は土師質の脚部である。断面は長円形で外面全体に指オサエ痕が明瞭である。鍋の脚部と思われる。10は瓦質の椀である。内外面共に回転ナデ後指オサエが施されている。森島編年IV－4期に比定される。11は瓦質椀の底部片である。見込みにはヘラミガキが施され、外面底部には断面三角形の高台が貼り付けられる。12は須恵質東播系のこね鉢である。口縁端部を肥厚させると共に下方にわずかに拡張する。森島編年Ⅲ期3段階に比定される。13は須恵質の東播系こね鉢である。体部直線的で口縁端部は上下に拡張する。森島編年Ⅲ期2段階に比定される。14は陶器備前の擂り鉢である。口縁端部を少し斜めに切り端部をほぼ平坦にする。

問壁編年Ⅲ期に比定される。15は在地系大谷焼の陶器擂鉢である。内面体部には13条/2.3cmを測る擂日と外面には鉄釉が施されている。16は備前陶器の擂鉢である。内面体部には4条単位以上の横描条線が施されている。17は陶器備前の碗である。器壁薄く仕上げ外面底部は回転糸切り痕を留める。18は備前陶器の碗である。器壁薄く口縁端部はやや尖る。底部外面回転糸切り痕を留め、口縁部には重ね焼きによる炭素吸着痕が認められる。19は京焼の陶器碗である。外面体部には赤絵が描かれている。外面高台部は無釉である。20は瀬戸・美濃系の陶器植木鉢である。内面無釉で外面には高台部を除き灰釉が施釉されている。21は石製品の砥石である。22は銭貨で北宋銭の「祥符通宝」である。23は銭貨で北宋銭の「熙寧元宝」である。24は金属製品で釘と思われる。

第2遺構面

溝

SD2001（第14図）

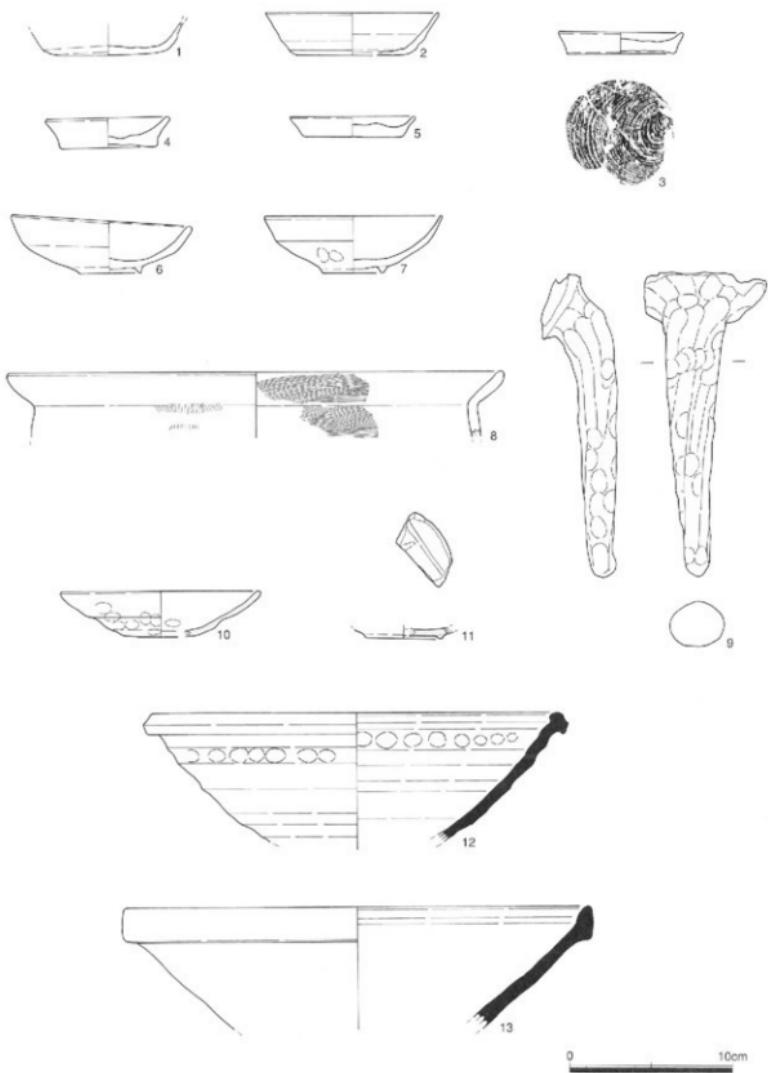
位置 A・B・C-3・4 グリッド。

規模・形態等

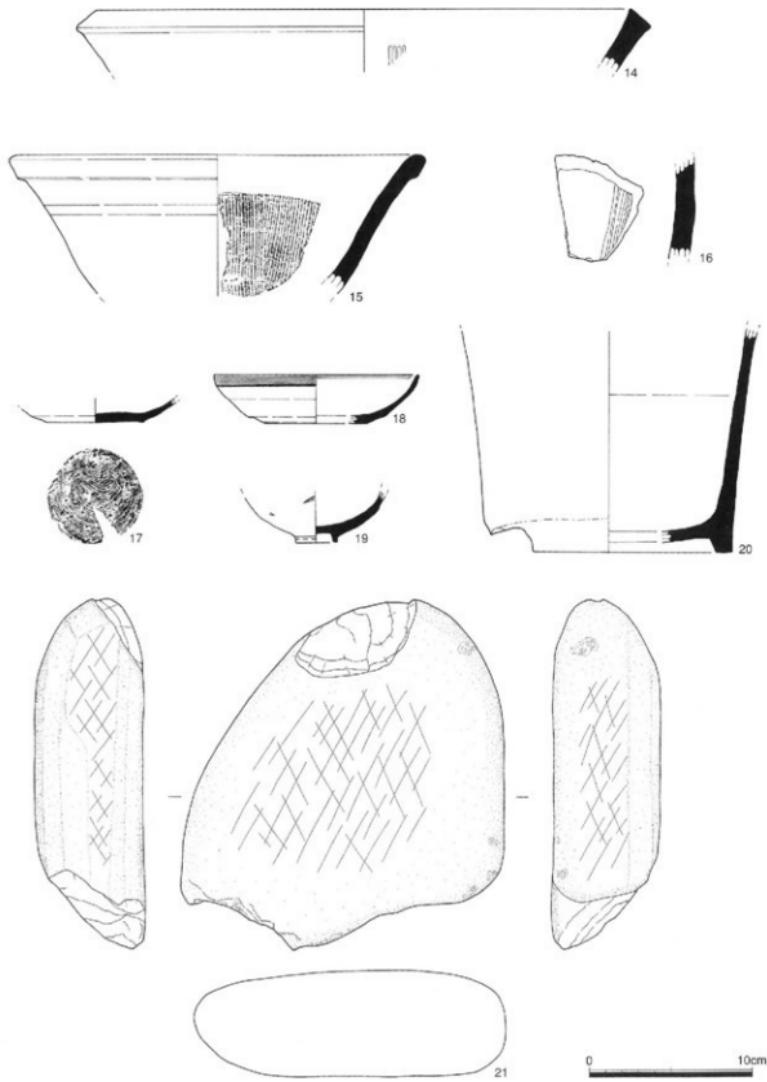
工区を南北に横切る大溝である。幅2.2~4.5m、長さ10m以上と思われる。底部には鉄・マンガン斑の沈着層がある。埋土は深さ0.3m前後で1~3層に分層できるが、土質に大きな違いはない。出土遺物は土師質皿、杯、椀、備前焼擂鉢、東播系の須恵質上器、北宋銭などがあり、時期は13世紀末~14世紀前半であろう。

出土遺物（第15・16図）

25は土師質の杯である。底部外面には回転糸切り痕を留める。26・27は土師質の杯である。器壁全体に薄く仕上げている。28は土師質の杯である。内外面には丁寧なナデが施されている。29は土師質の杯である。全体に器壁は薄く底部外面には回転ヘラ切り痕を留める。30は土師質の杯である。底部外面に回転糸切り痕を留める。31は土師質の皿である。底部外面回転ヘラ切り痕を留め、穿孔が見られる。32は土師質の吉備系皿である。底部回転ヘラ切りで口縁端部を丸くおさめる。33は吉備系土師質の皿である。底面内外面には丁寧なナデが施されている。34は吉備系土師質の皿である。35は吉備系上器質の皿である。外面底部には回転ヘラ切り痕、内面底部には指サエ痕を留める。36は土師質の吉備系碗である。外面底部には指サエ痕が多く見られる。37は土師質の椀である。断面三角形の短い高台が貼り付けられている。38は土師質で吉備系高台付の椀である。断面三角形の高台が貼り付けられている。39は吉備系の土師質高台付の椀である。底部内外面には丁寧なナデが施され、外面には断面三角形の高台が貼り付けられる。40は土師質の高台付の椀である。外面底部は、断面三角形の高台が貼り付けられている。41は土師質のこね鉢である。口縁部には煤が付着している。42は土師質の壺片である。口縁部のものである。外面にはハケ目5条/cmを施している。43は土師質の壺である。内外面には板ナデと外面には平行叩きが施されている。44は土師質の脚部である。指サエ後ナデが施され、煤が付着している。45は須恵質の東播系こね鉢である。口縁端部への拡張が顕著で緩やかに外反する。46は須恵質の東播系こね鉢である。47は備前系陶器の擂鉢である。擂目単位は8条/2.6cmを測る。48は備前系の陶器壺である。49は石製品の砥石である。50・51は銭貨で銭種は不明である。52は銭貨で「祥符元宝」である。



第11図 A区 SR3001流路内出土遺物実測図(1)



第12図 A区 SR3001流路内出土遺物実測図(2)



第13図 A区 SR3001流路内出土遺物実測図(3)

土坑

SK2003 (第17図)

位置 B・C-3 グリッド。

規模・形態等

長軸1.24m、短軸0.59mを測り平面形態は楕円形を呈する。深さは0.23mで断面形態はオリーブ褐色粘質土の1層のみで逆台形状を呈する。埋土からは土師質の杯や皿が出土している。

出土遺物 (第18図)

53は土師質の吉備系杯である。全体に器壁は薄く底部内面にはわずかに凸凹がある。54は土師質の皿である。底部外面回転糸切り痕を留める。

SK2004 (第19図)

位置 C-3 グリッド。

規模・形態等

楕円形の土坑でSK1005をわずかに切って遺構を形成している。長軸1.07m、短軸0.62mを測る。深さは0.23mで、灰黄褐色粘質土の1層のみで、逆台形状を呈する。埋土からは土師質皿が出土している。

出土遺物 (第20図)

55は土師質の皿である。底部外面回転糸切り痕を留める。

SK2005 (第19図)

位置 C-3 グリッド。

規模・形態等

SK2004とSX2001に切られるため全体は不明であるが、長軸0.79m、短軸0.63mを測り平面形態は不整楕円形を呈すると推測される。深さは0.32mで断面形態はオリーブ褐色粘質土の1層のみでU字形状を呈する。埋土からは土師質の杯が出土している。

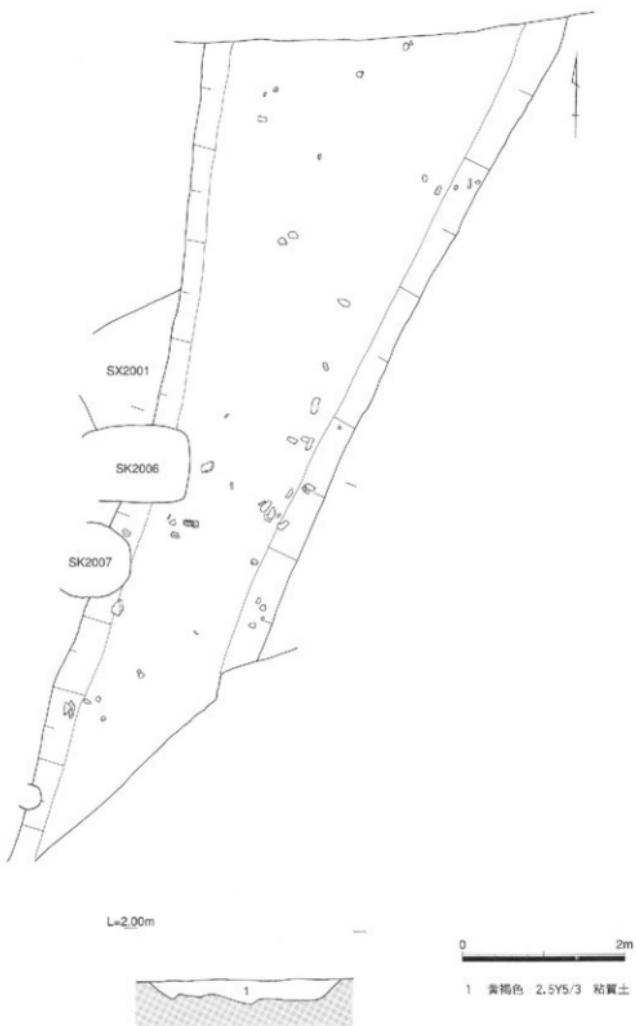
出土遺物 (第20図)

56は土師質の杯である。底部外面回転ヘラ切り痕を留める。内面底部には大きな窪みをつくる。

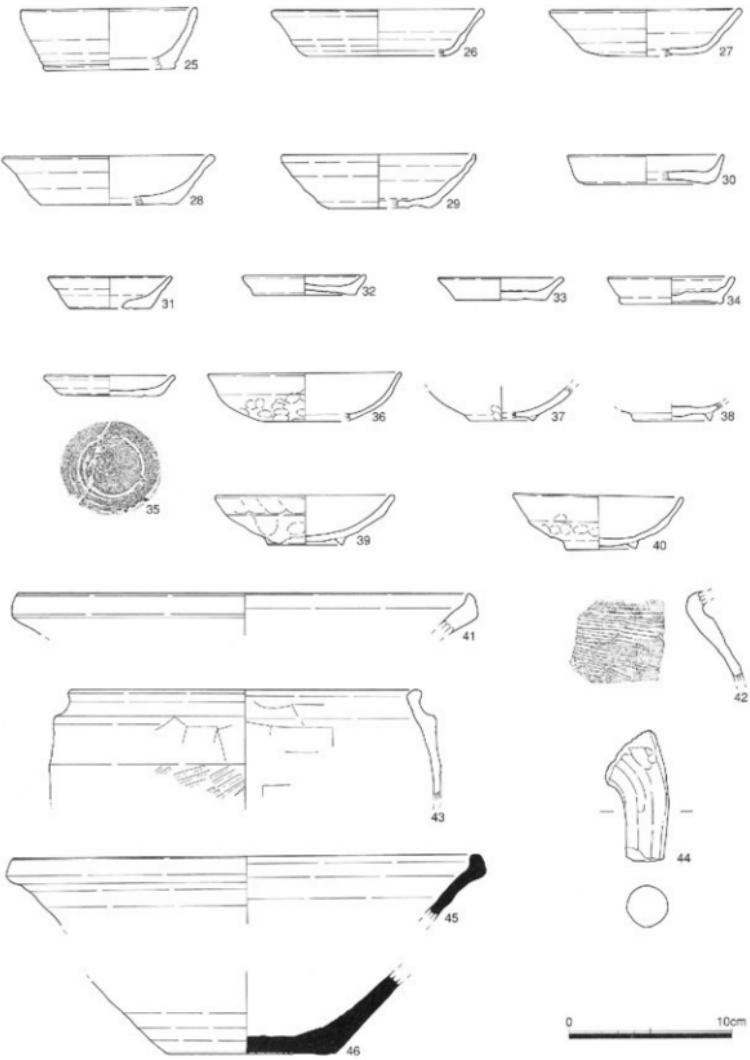
SK2006 (第21図)

位置 B・C-3・4 グリッド。

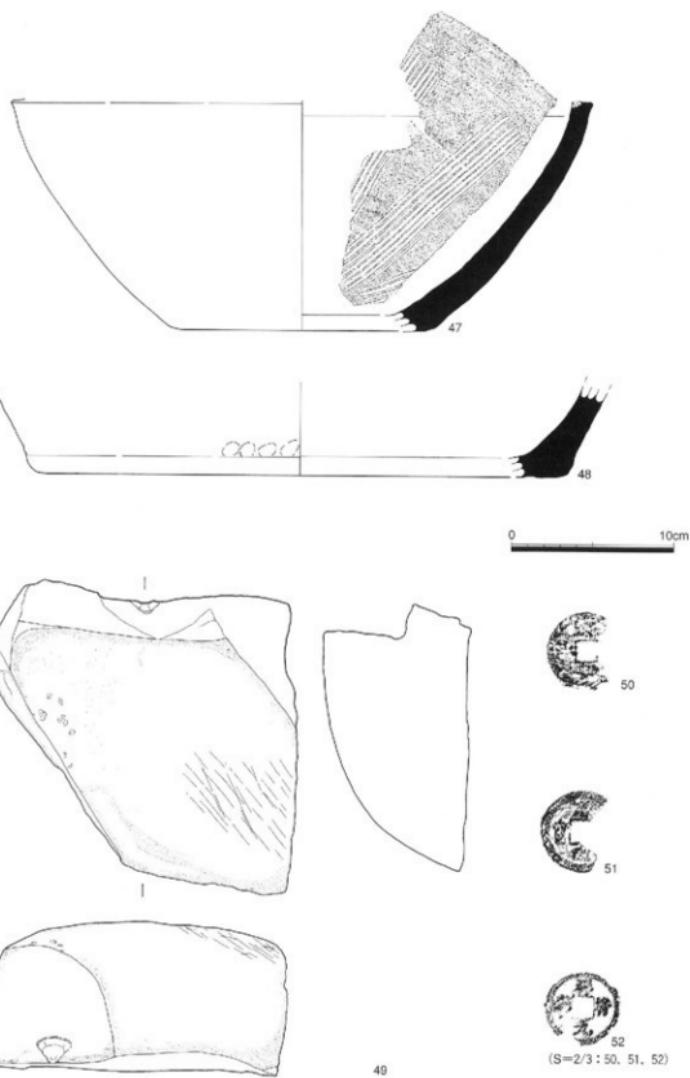
規模・形態等



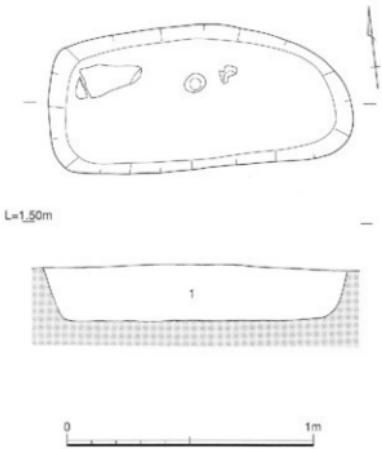
第14図 A区 SD2001実測図



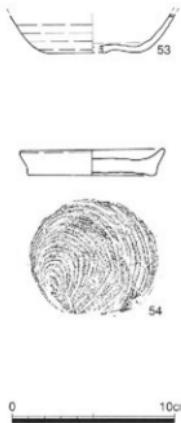
第15図 A区 SD2001出土遺物実測図(1)



第16図 A区 SD2001出土遺物実測図(2)



第17図 A区SK2003実測図



第18図 A区SK2003出土遺物実測図

長軸1.45m、短軸1mの隅丸長方形の土坑である。深さは0.2~0.3mで船底型に近い断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色粘質土1層で、炭化物を含む。出土遺物は土師器皿、杯、椀で時期は14世紀前半であろう。

出土遺物（第22図）

57は土師質の杯である。器壁は全体に薄い。58は土師質の吉備系杯である。器壁は全体に薄く底部内面には凸凹がある。59は土師質の吉備系杯である。全体に器壁薄く外面部には回転ヘラ切り痕を留める。60は土師質の皿である。底部外面部には回転ヘラ切り痕を留める。61は土師質の皿である。底部外面部には回転ヘラ切り痕を留める。62は須恵質の壺片である。外面には叩き目が施されている。

SK2007（第23図）

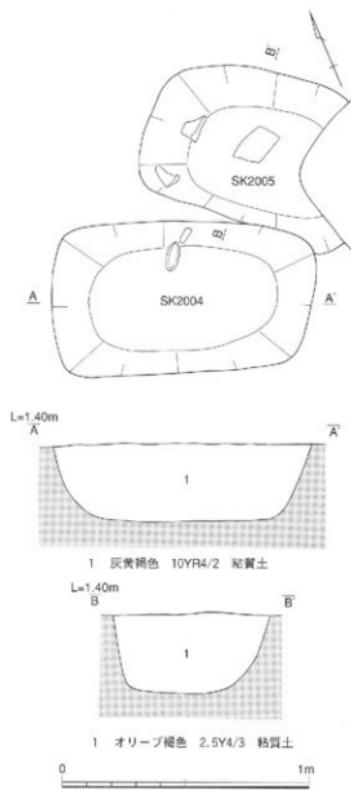
位置 B-3・4グリッド。

規模・形態等

長軸1.08m、短軸0.91mの梢円形の土坑である。深さは0.24m前後で逆台形に近い断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色粘土層1層である。土師質杯、須恵質こね鉢、錢貨が出土している。

出土遺物（第24図）

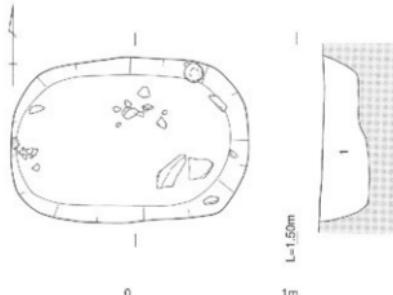
63は土師質の杯である。器壁は全体に薄い。口径12.9cm、器高3.5cm、底径8.8cmを測る。64は土師質の杯である。底部外面部には回転ヘラ切り痕を留める。65は備前陶器の杯である。器壁は薄く口縁端部はやや丸くおさめる。底部外面部には回転ヘラ切り痕を留め、口縁部には重ね焼きによる炭素吸着痕が認められる。66は須恵質の東播系こね鉢である。森田編年Ⅲ期3段階に比定される。67~73は錢貨である。北宋錢の「咸平元宝」である。68は渡来銭の「元豐通宝」である。69~70は錢貨で渡來銭の「元符通宝」である。



第19図 A区 SK2004・2005実測図



第20図 A区 SK2004・2005出土遺物実測図



第21図 A区 SK2006実測図

74は土師質の杯である。器壁やや厚く底部切り離し技法は不明である。75は土師質の皿である。底部外面に回転糸切り痕を留める。76は土師質の皿である。底部切り離し技法は不明で、底部内面には凸凹がある。77は土師質の皿である。底部回転ヘラ切り痕を留める。78は土師質の羽釜脚部である。煤が付着している。79は須恵質の束縛系こね鉢である。

柱穴

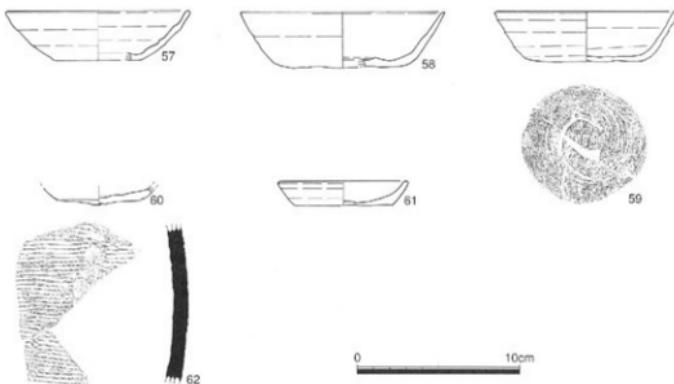
第2造構面 SP群

SP2016

位置 C-3グリッド。

規模・形態等

平面形態が長さ0.4m、幅0.35mを測る円形である。断面形態は深さ0.18mを測る逆台形である。



第22図 A区 SK2006出土遺物実測図

71・72は銭貨で北宋錢の「天聖元宝」である。

73は直径2.5cm、重さ2.1gを測る。

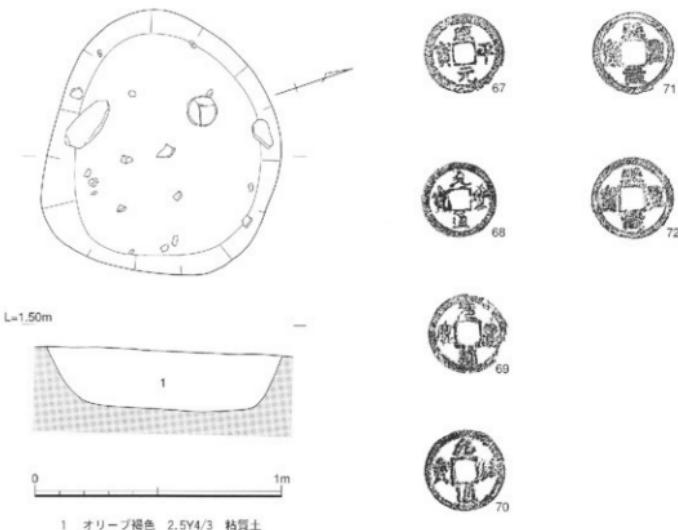
SK2008 (第25図)

位置 B・C-5グリッド。

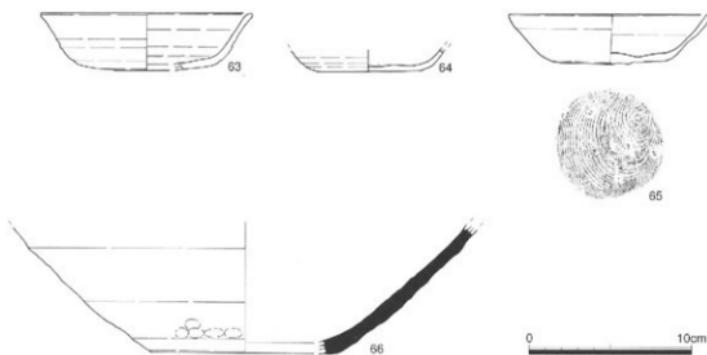
規模・形態等

北側が搅乱により切られるため全体の規模は不明であるが、長軸1.75m、短軸1mを測る土坑で長円形を呈すると推測される。深さは0.25m前後で逆台形に近い断面形態を示す。埋土は暗オリーブ褐色粘土層1層である。土師質杯、皿、脚、須恵質こね鉢が出土している。

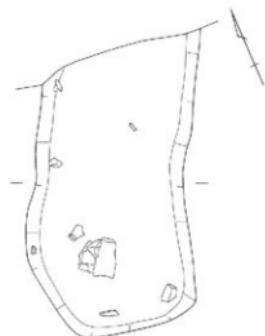
出土遺物 (第26図)



第23図 A区 SK2007実測図



第24図 A区 SK2007出土遺物実測図

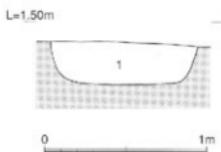


SP2019

位置 C-3 グリッド。

規模・形態等

平面形態が長さ0.65m、幅0.6mを測る円形である。断面形態は深さ0.27mを測る逆台形である。



SP2029

位置 C-4 グリッド。

規模・形態等

平面形態が長さ0.55m、幅0.41mを測る不整形である。断面形態は深さ0.17mを測る逆台形である。

SP2037

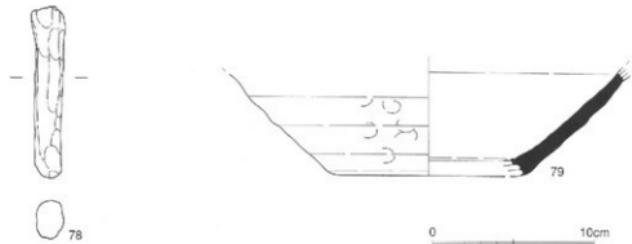
位置 B-3 グリッド。

規模・形態等

平面形態が不整形で長さ0.35m、幅0.3mを測る。断面形態は深さ0.22mを測るU字形である。

SP群出土遺物（第27図）

80は土師質の杯である。器壁は薄く胎土精良。81は上師質の吉備系高台付の碗である。断面三角形の高台が貼り付けられている。82は土師質の杯である。底部内面にはわずかに凸凹がある。83は備前系



第26図 A区 SK2008出土遺物実測図

陶器の壺である。84は須恵質の東播系こね鉢である。内面には煤が付着している。森田編年Ⅲ期3段階に比定される。

不明遺構

SX2001（第28図）

位置 C-3・4 グリッド。

規模・形態等

東側を SD2001、南側を SK2006に切られたため全体は不明であるが、長軸0.8m、短軸0.62m の不整形の不明遺構である。深さは0.14m 前後で逆台形の断面形態を示す。埋土は暗灰黄色粘質土1層である。土師質杯、椀、脚、須恵質壺、銭貨が出土している。

出土遺物（第29図）

85は土師質の杯である。体部は直線的に立ち上がり口縁端部をやや丸く仕上げる。内外面にはやや丁寧なナデが施されている。86は土師質の杯である。体部は直線的に立ち上がり口縁端部をやや丸く仕上げる。底部外側は回転ヘラ切り痕を留め底部内面にはやや凸凹がある。87は土師質の杯である。体部は直線的に立ち上がり口縁端部を丸く仕上げる。外面には煤が付着している。88は土師質の椀である。断面三角形の高台が貼り付けられている。89は土師質の椀である。口径10cm を測る。90は須恵質の壺である。口縁片で外反する体部内面に1条の浅い溝がある。91は土師質の脚部である。92は銭貨である。北宋銭の「大觀通宝」である。

第1遺構面

土坑

SK1001（第30図）

位置 C・D-4 グリッド。

規模・形態等

北側が大きく北壁に掛かるため全体は不明であるが、長軸1.77m、短軸0.55m の長円形の土坑である。深さは0.8m 前後で浅いU字状の断面形態を示す。埋土は緑灰色粘質土層1層である。須恵質壺、陶器花瓶が出土している。

出土遺物（第31図）

93は須恵質の壺である。外面には格子目叩きが施されている。94は瀬戸・美濃系陶器花瓶である。底部外側回転糸切り痕を留める。

柱穴

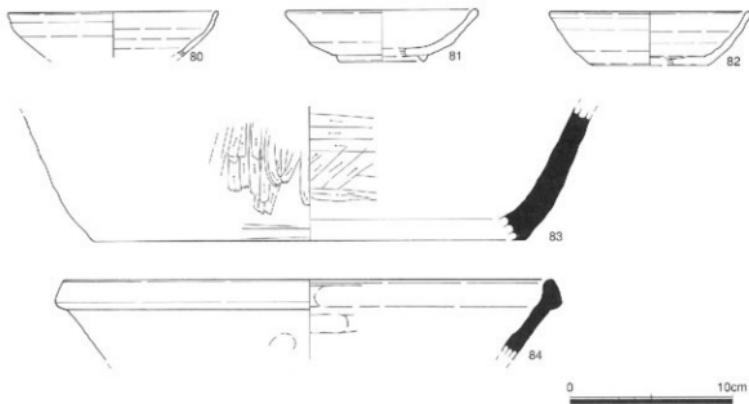
第1遺構面 SP 群

SP1009

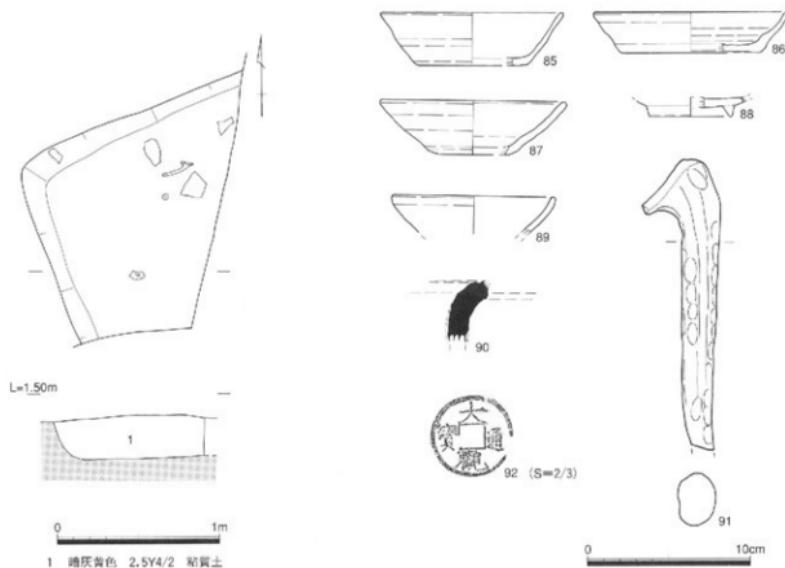
位置 B-2 グリッド。

規模・形態等

平面形態が不整形で長軸0.5m、短軸0.4m を測る。断面形態は深さ0.12m の逆台形である。



第27図 A区2面SP群出土遺物実測図



第28図 A区SX2001実測図

第29図 A区SX2001出土遺物実測図

SP1025

位置 B・C-3・4 グリッド。

規模・形態等

平面形態が不整形で長さ0.55m、幅0.45mを測る。断面形態は深さ0.2mのU字形である。

SP1027

位置 C-3・4 グリッド。

規模・形態等

平面形態が楕円形で長さ0.5m、幅0.4mを測る。断面形態は深さ0.18mの逆台形である。

SP1034

位置 C-5 グリッド。

規模・形態等

平面形態が楕円形で長さ0.55m、幅0.45mを測る。断面形態は深さ0.22mの逆台形である。

SP 群出土遺物（第32図）

95は土師質の椀である。96は器種不明の金属器である。97は銭貨で銭種不明である。98は鉄器で釘と思われる。

不明造構

SX1002（第33図）

位置 C・D-4 グリッド。

規模・形態等

東側を一部搅乱に、北側を北壁に切られているため全体は不明であるが、南北に広がる長軸5.12m、短軸3.32mの大きな不整形の不明造構である。深さは0.35m前後で不整形の断面形態を示す。埋土は灰オリーブ色粘質土（3層）、黄オリーブ色粘質土、灰色粘質土の5層である。上師質杯、皿、碗、こね鉢、須恵質壺、砥石、銭貨などが多く出土している。

出土遺物（第34・35図）

99は土師質の吉備系杯である。口径11.2cmを測る。口縁端部はやや尖る。100は土師質の杯である。底部より内湾して立ち上がる。器壁薄く底部回転糸切り後工具痕を留める。101は土師質杯である。底部から大きく内湾して立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部外面には成形による稜がつき、底部内面にはわずかに成形による凸凹がある。102は土師質の杯である。底部回転ヘラ切り後やや丁寧なナデが施されている。103・104は土師質の皿である。底部外面には回転糸切りが施され、底部内面には成形による凸凹がある。105は土師質の皿である。底部外面回転ヘラ切り痕を留める。106は土師質の碗である。内外面共に丁寧なナデが施されている。107は土師質の椀である。外面底部には指オサエ痕を留め体部内面には横ナデが施される。108は土師質の土鍋である。口縁が「く」の字状の形態で端部を肥厚させる。内外面には煤が付着している。109は土師質のこね鉢である。体部は直線的に立ち上がる。口縁部はやや肥厚している。110は瓦質碗である。底部断面三角形の高台を貼り付ける。111は陶器の碗である。底部より内湾しながら緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。器壁は薄く内外面

にはやや丁寧なナデが施される。112は瓦質の羽釜である。口縁部が直立し、端部は平坦である。断面三角形状の短い鋸が貼り付けられ、体部内外面には横ナデが施される。113は須恵質の東播系こね鉢である。口縁端部を肥厚させ下方への拡張がわずかに認められる。114は須恵質の壺である。頸部直下の体部片である。内面には7条/cmのハケ目が、外面には回転ナデ後平行叩き目痕3本/cmが施されている。115は須恵質の壺である。体部片で外面には格子目叩きが施されている。116は陶器の備前系擂鉢である。内面には擂搗条線がわずかに残るが単位条数は不明である。間喰編年V期に比定される。117は陶器の備前系擂鉢である。擂目単位5条/1.6cmを測る。間喰編年IV期に比定される。118は陶器の備前系壺である。底部片で底部より直線的に立ち上がる。内外面には板ナデ後ナデが施されている。119は土師質の土錘である。120は石製品の砥石である。1面のみ使用痕が見られる。121は銭貨である。銭種は不明である。

SX1003 (第36図)

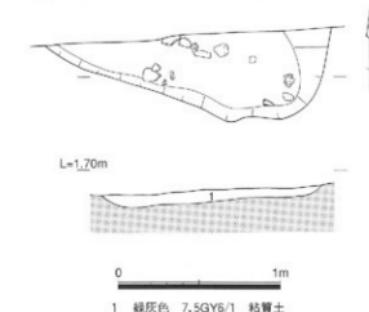
位置 B・C-5 グリッド。

規模・形態等

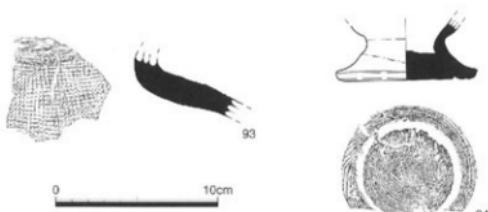
東側を側溝東壁、北と南側を擾乱に切られているため全体は不明であるが、調査区東端に位置する長軸1.64m、短軸1.4mの不整形の不明遺構である。深さは0.32m前後で逆台形と思われる断面形態を示す。埋土は暗オリーブ色粘質土、灰オリーブ色粘質土、オリーブ色粘質土の3層である。土師質壺、土錘が出土している。

出土遺物 (第37図)

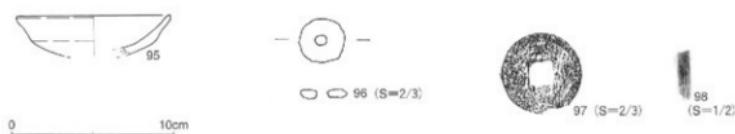
122は土師質の皿である。底部より緩やかに内湾して立ち上がり、口縁は丸くおさめる。底部外面には回転ヘラ切り痕を留める。123は土師質の土錘である。外面には煤が付着している。



第30図 A区 SK1001実測図



第31図 A区 SK1001出土遺物実測図



第32図 A区 1面 SP 群出土遺物実測図



L=2.00m



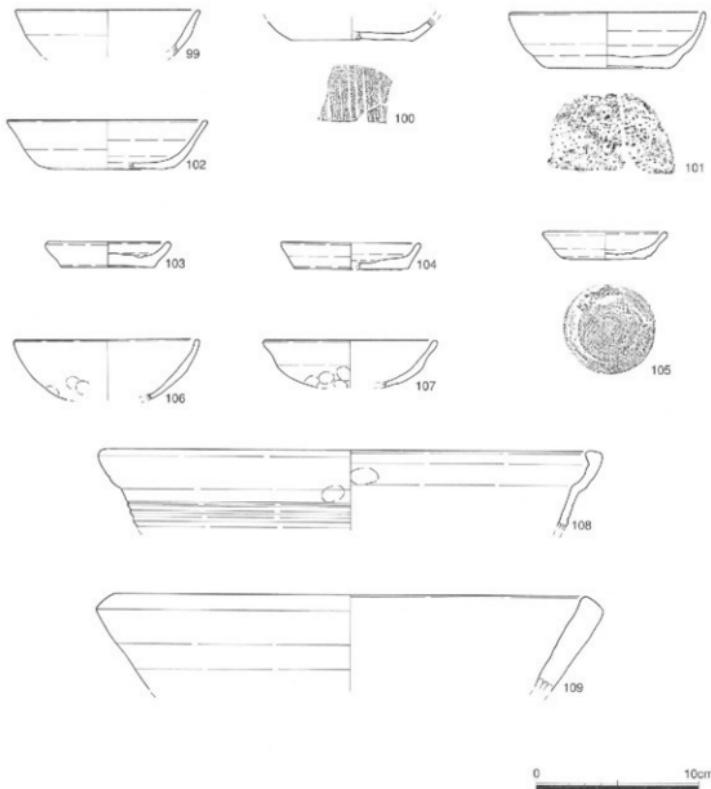
0 1m

- | | | | |
|---|--------|--------|-----|
| 1 | 灰オリーブ色 | SGY6/1 | 粘質土 |
| 2 | 黄オリーブ色 | SY6/3 | 粘質土 |
| 3 | 灰色 | SY6/1 | 粘質土 |
| 4 | 灰オリーブ色 | SY6/2 | 粘質土 |
| 5 | 灰オリーブ色 | SY5/3 | 粘質土 |

第33図 A区 SX1002実測図

第1包含層出土遺物（第38図）

124は上師質の杯である。底部外面は回転ヘラ切り痕を留める。125は土師質の皿である。底部外面は回転ヘラ切り後ナデが施されている。特徴から吉備系土師質皿と思われる。126・127は土師質の皿である。底部回転糸切り痕を留める。128は須恵質の甕体部である。内面には青海波紋、外面には格子目タタキ痕を留める。129は備前陶器の擂鉢である。間壁縦年ⅢB期に比定される。130は青磁の碗である。口縁部直線的に立ち上がり口縁端部はやや尖る。淡緑色の厚い釉が全体に施されている。131は白磁の四耳壺である。伝世品と思われる。132は上師質の甕で体部片と思われる。133は土師質の管状土錐である。



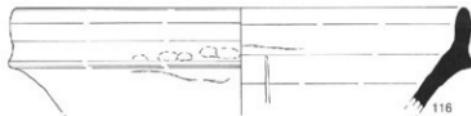
第34図 A区 SX1002出土遺物実測図(1)



114



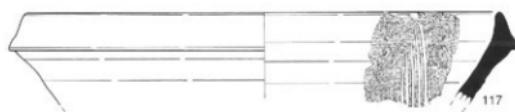
115



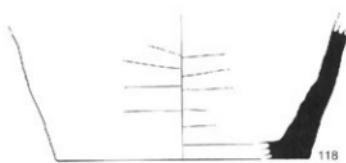
116



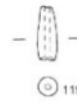
121 (S=2/3)



117



118



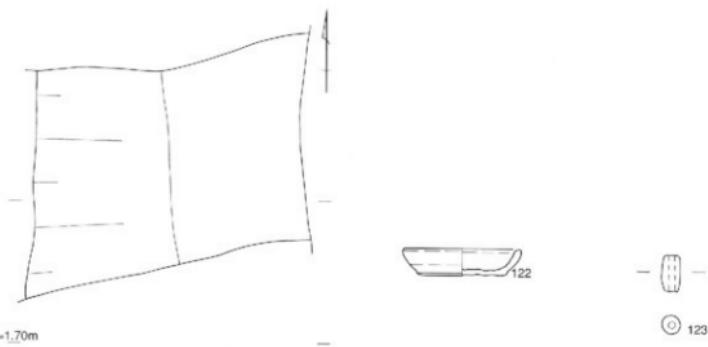
119



120

0

第35図 A区 SX1002出土遺物実測図(2)

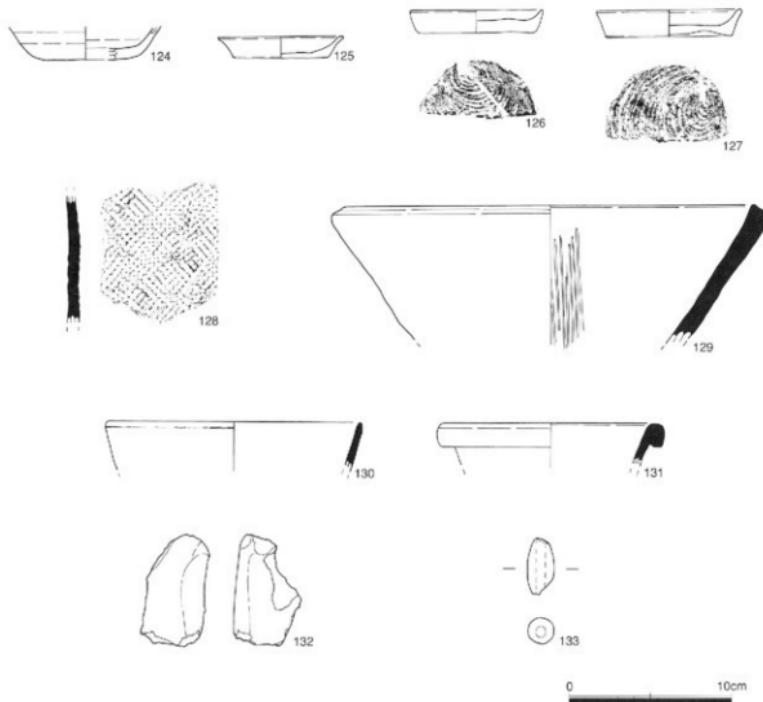


第37図 A区 SX1003出土遺物実測図

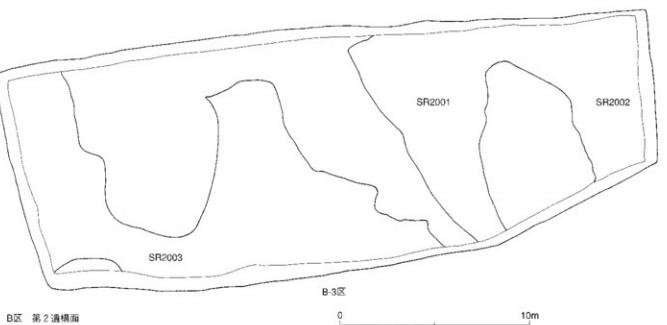
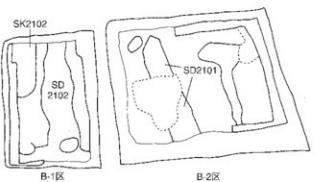
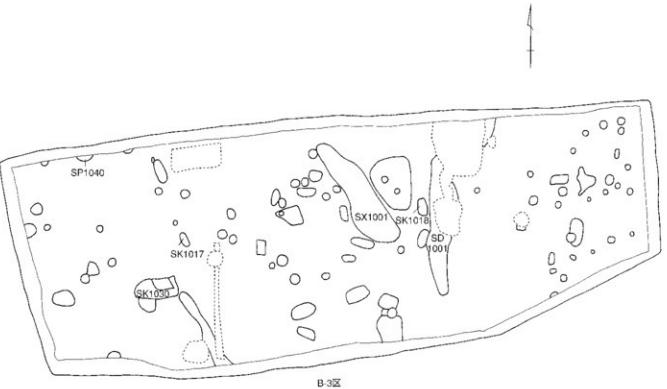
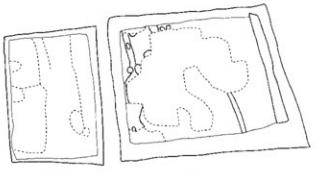
0 1m

1 暗オリーブ色 5Y4/4 粘質土
 2 灰オリーブ色 5Y4/2 粘質土
 3 オリーブ色 5Y6/6 粘質土

第36図 A区 SX1003実測図



第38図 A区第1包含層出土遺物実測図



第39图 B区构造配置图

(2) B 調査区 〈00年度〉(第39図)

B調査区は3地点に分割されており、それぞれ西側よりB-1区、B-2区、B-3区と設定して、495平方メートルを調査した。

B調査区においても、それぞれの調査区で第2造構面までが確認出来た。3地区とも調査前の標高は1.9m、地表の下約40cmまで盛土や表土が堆積していた。第1造構面は中近世の造構で、第2造構面がA・C地区同様の自然流路が全面に確認された。

検出した造構は

第1造構面 (B-2区) SD…2基、SK…1基、SP…7基	計 10基
(B-3区) SD…4基、SK…37基、SP…146基、SX…4基	計191基
第2造構面 (B-1区) SD…1基、SK…1基	計 2基
(B-2区) SD…2基、SK…1基、SP…2基	計 5基
(B-3区) SR…3基	計 3基

合計211基であった。

B-1区

第2造構面

溝

SD2102 (第40図)

位置 C・D・E-16グリッド。

規模・形態等

幅1.4~3.8m、深さ0.3~0.6mで南北方向に延びる溝である。西と北が調査区外になるため、全長は把握出来ない。備前焼擂鉢や銅製の小柄が出土した。

出土遺物 (第41図)

134は備前陶器の擂鉢である。内面には6条単位以上の櫛搔条線が施されている。135は金属製品の小柄である。

土坑

SK2102 (第42図)

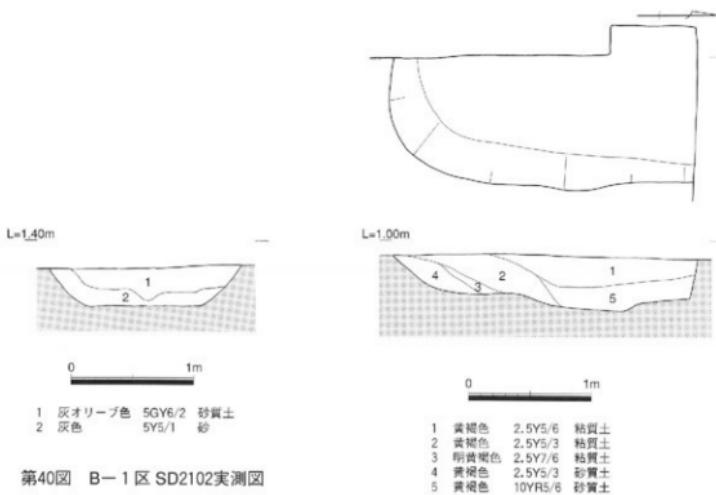
位置 D・E-16グリッド。

規模・形態等

北西隅に位置し北側と西側がそれぞれ大きく北壁と西壁に切られるため全体は不明であるが、長軸2.7m、短軸1mの長円形の土坑である。深さは0.46m前後で浅いU字状の断面形態を示す。埋土は5層に分層出来る。土色はほぼ同色に近く黄褐色の粘質土と砂質土に分けられる。瓦質の羽釜が出土している。

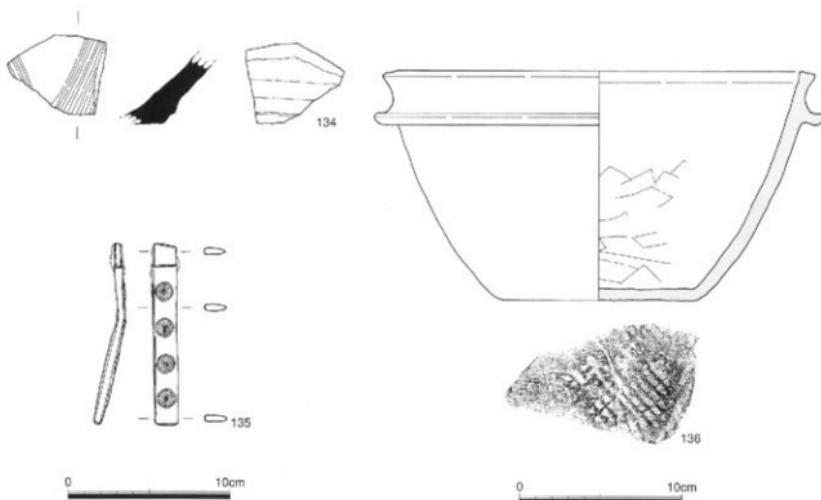
出土遺物 (第43図)

136は瓦質の羽釜である。平底から緩やかに内湾しながら立ち上がる。



第40図 B-1区 SD2102実測図

第42図 B-1区 SK2102実測図



第41図 B-1区 SD2102出土遺物実測図

第43図 B-1区 SK2102出土遺物実測図

B-1区包含層出土遺物（第44図）

137は瓦質の羽釜である。口縁部はほぼ直立て鍔は断面台形状で短い。138は須恵質の束播系こね鉢である。口縁端部は下方への拡張が見られる。139は土師質のふいごの羽口と思われる。部分的に被熱跡が見られる。

B-2区

第2造構面

溝

SD2101（第45図）

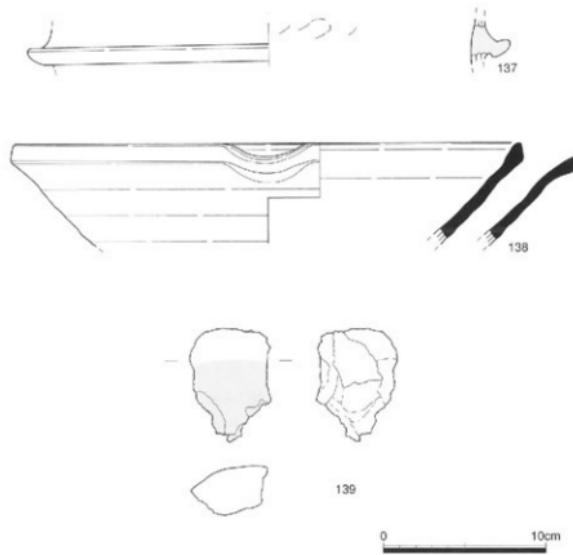
位置 D・E-17グリッド。

規模・形態等

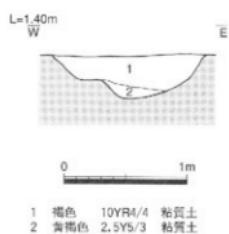
幅1.3~1.5m、深さ0.4mの南北方向に延びる溝である。南端は調査区外になるため全長は確認出来ない。底部には黄褐色粘質土層があり、水分が多く、グライ化していた。土器・陶器類は少なく貝殻・獸骨・鉄滓等が含まれていた。特に貝殻は数量が多くそのほとんどがヤマトシジミであるが、他にハマグリ、オキアサリ、オキシジミ、ハイガイなどが確認出来ている。

出土遺物（第46図）

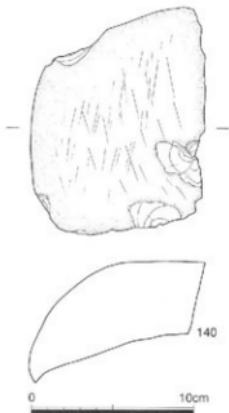
140は石製品で砂岩の砥石である。



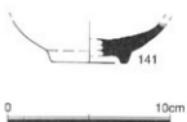
第44図 B-1区第2包含層出土遺物実測図



第45図 B-2区 SD2101実測図



第46図 B-2区 SD2101出土遺物実測図



第47図 B-2区第2包含層出土遺物実測図

B-2区包含層出土遺物（第47図）

141は肥前系陶器の碗である。底部より内湾しながら立ち上がる。

B-3区

第2遺構面

自然流路

SR2001（第48図）

位置 C・E・D-25・26グリッド。

規模・形態等

南東から北西に延びる自然流路である。調査区外にまで達するために全体は不明であるが、長さ13m、幅7.8m、深さ0.28mを測る。第2遺構面で確認出来たSR2001～2003はいずれも底部に粘質土、あるいは粘性の強いシルトが堆積している。南東側から北西方向への流れであったと推測される。土師質杯、高台付椀や瓦器椀、須恵質こね鉢などが出土した。

出土遺物（第49図）

142は土師質杯である。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。143は土師質高台付の椀である。断面台形の高台が貼り付く。144は和泉型瓦器椀である。内面にはヘラミガキが瞭然に見える。森島編年IV-3・4に比定される。145は須恵質の東播系こね鉢である。森田編年III期1段階に比定される。

SR2002（第50図）

位置 D・E-27・28グリッド。

規模・形態等

南東から北西に延びる自然流路である。調査区外にまで達するために全体は不明であるが、長さ9.1m、幅7.4m、深さ0.39mを測る。第2遺構面で確認出来たSR2001～2003はいずれも底部に粘質土、あるいは粘性の強いシルトが堆積している。南東側から北西方向への流れであったと推測される。瓦器椀などが出土した。

出土遺物（第51図）

146は瓦質の椀である。口縁部がやや外反する。

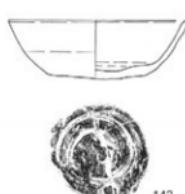
L=1.20m
W

E



- 0 1m
- | | | | |
|---|--------|---------|-------|
| 1 | にぶい黄褐色 | 10YR5/4 | シルト質土 |
| 2 | にぶい黄褐色 | 10YR6/4 | シルト質土 |
| 3 | にぶい黄褐色 | 10YR5/3 | シルト質土 |
| 4 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | シルト質土 |
| 5 | 黄褐色 | 10YR5/6 | シルト質土 |
| 6 | 褐色 | 10YR4/6 | シルト質土 |
| 7 | にぶい黄褐色 | 10YR5/4 | シルト質土 |
| 8 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト質土 |
| 9 | にぶい黄褐色 | 10YR5/4 | シルト質土 |

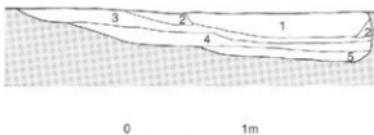
第48図 B-3区 SR2001実測図



142

L=1.20m
SW

NE

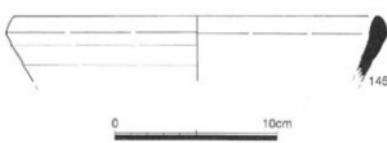


- 0 1m
- | | | | |
|---|--------|---------|-------|
| 1 | オリーブ褐色 | 2.5Y4/3 | 砂質土 |
| 2 | オリーブ褐色 | 2.5Y4/6 | 砂質土 |
| 3 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト質土 |
| 4 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト質土 |
| 5 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト質土 |

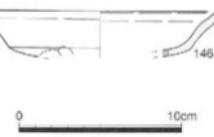
第50図 B-3区 SR2002実測図



143



145



146

第49図 B-3区 SR2001出土遺物実測図

第51図 B-3区 SR2002出土遺物実測図

SR2003（第52図）

位置 C・D・E-21~26グリッド。

規模・形態等

南東から北西に延びる自然流路である。調査区外にまで達するために全体は不明であるが、長さ10.5m、幅21m、深さ0.48mを測る。第2造構面で確認出来たSR2001~2003はいずれも底部に粘質土、あるいは粘性の強いシルトが堆積している。南東側から北西方向への流れであったと推測される。青磁碗、磁器皿、瓦質皿、土師質杯、高台付椀などが出土した。

出土遺物（第53図）

147は土師質の杯である。底部に回転ヘラ切り痕を留める。148は土師質高台付の椀である。山本吉信系Ⅲ-3期C-3類に比定される。149は和泉型の瓦器皿である。底部外面には指オサエ痕がある。150は瓦器の皿である。内面には丁寧なナデが施されている。151は瓦質の羽釜である。短い断面方形の鶴が垂直に貼り付けられる。152は須恵質の束縛系こね鉢である。森山編年Ⅲ期1段階に比定される。153は磁器の皿である。暗灰黄色の青磁釉が全面に施釉されている。154は龍泉窯系青磁碗である。体部外面には幅広い鎌蓮弁文を有する。横田・森田龍泉窯系青磁碗I-5bに属する。

B-3区

第1造構面

溝

SD1001（第54図）

位置 D・E-26グリッド。

規模・形態等

南北に延びる溝である。北東部は搅乱による削平を受け全体は不明であるが、長さ7.5m、幅1.5~0.9m、深さ0.53mを測る。土層は大きくは上層がシルト質で下層が砂質土の2層に分層出来る。断面形態はほぼU字形を呈する。

出土遺物（第55図）

155は土師質の杯である。底部よりやや内湾しながら立ち上がる。底部回転ヘラ切り痕を留める。156は土師質の玩具でペーロマである。型作りで高さ2.8cm、幅3.5cmを測る。

土坑

SK1017（第56図）

位置 D-23グリッド。

規模・形態等

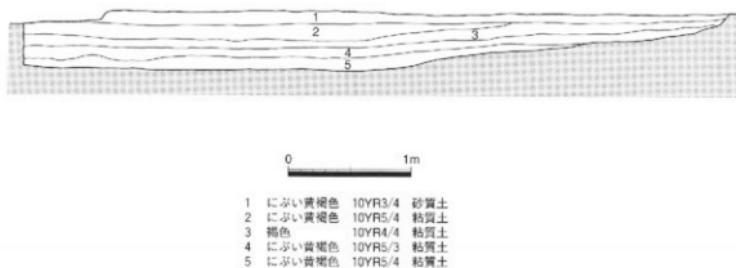
北西から東に延びる長軸0.76m、短軸0.36mの楕円形の土坑である。深さは0.14mでU字形の断面形態を示す。埋土は2層である。出土遺物に陶器鉢がある。

出土遺物（第57図）

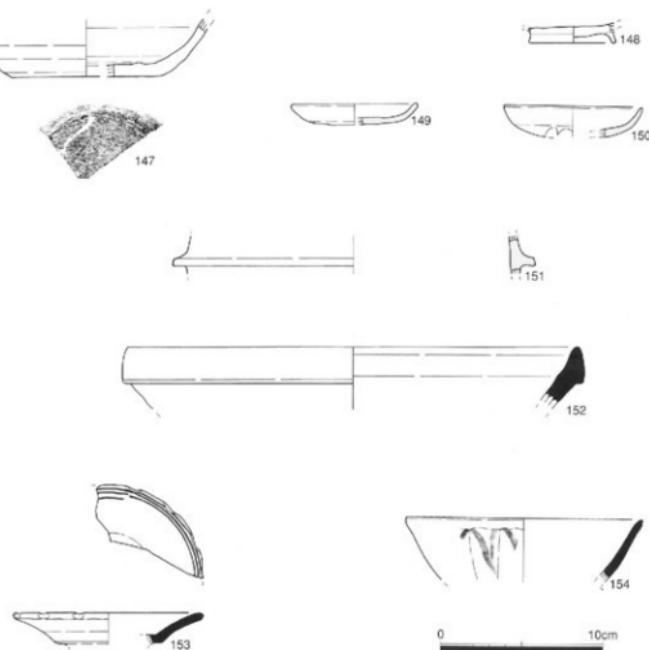
157は陶器の鉢である。内面には白泥と鉄釉によるイッテン描きによる文が描かれている。

L=1.20m
SW

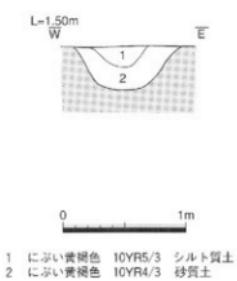
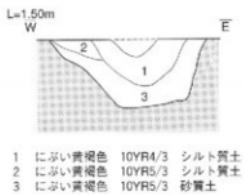
NE



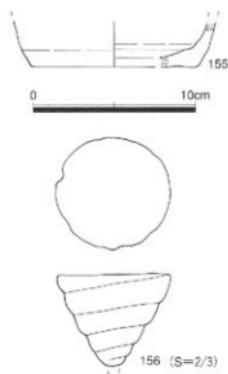
第52図 B-3区 SR2003実測図



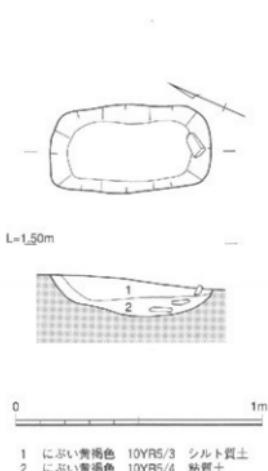
第53図 B-3区 SR2003出土遺物実測図



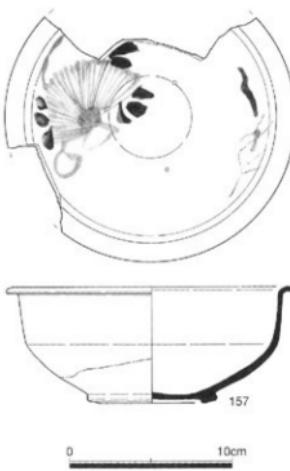
第54図 B-3区 SD1001実測図



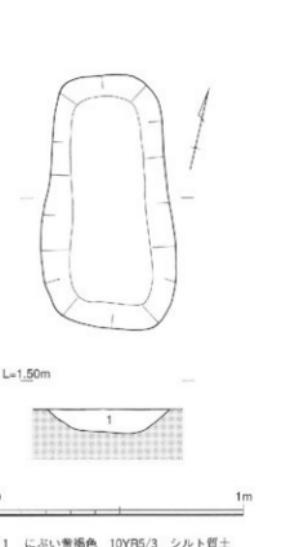
第55図 B-3区 SD1001出土遺物実測図



第56図 B-3区 SK1017実測図



第57図 B-3区 SK1017出土遺物実測図



第58図 B-3区 SK1018実測図

SK1018 (第58図)

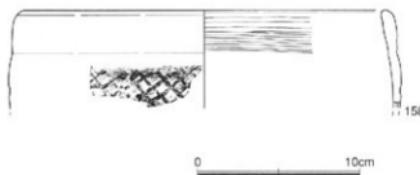
位置 D-25グリッド。

規模・形態等

北西から東に延びる長軸1.04m、短軸0.56mの楕円形の土坑である。深さは0.1m前後でU字形の断面形態を示す。埋土はにぶい黄褐色シルト質土の1層のみである。出土遺物に土師質釜がある。

出土遺物 (第59図)

158は土師質の釜である。内面口縁部にはハケ目(5本/cm)、体部外表面には格子目タタキ痕を留める。



第59図 B-3区 SK1018出土遺物実測図

出土遺物 (第62図)

160は土師質の羽釜である。口縁部が内湾するもので、口縁端部はやや尖り気味で丸くおさめる。

不明遺構

SX1001 (第63図)

位置 D-E-24・25グリッド。

規模・形態等

調査区の中央部に位置する北西から南東に延びる不明遺構である。平面形態が楕円形で長さ6.5m、

SK1030 (第60図)

位置 C・D-22・23グリッド。

規模・形態等

SK1031を切る形で東西に延びる長軸2.2m、短軸1.2mの隅丸長方形の土坑である。深さは27cm前後で逆台形に近い断面形態を示す。埋土は2層である。陶器水注が出土している。

出土遺物 (第61図)

159は京・信楽系陶器の水注である。後手半筒型で全面に貫入が見られる。

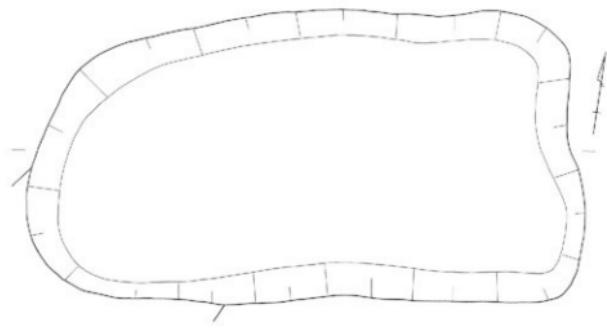
柱穴

SP1040

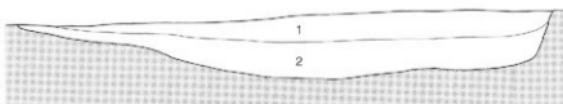
位置 E-22グリッド。

規模・形態等

北側を北壁に切られるため全体は不明であるが、平面形態が不整形で長さ0.4m、幅0.25mを測る。断面形態は深さ0.18mの不整形である。出土遺物は土師質の羽釜である。



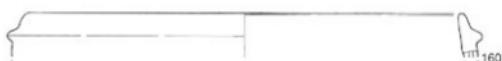
L=1.50m



0 1m

1 オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルト質土
2 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土

第60図 B-3区 SK1030実測図



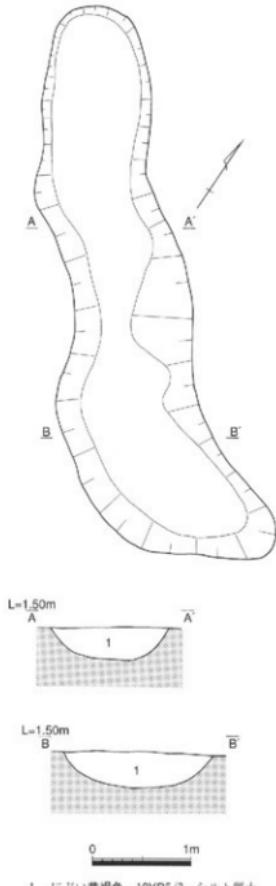
0 10cm

第62図 B-3区 SP1040出土遺物実測図



0 10cm

第61図 B-3区 SK1030出土遺物実測図



第63図 B-3区 SX1001実測図
1 にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト質土

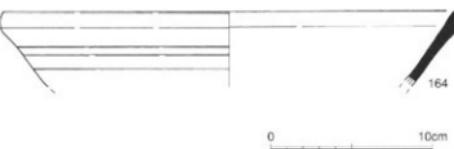
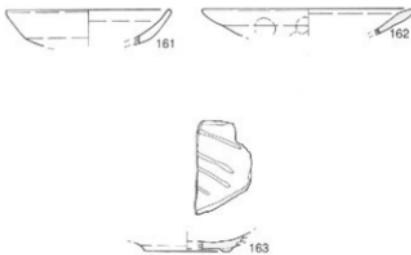
幅1.56mを測る。断面形態は深さ0.38mのU字形である。土師質椀、瓦器椀、須恵質こね鉢が出土している。

出土遺物（第64図）

161は土師質の吉備系土師椀である。162は和泉型瓦器椀である。口縁部がやや肥厚し口縁端部はやや尖る。163は瓦器椀である。体部内面にヘラミガキが施され、退化した断面半円形の高台が貼り付けられている。164は須恵質の東播系こね鉢である。森田編年Ⅱ期2段階に比定すると思われる。

B-3区包含層出土遺物（第65～71図）

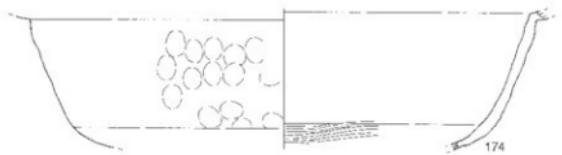
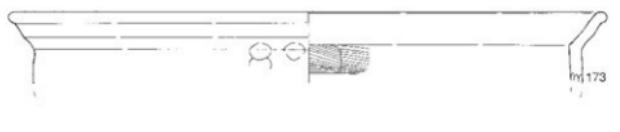
165は土師質の杯である。底部には回転ヘラ切り痕を留める。166は土師質の杯である。167は土師質の皿である。全体に器壁は薄く口縁端部はやや肥厚。体部が外側に大きく開いて直線的に延びる。体部内外面には丁寧な横ナデが施される。168は吉備系土師質の椀である。体部内湾し口縁端部は丸くおさめる。169は土師質の椀である。吉備系の高台付椀である。170は土師質の椀底部である。断面三角形の高台が貼り付けられている。171は土師質の高



第64図 B-3区 SX1001出土遺物実測図

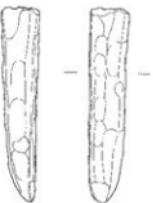
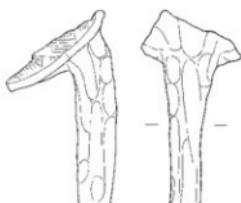
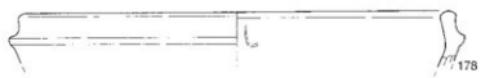
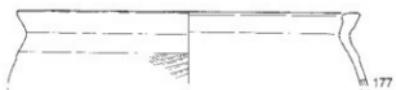
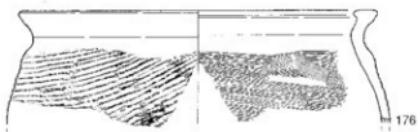
台付の椀である。全体に口径・器高が狭小である。山本吉備系土師器椀類型のⅢ-3期C3類に相当する。172は上師質の壺である。口縁部は外反し端部を上方に拡張する。173は土師質の鍋である。体部内湾し口縁部「く」の字状に外反する。外面体部に指オサエ、内面にはハケ目（6条/cm）が施されている。174は土師質の鍋である。口縁部は「く」の字状に屈曲される形態で、体部内面にヨコハケ目が体部外面には指オサエが施されている。175は上師質の鍋である。口縁端部は「く」の字状に大きく外反する。内面にはヨコ方向のハケ目（8条/cm）、外面には指オサエ痕を留める。176は土師質の釜である。内面には回転ナデ後板状工具によるナデが、外面には回転ナデ後平行叩き目が施されている。177は土師質の播磨型の土釜である。口縁部が「く」の字状の形態で口縁端部はやや肥厚する。178は土師質の羽釜である。体部・口縁部が大きく内湾し、口縁端部を丸くおさめる。179は土師質の土釜である。口縁部が体部から斜め方向に延びるもので、口縁端部を少し肥厚させている。180は上師質の焰烙である。181は土師質の鍋もしくは羽釜の脚部と見られる。指オサエ後ヘラケズリで成形し、その後縱方向にナデを施している。断面形状は楕円形で、胎上は砂粒を多く含んでいる。182は土師質の鍋もしくは羽釜の脚部である。断面は円形で残存長は11.9cmを測る。外面全体にナデが明瞭に残る。183～188は瓦器椀である。183は内面には渦巻き状のヘラミガキ、外面底部には断面三角形の退化した小さな高台が付く。184は和泉型瓦器椀で体部内面に渦巻き状のヘラミガキが施される。185は体部内面にはヘラミガキが疎らに見える。森島編年和泉型瓦器椀IV-3・4に比定する。186は内面にはヘラミガキが、外面体部には指オサエが施されている。187は外面体部には指オサエが施されている。森島編年IV-4に比定される。188は和泉型で粘土紐巻き上げによる結合痕あり。189は和泉型瓦器皿である。口縁部が外反し、内外面に横ナデが施される。190～192は瓦器の椀である。底部外面には指オサエ痕を留める。森島編年IV-4に比定される。191は和泉型と思われる。192は外向炭素の吸着不良で色調は灰白色を呈する。193は瓦質の壺である。内面体部には青海波紋を、外面体部には格子目タタキ痕を留める。194は瓦質の羽釜で口縁部は内湾し外面には断面三角形の脚が付く。195は瓦質の羽釜である。体部より口縁部にかけてやや内湾する。口縁端部はやや丸みを持つ。内面には口縁部（5条/cm）、体部（12条/cm）と2種のハケ目が確認出来る。196は瓦質で折線の焰烙である。197～200は須恵質の束播系こね鉢である。口縁部は直線的に立ち上がる。森田編年II期2段階に比定すると思われる。198は口縁端部上下への拡張が顕著である。199は口縁部は上下に拡張が見られ、口縁端部は丸く仕上げられている。森田編年III期2段階に比定される。200は体部が直線的に立ち上がる。201は備前陶器の擂鉢である。岡壁編年中世5期bに比定すると思われる。202は陶器匝鉢である。半筒形で外面には鉄釉が施釉されている。203は瀬戸系の陶器壺である。内外面には鉄釉が施されている。204は陶器の壺である。内外面は鉄釉で施釉されている。205は陶器の壺と見られる。無釉で玉縁状の口縁である。206は肥前系陶器唐津の花生と思われる。胴の中央部に膨らみを持つ尊式瓶である。207は陶器の碗である。外面に回転糸切り痕を留める。色調は灰白で、備前焼の碗と思われる。208は備前陶器の壺である。無釉で堅く焼き締められている。209は備前窯と思われる碗で焼成は瓦質に近く色調は灰白を呈する。口縁部外面は重ね焼きによって黒色を呈する。底部には回転糸切り痕が認められる。210は京・信楽系の陶器碗である。外面体部には上絵による文が見られる。211は京焼の陶器碗である。外面口縁部より体部にかけ、筆の文が上絵により描かれている。212・213は京・信楽系の陶器筒茶碗である。外面体部には鉄釉による帶線が2条描かれている。214は肥前系陶器の筒型碗である。陶胎染付により外面には唐草が描かれている。215は肥前系陶器で唐津の擂反の皿である。内外面共に施釉されるが高台部のみ無釉である。216は備前陶器の

灯明皿である。器壁は薄く仕上げ内面には塗上で赤彩されており、口縁端部には煤が付着している。217は備前陶器の灯明皿である。器壁は薄く仕上げ、内外面には煤が付着している。218は肥前系伊万里の磁器小杯である。器壁は肥厚で口縁端部は外反する。219は肥前系の青磁皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ高台部には砂の付着が見られる。220は肥前系の磁器仏飯器である。体部には染付による梅枝折文が描かれている。221は肥前系伊万里の磁器碗である。器壁の肥厚した小型の丸碗である。222は肥前系伊万里の青磁碗である。器壁は全体的に肥厚で口縁部には口鍔が施されている。223は肥前系磁器の油壺である。224は肥前系磁器の仏花器である。染付により外面には蜻唐草が描かれている。225は肥前系磁器の仏飯器である。226は肥前系の磁器仏飯器である。外面には染付による蓮弁が描かれている。227は肥前系青磁の三脚付香炉である。内面を除き青磁釉が掛かる。228は白磁皿である。体部は直線的で口縁部はやや外反し、口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。229は白磁皿である。口縁端面の釉が剥ぎ取られる。いわゆる「口禿」と、口縁部が大きく外反する。230は青磁の皿である。全面に濃緑色の釉を施釉。231は青磁の皿である。全面に淡緑色の釉を施釉。232は龍泉窯系青磁碗である。内外面には陰刻による文が見られ濃緑釉が施釉されている。233は青磁の碗である。体部外面に鎬蓮弁と全面に濃緑色釉を施された龍泉窯系碗である。234は磁器碗である。濃緑色の青磁釉が施される。龍泉窯系G期に比定するとと思われる。235は土師質の管状土錘である。236は瓦質の加工円盤である。瓦の再利用品と思われる。237は滑石製の石鍋の鏃である。238は石製の硯である。自然の形を残しつつ方形に仕上げている。239は火打ち石である。240は銅製品の笄である。長径20.5cm、短径0.7mm、厚さ0.3cmを測る。241～243は錢貨である。241は銅銭である。242は寛永通宝(新)である。裏には「文」の文字が見える。243は「寛永通宝」である。244は銅滓である。鋳造滓であると思われる。



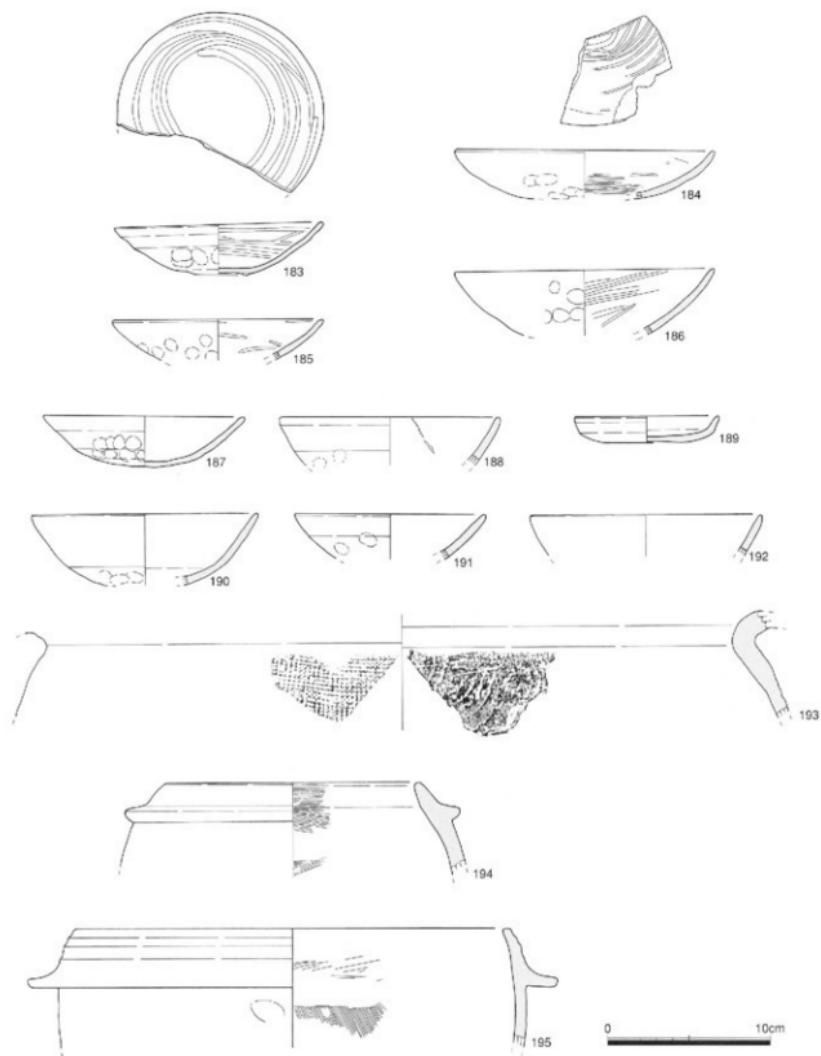
0 10cm

第65図 B—3区第2包含層出土遺物実測図(1)

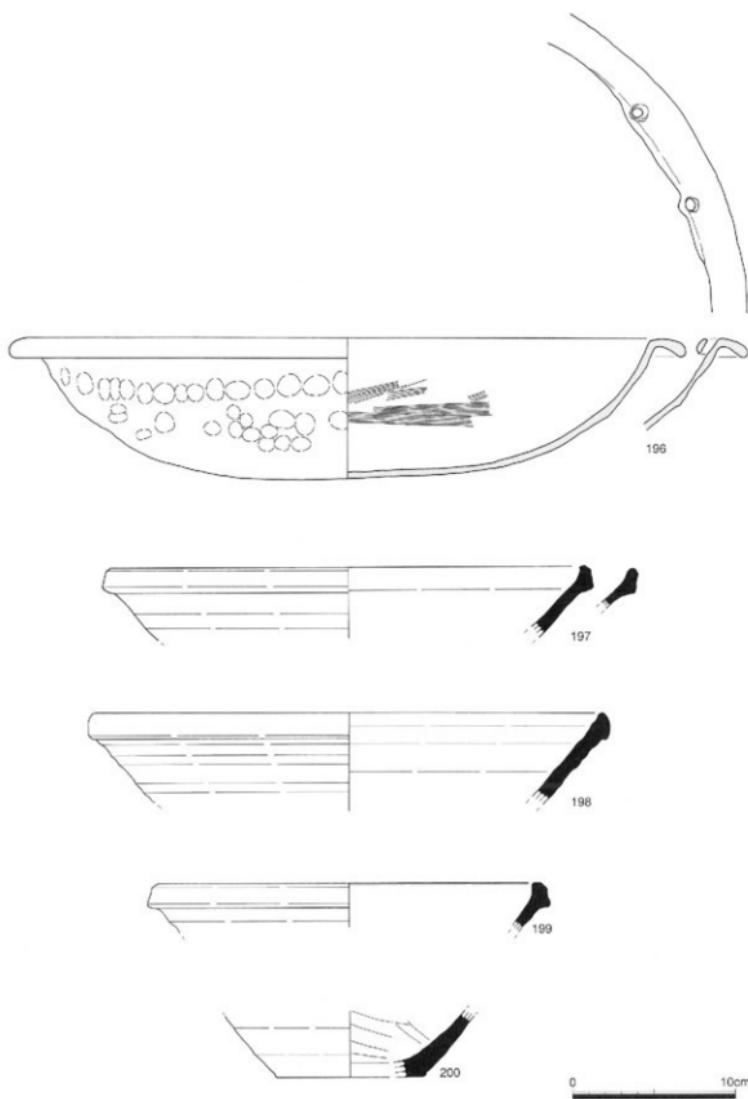


0 10cm

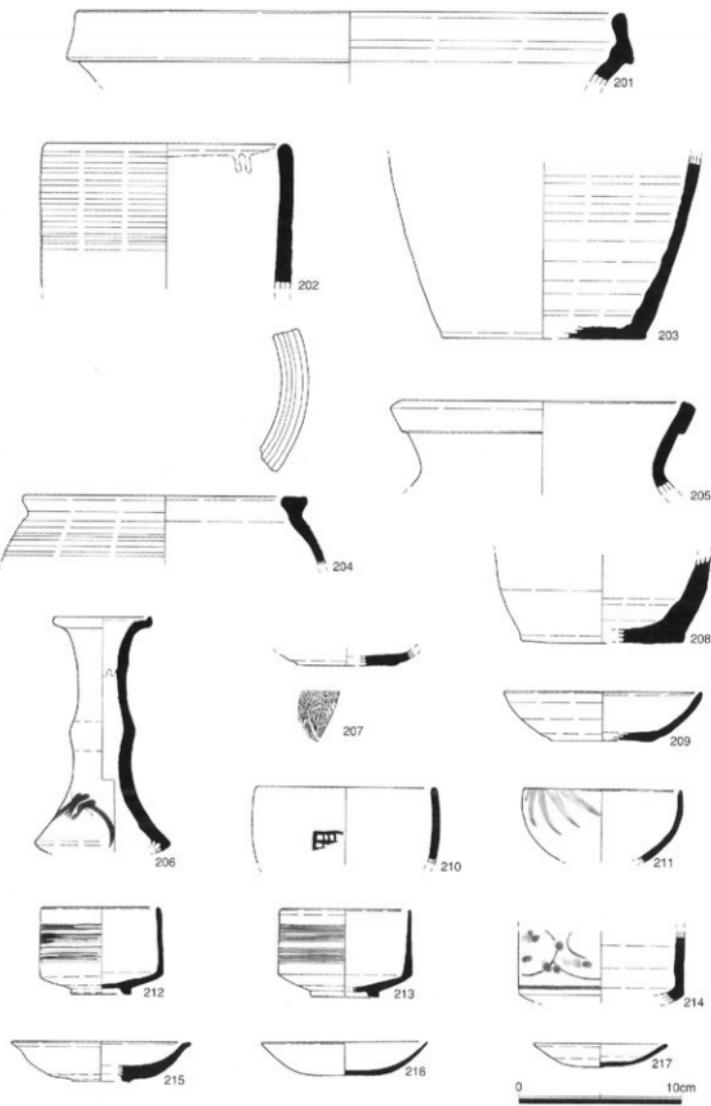
第66図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(2)



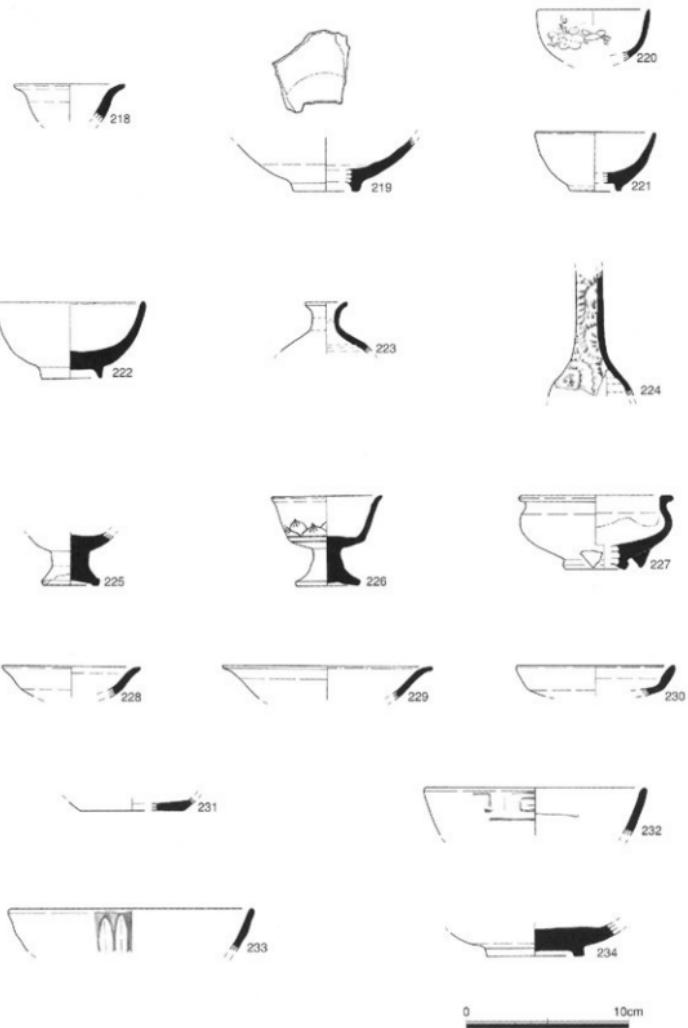
第67図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(3)



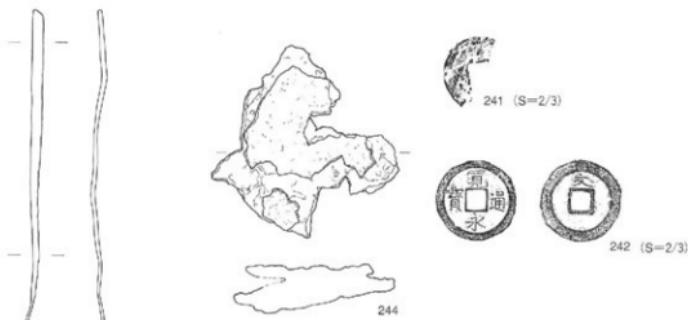
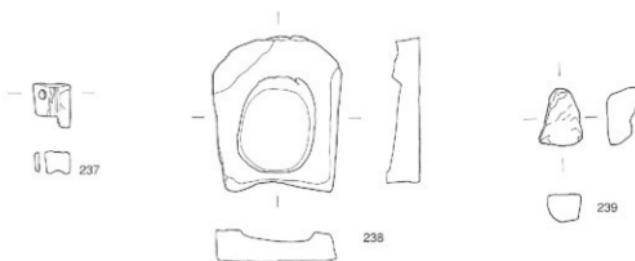
第68図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(4)



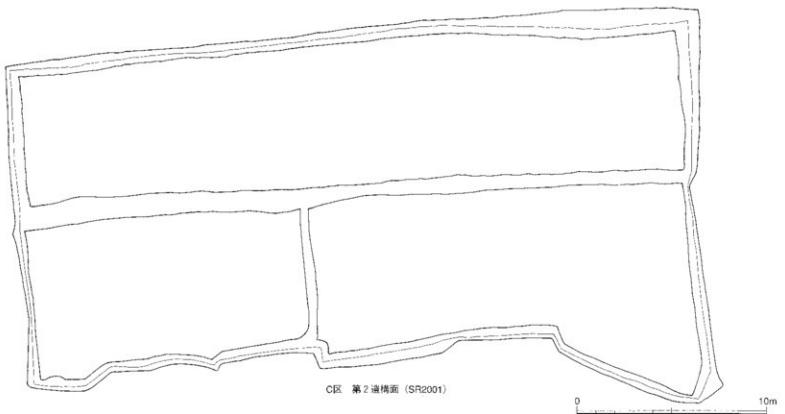
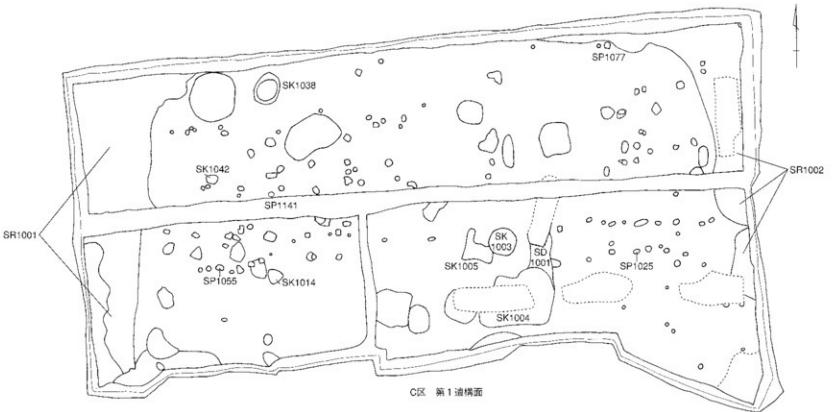
第69図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(5)



第70図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(6)



第71図 B-3区第2包含層出土遺物実測図(7)



第72図 C区遺構配置図

(3) C 調査区〈98年度〉(第72図)

C調査区は、東西に延びる調査区のはば中央に位置する820平方メートルである。

C調査区は第2造構面までが検査出来た。第1造構面からは近世の造構と中・近世の遺物が、また第2造構面ではA区で確認された自然流路が同様に全面にわたり確認された。

検出した造構は

第1造構面 SP…206基、SK…77基、SD…1基、SR…2基、SX…2基 計288基

第2造構面 SR…1基 計 1基

合計289基であった。

第2造構面

自然流路

SR2001

A区の調査でも確認された自然流路である。調査区全面にわたり深い砂層である。2m程度のトレンチを開けて確認したが、その下の層までは確認出来なかった。かなり深く幅の広い流路であると考えられる。

出土遺物 (第73~80図)

245は土師質の杯である。底部回転ヘラケズリ痕を留める。その特徴から吉備系の土器と考えられる。246は土師質の杯である。底部外面回転ヘラケズリ後板ナデが施されている。247は土師質の皿である。器壁薄く口縁内外面には煤が付着している。248は土師質の皿である。底部切り離し技法は不明である。249は土師質の皿である。底部切り離し技法は回転糸切りである。250は土師質の皿である。底部回転糸切り痕を留める。251は土師質の皿である。底部外面回転糸切り後ナデが施されている。252は土師質の皿である。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁は丸くおさめる。253は土師質の皿である。口径13cmを測る。254は土師質高台付の碗である。断面三角形の高台が貼り付けられている。255は土師質の鍋で口縁部は「く」の字状の形態である。256は土師質の甕である。口縁部が丸く外反する。外面にはハケ目が内面には指オサエ痕が見られる。257は瓦器楕である。幅0.9cm前後、帯状で径6cmの高台が貼り付けられている。258は瓦質の羽釜である。体部・口縁部が大きく内湾し、断面三角形の短い鈎が付く。259は瓦器楕である。体部内面にヘラミガキがまばらに施されている。底部には退化した断面三角形の高台が貼り付けられている。和泉型III-2期に比定される。260は瓦質の羽釜である。断面三角形の鈎が水平に付く。内面にはハケ目調整が見られる。261は瓦質の火鉢である。外面口縁部には雷文の連續文が陰刻されている。262は備前陶器の擂鉢である。擂目単位5条/1.2cmを測る。筒壁編年V期に比定される。263は備前陶器の擂鉢である。胴部よりやや外反しながら立ち上がる。擂目単位は13条/3.6cmである。264は堺・明石系の陶器擂鉢である。擂目単位12条/2.6cmを測る。265は備前の陶器擂鉢である。底部より直線的に立ち上がる。擂目は11条/1.8cmを測る。266は堺・明石系の陶器擂鉢である。擂目単位5条/cmを測る。267は明石系の陶器擂鉢である。擂目単位5条/cmで見込み擂目パターン中央より放射状に施す。268は肥前系唐津陶器の鉢である。白泥による刷毛目が内面に施されている。269は肥前系唐津の陶器鉢である。内面には白泥による刷毛目が施され、外面底部を除き鉄釉が施釉されている。17C中期の遺物と比定される。270は備前陶器の匣鉢である。半筒型で内面はロクロナデが施される。271は瀬戸系陶器の火鉢である。体部には円形の穿孔が2カ所に確認出

来る。また口縁部には煤が付着している。272は京・信楽系の陶器壺である。胴部は直線的に立ち上がる。273は無釉焼き締めの備前陶器で壺の底部である。274は備前陶器の壺である。無釉焼き締めの小壺である。275は陶器の徳利である。鳶口形の徳利で口縁部には指オサエ痕が見える。外面は白泥による刷毛目が施されている。276は備前陶器の人形徳利に貼付けられた大黒人形である。277は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗である。外面底部を除き鉄釉が施釉されている。278は瀬戸・美濃系陶器の大日茶碗である。削り出し高台で外面底部を除き鉄釉が掛かる。279は陶器の碗である。器壁やや厚く陶胎塗付により外面には風景が描かれている。280は肥前系唐津の陶器で端反形の皿である。外面底部を除き灰緑色の灰釉が施釉されている。281は瀬戸・美濃系陶器の皿である。灰釉が全面に施釉されている。見込み部には胎土目痕を留める。282は瀬戸・美濃系陶器の皿である。葵口底の灰釉皿である。全面に施釉されているが見込み部のみ釉を拭って内壳に仕上げる。283は肥前系唐津の陶器皿である。高台から口縁にかけ緩やかに内湾した胴部を持つもので、外面下半を除き灰釉が施釉されている。外面体部には胎土目痕が見られる。284は陶器皿である。高台から緩やかに内湾した胴部が延び口縁部で外反するもので内面に段を持つ。285は備前の灯明皿である。堅く焼き締まった薄い器壁で、内面には塗上が施されている。口縁部には煤が付着している。286は備前陶器の灯明受皿である。287は肥前系伊万里の磁器碗蓋である。染付により内面には草花に蝶、外面には唐草が描かれている。288は瀬戸・美濃系陶器の蓋である。外面には鉄釉が施釉されている。289は肥前系伊万里の磁器碗である。口径7.7cmの小降りで外面には染付による範が描かれている。290は白磁の皿である。外面底部は無釉で見込には窓着痕が見られる。291は白磁の皿底部である。高台部は無釉で高台内には墨書が2文字確認出来る。292は磁器青花皿である。葵口底で見込みには染付による二重園線が描かれている。293は肥前系磁器の瓶である。体部外面には染付により園線が描かれている。294は土師質の管状土錘である。295は土師質の座像人形である。中実で作り貼合せで外面には全面に雲母が付着している。296は瓦質丸瓦である。中央の少し盛り上がったアーチ形の丸瓦である。297は石製品の石臼である。298・299は石製品の砥石である。300・301は石製品の火打ち石である。302は金属製品で銅製品の香炉部品と思われる。303は金属製品で銅製品の笄と思われる。304は金属製品で銅合金の煙管雁首の頭部である。305は金属製品で銅合金の煙管雁首である。306は銭貨で北宋銭の「嘉祐元宝」である。307は銅錢である。錢種は不明であるが「□通元宝」と読める。

第1遺構面

溝

SD1001 (第81図)

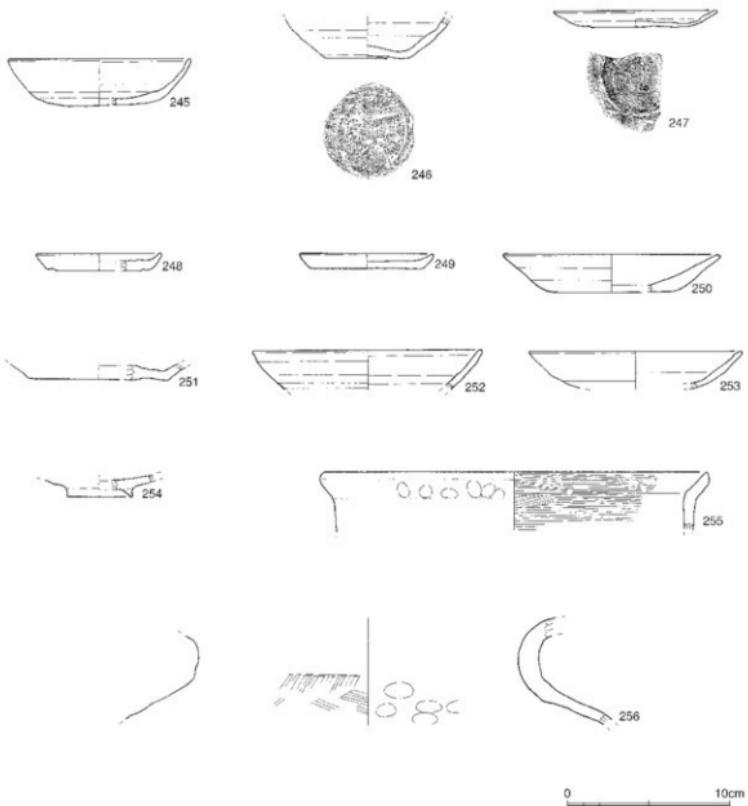
位置 D-34・35グリッド。

規模・形態等

北側を搅乱に、南側をSK1004に切られるため全体は不明であるが南北方向に延びると思われる長さ2.9m以上、幅1.2m、深さ0.33mを測る溝である。断面形態は不整形のオリーブ褐色砂質土の1層である。土師質壺、鍋、瓦質培塿、陶器皿、碗、擂鉢、銭貨等が多数出土した。

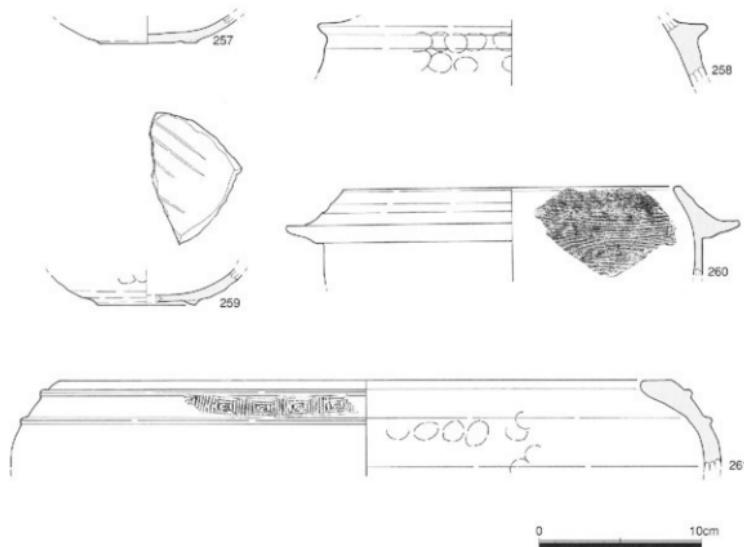
出土遺物 (第82・83図)

308は土師質の鍋である。口縁部端面は凹面に仕上げる。内面は横ナデ後板ナデ、外面は横ナデ後指オサエ痕を留める。309は土師質壺の底部片である。内外面共横方向の板ナデが施されている。310は瓦



第73図 C区SR2001出土遺物実測図(1)

質の焰格である。311は備前系陶器の擂鉢である。312は京焼の陶器碗である。高台部を除き内外面には灰釉が施釉され貰入が見える。313は備前陶器の灯明皿である。器壁全体に薄い無釉焼き締めである。口縁部には煤が付着している。314は肥前系陶器の皿である。象嵌三鳥手の大皿で内面には蓮弁文・縦線文を刻んでいる。17C後半のものである。315は肥前系唐津の陶器皿である。内面には白化粧土による刷毛目文が描かれている。316は肥前系伊万里の磁器猪口である。外面には染付による文が描かれている。317は肥前系伊万里の磁器猪口である。外面には染付により遠景が描かれている。318は銭貨「寛永通宝」である。



第74図 C区 SR2001出土遺物実測図(2)

土坑

SK1003 (第84図)

位置 D-34グリッド。

規模・形態等

調査区ほぼ中央部にSK1005の肩を少しきる形で東側に位置する。長軸1.5m、短軸1.49mの円形の土坑である。深さは0.47m前後でU字形の断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色砂質土の1層のみである。陶器碗、徳利が出土している。

出土遺物 (第85図)

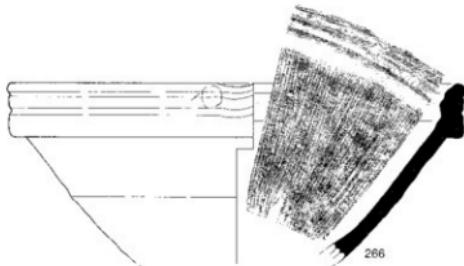
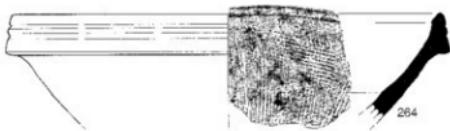
319は漬戸・美濃系陶器の碗の高台部である。320は陶器徳利である。腰部よりやや内湾しながら立ち上がる。外面には鉄釉が施されている。

SK1005 (第84図)

位置 D-34グリッド。

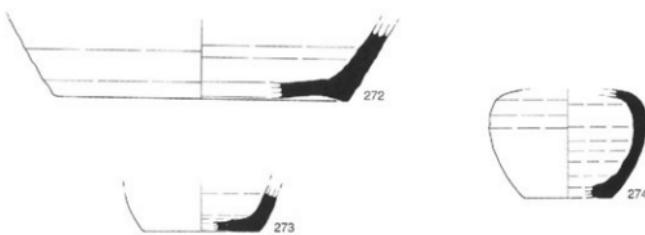
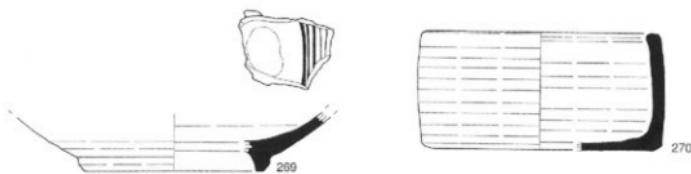
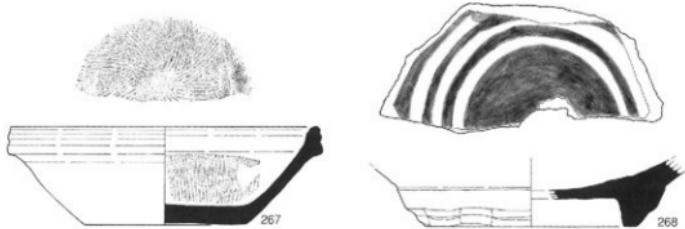
規模・形態等

調査区中央部にSK1003にやや東側の肩を切られる形で並んで位置する。長軸1.75m、短軸1.53mの不整形の土坑である。深さは0.33mでU字形の断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色砂質土の1層のみである。土師質皿、陶器鍋、青磁碗が出土している。



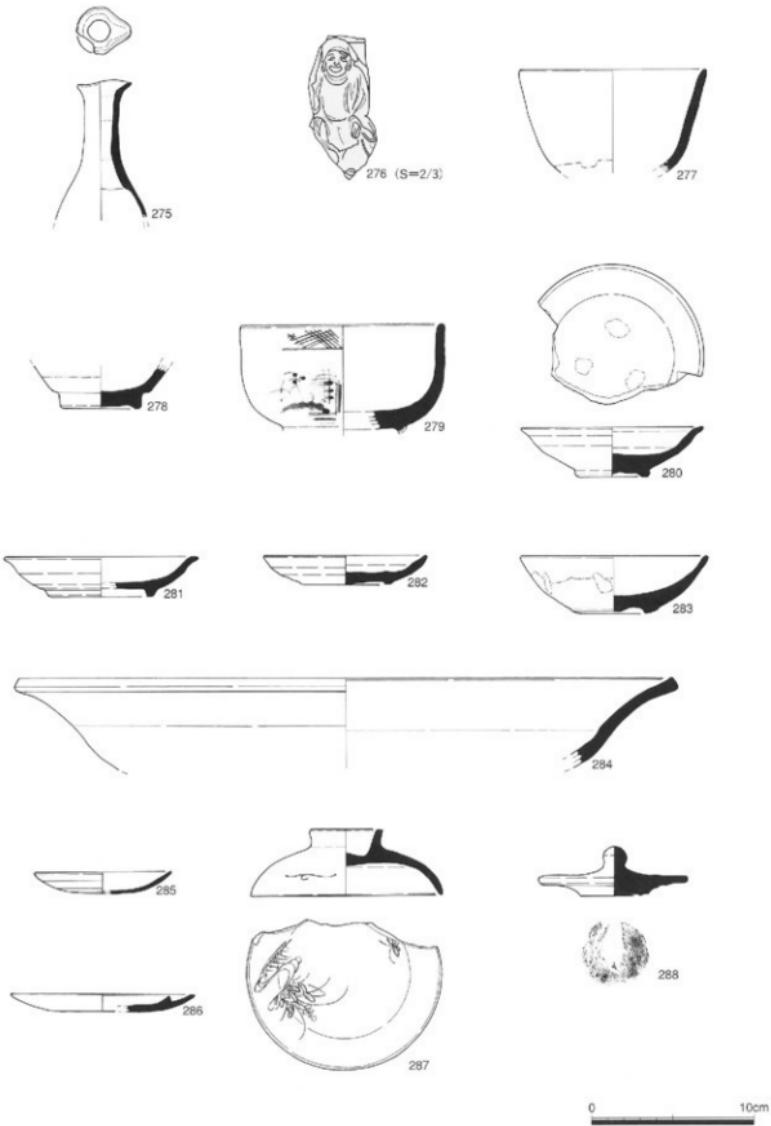
0 10cm

第75図 C区 SR2001出土遺物実測図(3)

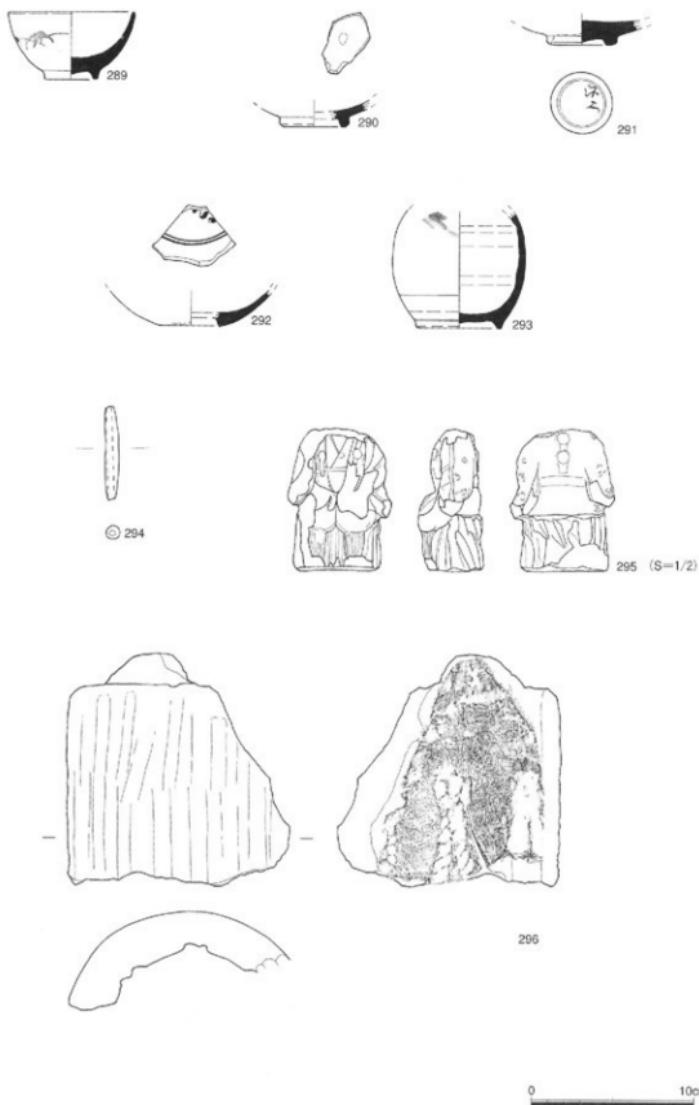


0 10cm

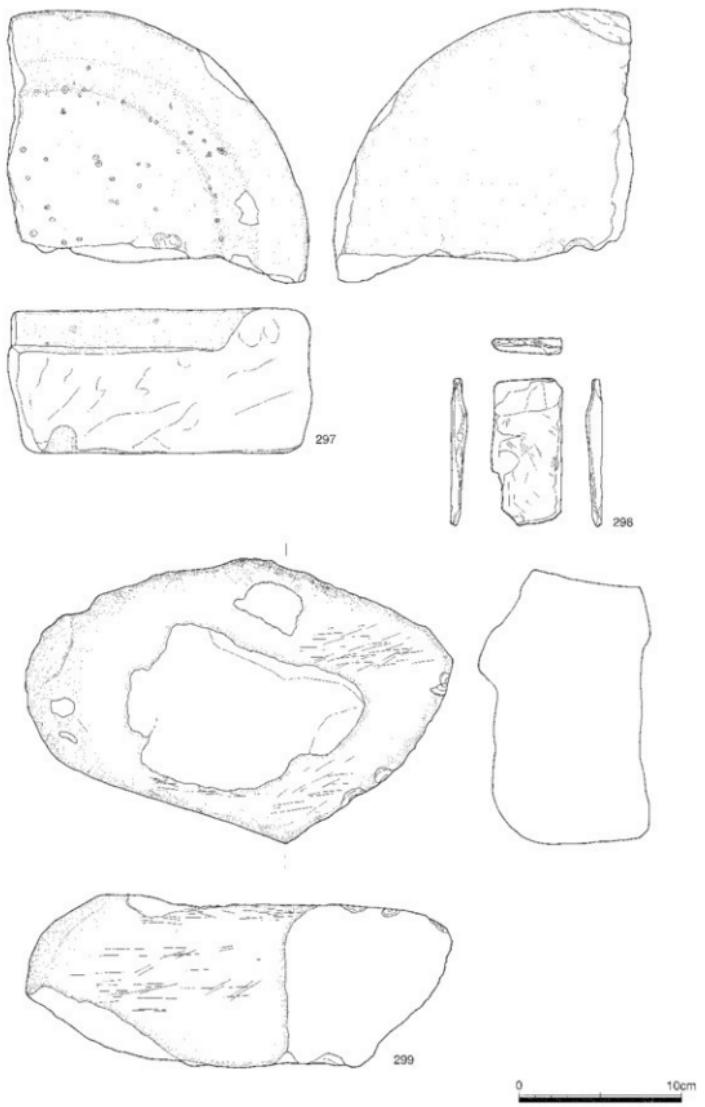
第76図 C区 SR2001出土遺物実測図(4)



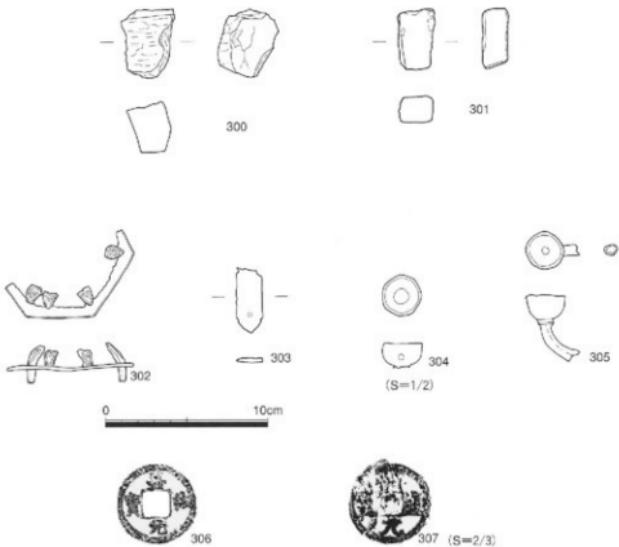
第77図 C区 SR2001出土遺物実測図(5)



第78図 C区 SR2001出土遺物実測図(6)



第79図 C区 SR2001出土遺物実測図(7)



第80図 C区 SR2001出土遺物実測図(8)

出土遺物（第86図）

321は土師質の皿である。底部外面回転糸切り痕を留める。近世の遺物である。322は陶器の鍋である。外面底部には断面三角形の脚が貼り付けられている。また内面見込み部には陶器の破片が2つ窓着している。323は青磁の碗である。体部外面には蓮弁文に淡緑色釉を施す。龍泉窯系である。

SK1004（第87図）

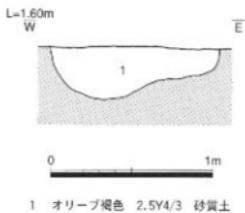
位置 C・D-34・35グリッド。

規模・形態等

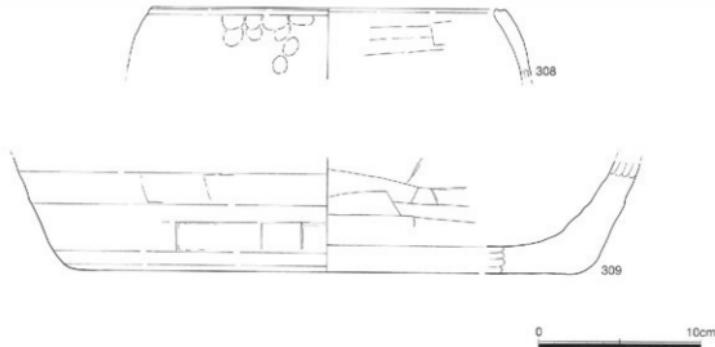
西側を搅乱により削平され全体は不明であるが、中央部南側に位置する長軸3.72m、短軸2.94mの不整形の土坑である。深さは0.34m前後で不整形の断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色砂質土の1層のみである。陶器皿、碗、鉢、土師質皿、磁器仏花器など多数出土している。

出土遺物（第88図）

324は土師質の皿である。底部外面回転糸切り痕を留める。近世の遺物である。325は陶器で半筒形の匣鉢である。外面には鉄漿が施されている。備前系と思われる。326は陶器の陶胎塗付の碗である。327は備前陶器の灯明皿である。器壁全体に薄く内面には塗土が施されている。口縁には煤が付着している。328は肥前系唐津の陶器皿である。高高台で見込み蛇ノ目粒剥ぎ部に鉄漿による渦が連続して描かれている。329は肥前系伊万里の磁器瓶である。外面には染付により蜻唐草が描かれている。330は肥前系伊万里の磁器瓶である。胴部下方が膨らむラッキヨ形基筒底で、外面には染付により植物が描かれている。



第81図 C区 SD1001実測図



第82図 C区 SD1001出土遺物実測図(1)

SK1014 (第89図)

位置 D-32グリッド。

規模・形態等

調査区のやや西部に位置する長軸0.79m、短軸0.76mの不整形の土坑である。深さは0.52m前後で不整形の断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色砂質土の1層のみである。土師質土錘、陶器碗が出土している。

出土遺物 (第90図)

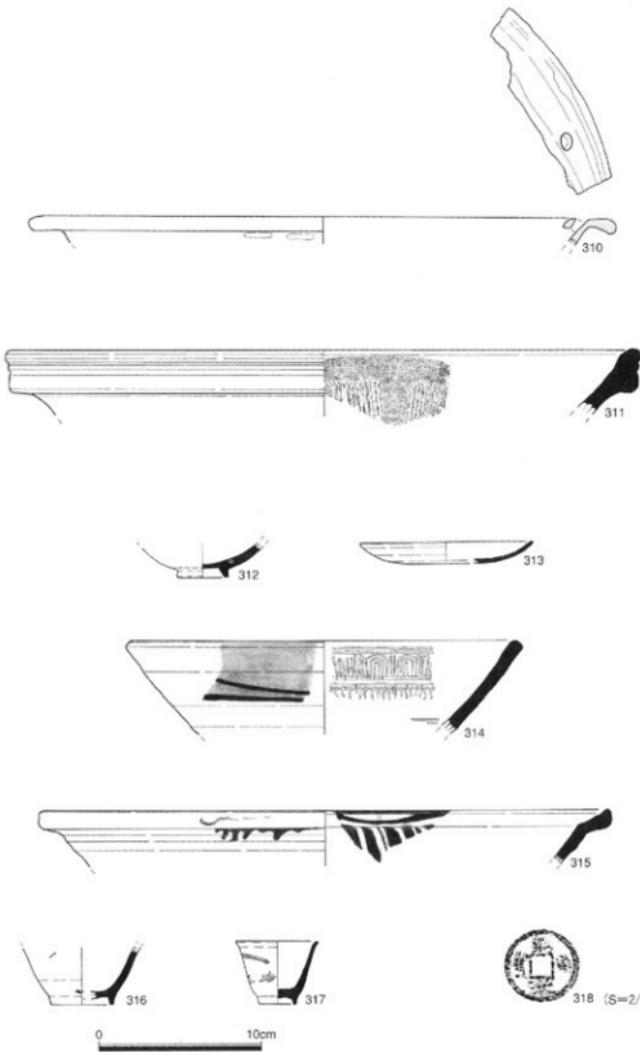
331は京焼の陶器碗である。淡黄色の胎土に内外面ロクロナデ後灰釉が施釉されている。332~335は管状土錘である。334は外面に煤が付着している。

SK1038 (第91図)

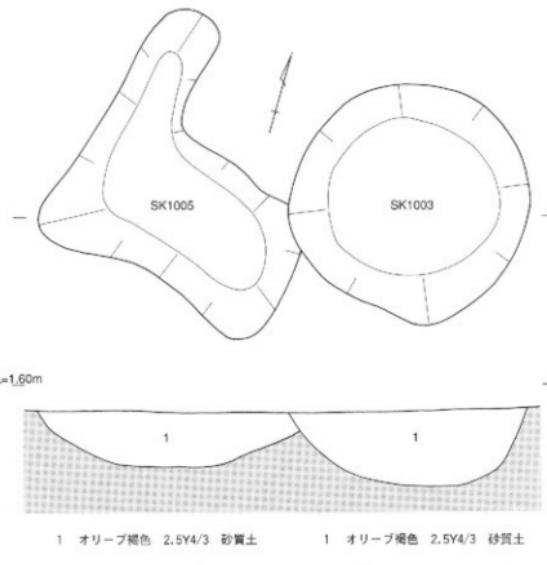
位置 F-32グリッド。

規模・形態等

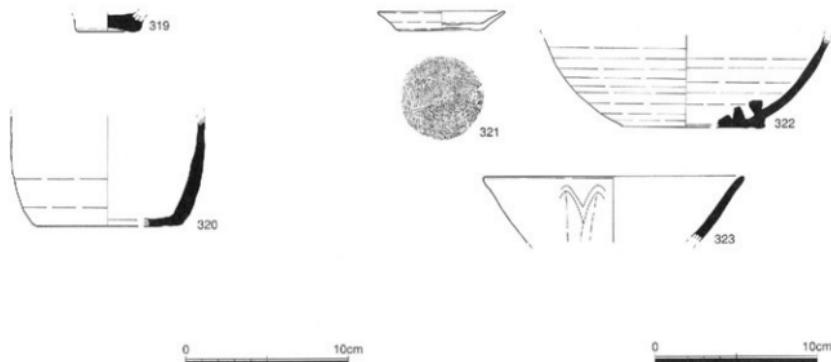
調査区西の北壁部に位置する長軸1.7m、短軸1.32mの楕円形の土坑である。深さは0.69mでU字形



第83図 C区 SD1001出土遺物実測図(2)

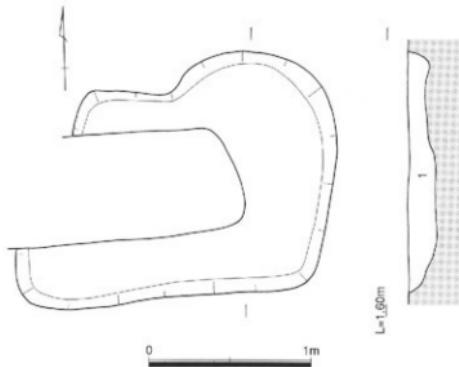


第84図 C区 SK1003・1005実測図



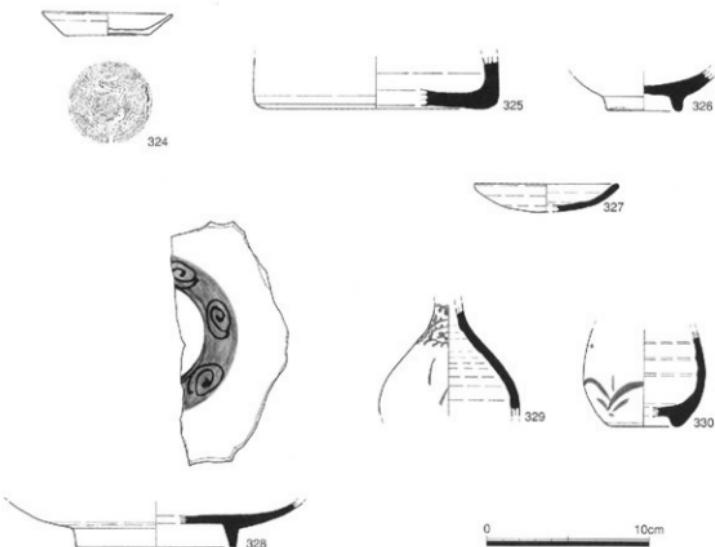
第85図 C区 SK1003出土遺物実測図

第86図 C区 SK1005出土遺物実測図

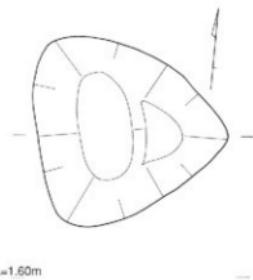


1 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土

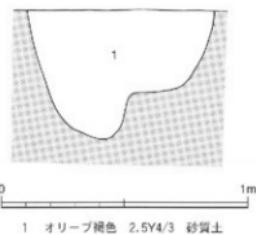
第87図 C区 SK1004実測図



第88図 C区 SK1004出土遺物実測図

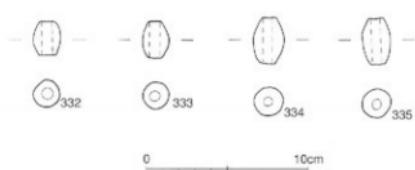


L=1.60m



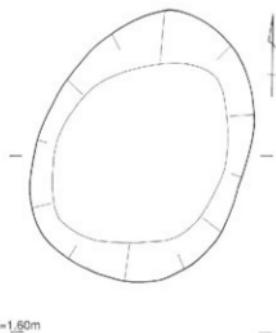
1 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土

第89図 C 区 SK1014実測図



0 10cm

第90図 C 区 SK1014出土遺物実測図



L=1.60m



1 オリーブ褐色 2.5Y4/4 砂質土

第91図 C 区 SK1038実測図

の断面形態を示す。埋土はオリーブ褐色砂質土の1層のみである。土師質玩具、瓦質焼壙、茶釜、陶器灯明皿、上瓶、磁器碗などの近世遺物が多く出土している。

出土遺物（第92図）

336は土師質のミニチュア玩具のこね鉢である。337は土師質のミニチュア玩具の壺である。型作り成形で外面には縁釉により植物が描かれている。338は瓦質の焼壙である。折縁の御暉系焼壙である。外面には煤が付着している。339は瓦質の茶釜である。鋤部を境に上下分割成形後貼合せている。内面にはナデ・ハケが施されている。鋤部より下には煤が付着している。340は備前陶器の灯明受皿である。外底部には回転糸切り痕を留める。器壁は薄く内外面には塗土が施されている。341は陶器の土瓶である。そろばん玉形の体部で外面には底部を除き鉄釉が施釉されている。342は肥前系伊万里の磁器小碗である。外面には染付による筆文が描かれている。

柱穴

第1造構面 SP群

SP1025

位置 D-35・36グリッド。

規模・形態等

調査区東部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長さ0.35m、幅0.22mを測る。断面形態は深さ0.2mのU字形である。

SP1055

位置 D-31グリッド。

規模・形態等

調査区西部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長さ0.41m、幅0.28mを測る。断面形態は深さ0.22mのU字形である。

SP1077

位置 F-35グリッド。

規模・形態等

調査区東部の北壁部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長さ0.35m、幅0.3mを測る。断面形態は深さ0.17mの逆台形である。

SP1141

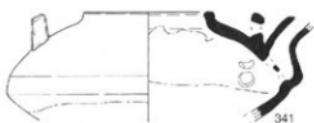
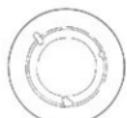
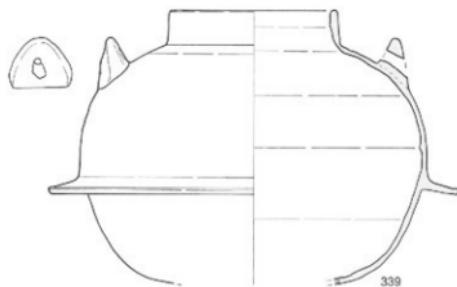
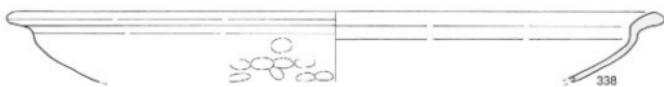
位置 E-32グリッド。

規模・形態等

柱穴で平面形態が円形で長さ0.35m、幅0.3mを測る。断面形態は深さ0.27mのU字形である。

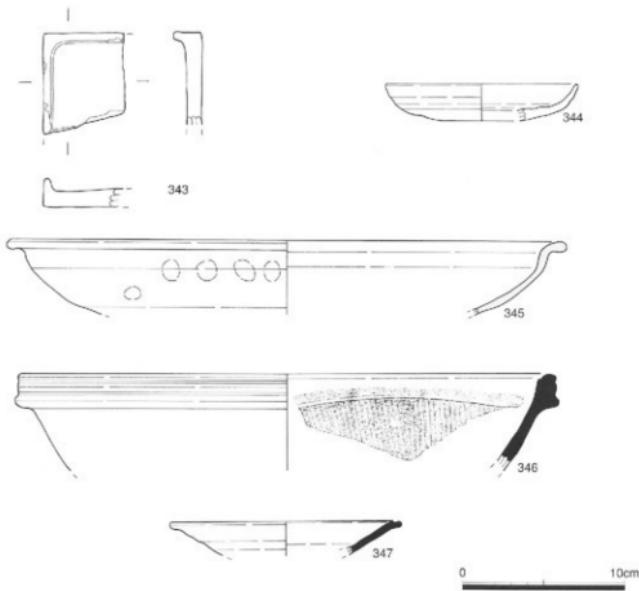
SP群出土遺物（第93図）

343は石製品の硯片である。方形で浅い縁を持つ。344は土師質の皿である。口径13.6cmを測る。345は瓦質の焼壙である。折縁の御暉系焼壙である。外面には煤が付着している。346は壺・明石系陶器の



0 10cm

第92図 C区 SK1038出土遺物実測図



第93図 C区1面SP群出土遺物実測図

播鉢である。内面体部には播目単位12条/3.5cmの播目が施されている。347は肥前系唐津の陶器皿である。口縁が外反する端反形の溝縁皿である。

自然流路

SR1001（第94図）

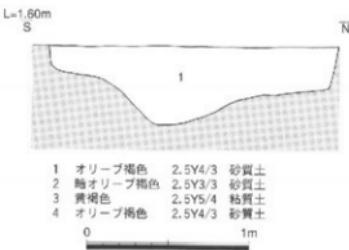
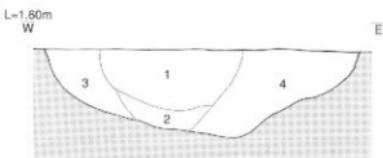
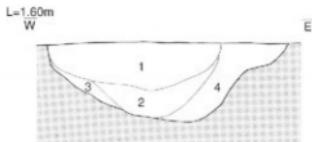
位置 C・D・E・F-3 グリッド。

規模・形態等

西壁と北壁に切られるため全体は不明であるが、長さ15m以上、幅6.4m以上、深さ0.54mを測る自然流路と考えられる。土師、陶器、磁器、石製品に煙管の雁首などの幅広い近世の遺物が多数出土している。

出土遺物（第95～100図）

348は土師質の鍋である。体部・口縁部が内湾するもので口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。体部外面には指オサエ痕を留める。349は土師質の鍋である。体部・口縁部が内湾するもので口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。体部外面には指オサエ痕を留める。外面には煤が付着している。350は土師質の鍋である。体部・口縁部やや内湾し口縁端部は凹面に仕上げる。外面には指オサエ痕と煤の付着が顕著である。351は土師質の焰烙である。関西系の直縁焰烙である。外面には煤が付着している。352は土師質の十能の柄である。353は東播系須恵質のこね鉢である。口縁端部が上下に



第94図 C 区 SR1001実測図

364は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗である。高台部を除き鉄釉が施釉される。やや粗い削り出し高台である。365は肥前系唐津の陶器皿である。見込には砂目痕を3カ所に留める。366は肥前系唐津の陶器溝縁皿である。見込には砂目痕を留め高台部には砂が付着する。367は肥前系唐津の陶器皿である。底径12.5cmの大皿である。外面は無釉で内面には灰釉と白泥による施釉が施され、見込には胎土目痕が見られる。368は肥前系伊万里の磁器碗である。口径6.4cmを測る小碗で外面にはコンニャク印判による花卉が描かれている。369は肥前系伊万里の白磁猪口である。豊付を除き釉が全面に施釉されている。370は肥前系伊万里の磁器碗蓋である。口径11.2cmを測り、内外面にはそれぞれ染付により圓線と八卦が描かれている。371は肥前系伊万里の磁器皿である。見込蛇ノ目釉剥ぎ。高台部無釉で豊付には砂が付着

拡張され、「く」の字状の形態を示している。森田編年Ⅲ期2段階に比定される。354は備前系陶器の擂鉢である。体内部には12条を1単位とする擂摺条線が施されている。355は陶器の擂鉢である。堺・明石系の擂鉢で擂目単位は11条/2.6cmを測る。356は備前陶器の擂鉢である。口縁端部は大きく上方に拡張する。擂目は不明である。357は備前系陶器の匣鉢である。半筒形の無釉焼き締め陶器で内面には火摺が、外面底部には窯印が押印されている。358は陶器の匣鉢である。半筒形で底部と胴部の堀には面取りが施されている。359は陶器の壺である。外面には沈線が施され鉄釉が施釉される。内面は無釉である。360は備前系陶器の壺である。内外面には指オサエ痕が見られる。361は備前系陶器の耳付壺である。赤褐色の焼き肌には石焼が見られる。362は肥前系唐津の陶器碗である。陶胎染付により外面には四方擗と遠景が描かれている。363は肥前系唐津の陶器碗である。内外面には灰釉が掛かる。高台部のみ無釉。

している。372は肥前系伊万里の磁器皿である。内面には染付による草花・團線が描かれている。373は肥前系伊万里の磁器皿である。輪花型打成形で内外には青磁釉が施釉される。374は肥前系伊万里の磁器瓶で、首部から口部まで平行で細く長い鶴首瓶である。外面体部には染付による遠景が描かれている。375は肥前系伊万里の磁器徳利である。外面には染付により草・團線が描かれている。376は肥前系伊万里の磁器瓶である。ラッキヨウ形の瓶類で染付により体部には植物と團線が描かれている。377は土師質の丸瓦である。378は瓦質の加工円盤である。直径3.4cmを測る。379は石製品の硯である。底部欠損で方形の縁の部分と思われる。380・381は石製品の砥石である。382は金属製品で銅合金の煙管雁首である。

SR1002（第101図）

位置 D・E・F-35・36・37グリッド。

規模・形態等

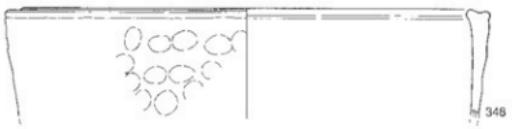
東壁と北壁に切られるため全体は不明であるが、長さ14.4m以上、幅10.7m以上、深さ0.93mを測る。耕作土及び床土を取り除いた層から検出された大きな流路（自然流路）と考えられる。調査区の東端から現在の田宮街道の下を通り、蛇行しながら西端に再び現れる形で検出された。東側流路の西岸及び西側流路の東岸から多量の貝殻が出土しており、蛇行していた川の内側（陸地）から外（川の中）へ捨てられたものと考えられる。なお出土した遺物から近世の遺構であると推測出来る。

出土遺物（第102図）

383は土師質の鍋である。体部・口縁部が内湾するもので口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。体部外面には指オサエ痕が残る。384は瀬戸・美濃系陶器の碗である。内外面には貫入が見られる。385は京焼の陶器碗である。高台部を除き灰釉が施釉され全面に貫入が見られる。386は磁器青花の皿である。口径11cmを測る端反の皿で、内外面には染付による團線が描かれる。

包含層出土遺物（第103～106図）

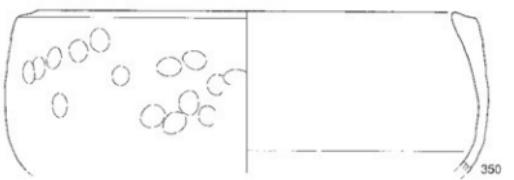
387は土師質灰明皿である。底部切り離し抜法は回転糸切りで口縁部には煤が付着している。388は土師質の杯である。底部回転糸切り後ナデが施されている。389～392は土師質の鍋である。389は口縁を「く」の字状に屈曲させたもので、口縁部が直線的に延びる。390は体部・口縁部が内湾するもので、口縁端部を肥厚させて端面を凹面に仕上げる。391は体部・口縁部が内湾するもので、口縁端部を肥厚させ内面には丁寧な横ナデが施されている。392は体部・口縁部が内湾するもので口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。393は土師質の羽釜である。断面三角形の短い飼がほぼ水平に付く。外面には煤が付着。394は土師質の焰烙である。関西系の直線焰烙である。395は土師質壺である。396は瓦質の壺である。器壁厚く内外面には指オサエ痕を留める。397は堺・明石系の陶器擂鉢である。口縁端部が上下に大きく拡張されている。398は無釉焼き締めの備前陶器の擂鉢である。口縁端部を「く」の字状に外反させ端部は尖る。399は備前陶器の擂鉢である。口縁端部と口縁帯下に重ね焼き痕を留める。400は肥前系三島唐津の陶器鉢である。401は肥前系唐津の陶器鉢である。外面には鉄釉と白泥による刷毛目が描かれる。402は肥前系唐津の陶器鉢である。高高台で底部より緩やかに立ち上がる。見込蛇ノ目剥剥ぎで外面底部は無釉である。底部には煤が付着している。403は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。内外面には鉄釉が掛かる。植木鉢と思われる。404は京・信楽系の陶器壺又は鉢である。外面には鉄釉、



348



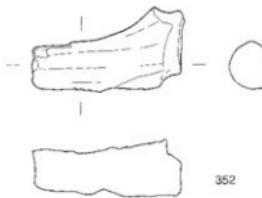
349



350



351



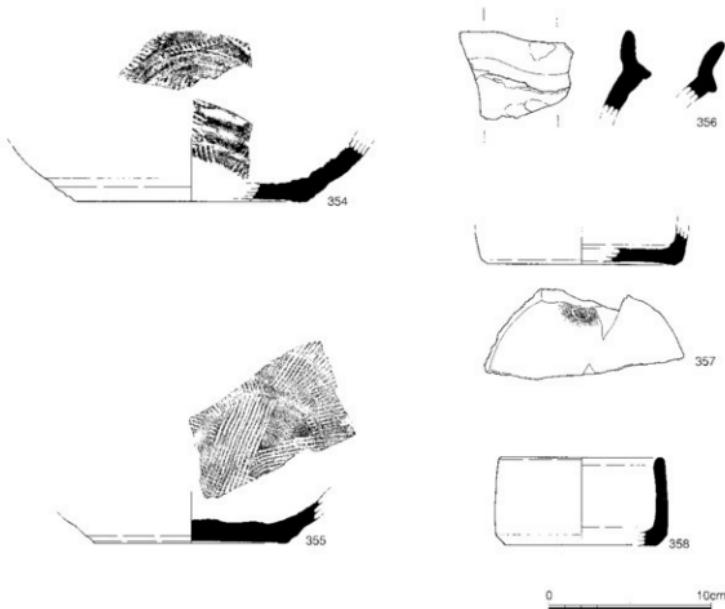
352



353

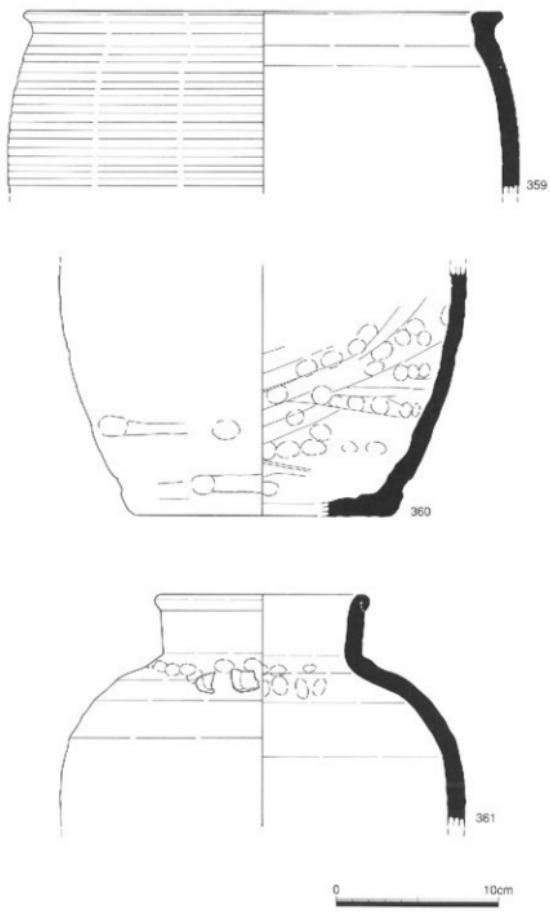
0 10cm

第95図 C区 SR1001出土遺物実測図(1)

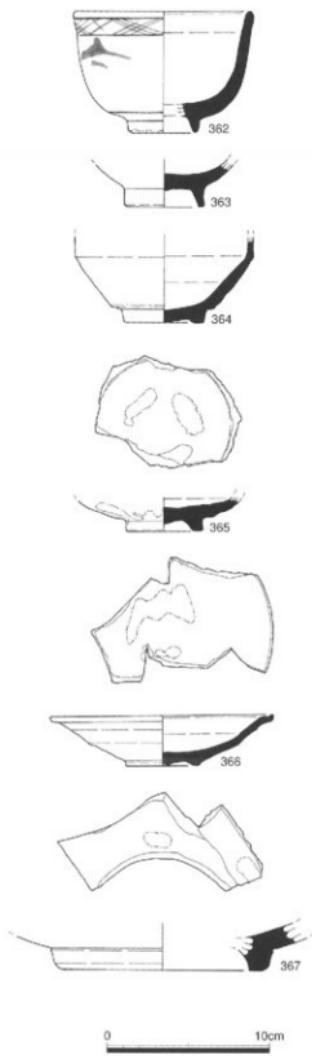


第96図 C区SR1001出土遺物実測図(2)

内面には上部のみ灰釉が掛かる。405は瀬戸・美濃系の陶器火鉢である。灰釉の上から白釉と緑色釉を三方に流し掛けている。口縁端部には敲打痕が多く見られる。406は備前陶器の壺である。体部には指オサエ痕を留める。407は陶器壺である。408は肥前系三島唐津の陶器壺である。口縁端部には象嵌が施されている。409は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗である。外面には茶褐色を呈する鉄釉に灰釉が流し掛けられている。410は肥前系唐津の陶器皿である。外面無釉の甚筒底で見込には目痕が見られる。411は陶器で肥前系唐津の皿である。外面底部は無釉で、見込と豊付には胎土目痕が見える。412は瀬戸・美濃系陶器の皿である。灰釉皿で底部は甚筒底になっている。413は肥前系唐津の陶器皿である。甚筒底で内面には灰釉が掛かる。外面は無釉である。414は備前系の陶器器利である。外面に一部窯変がある。415は肥前系唐津の陶器皿である。胴部が底部より緩やかに斜め上方に伸びる。口縁部はやや尖る。416は肥前系唐津の陶器皿である。内面は銅綠釉が施釉され見込は蛇ノ目釉剥ぎで、外面には透明釉が掛け分けされている。417は肥前系唐津の陶器大皿である。見込・豊付部に胎土目痕が見られる。418は備前陶器の灯明受皿である。419は陶器灯明受皿である。内外面には塗土が施されている。420は陶器の蓋である。底部回転糸切りで上部には把手が貼り付けられる。底部を除き灰釉が掛かる。421は肥前系磁器で伊万里のそば猪口である。外面には染付による文と囲線が描かれている。高台豊付無釉、砂付着。422は肥前系伊万里の磁器碗である。外面には染付により草花が描かれている。423は肥前系伊万里の磁器皿である。染付により内面には文が描かれている。424は肥前系伊万里の青磁花瓶と思われる。頸部よ

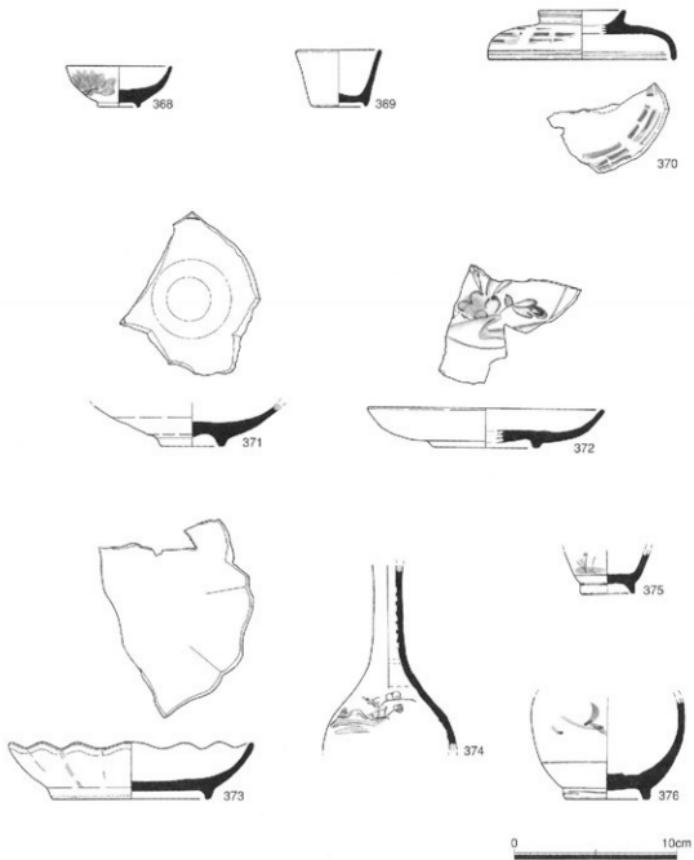


第97図 C区 SR1001出土遺物実測図(3)

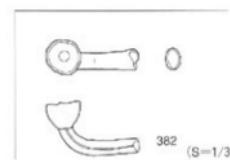
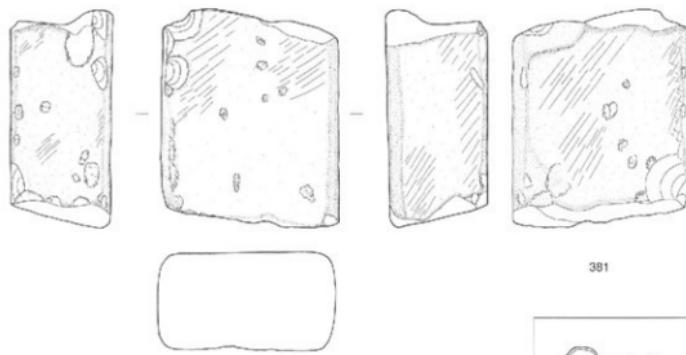
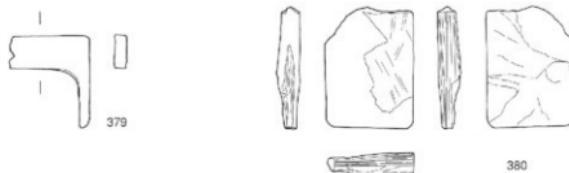
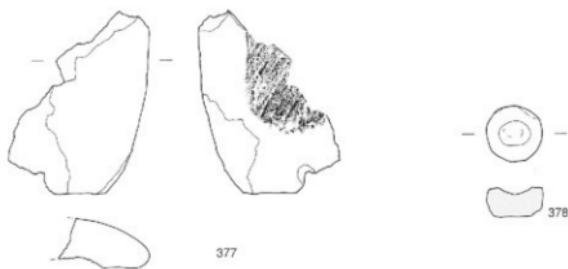


第98図 C区 SR1001出土遺物実測図(4)

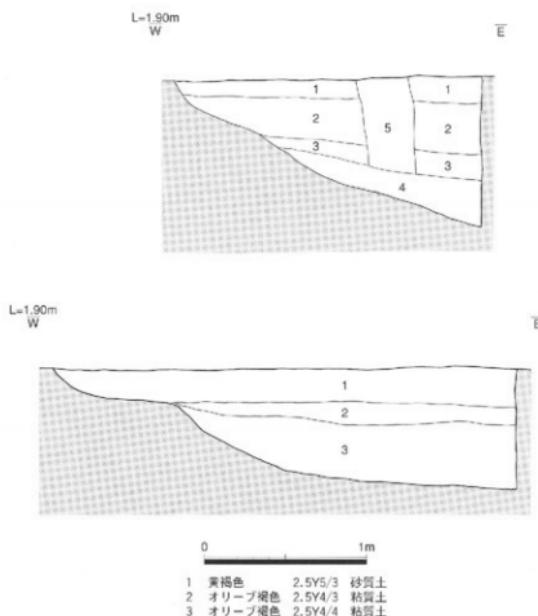
り緩やかに上方に延び口縁部はやや外反し端部は丸く仕上げる。425は肥前系伊万里の磁器香炉である。脚貼付で淡緑の青磁釉が施釉される。426は磁器の皿である。内外面には白色釉が掛かる。白磁の小皿である。427は磁器の皿である。内面には鶯目文が施され、外面底部を除き淡緑色釉が掛かる龍泉窯系の青磁皿である。428は上師質の土人形である。型作り貼合せの天神人形である。429は土師質の土人形である。型作り貼合せの大黒人形である。430~434は上師質の管状土錘である。435は瓦質加工円盤である。長径4.2cmを測る瓦の再利用品である。436は金属製品で真鍮の煙管吸口である。437は銅製の鋳造品で鋳型原料と思われる。438は金属製品で不明銅製品である。表面には金飾痕が見える。



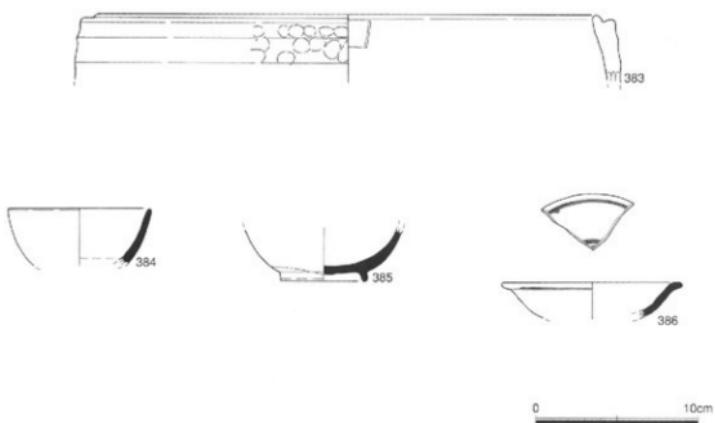
第99図 C区 SR1001出土遺物実測図(5)



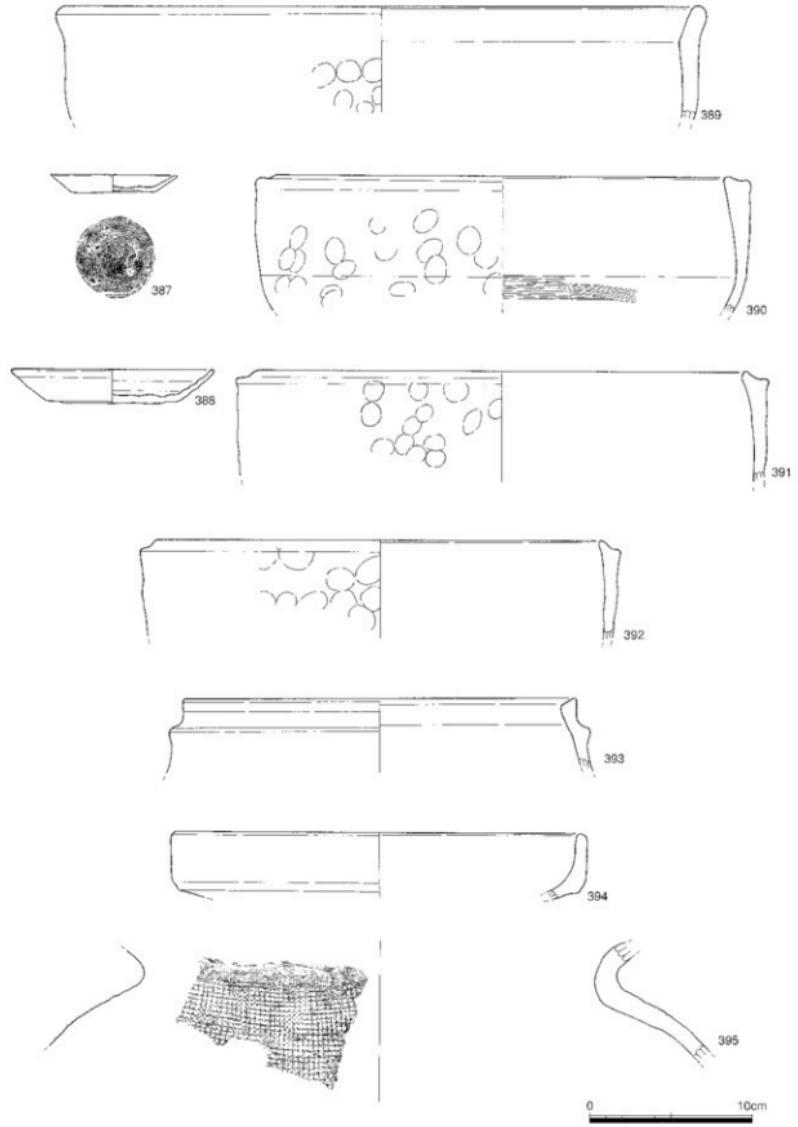
第100図 C区 SR1001出土遺物実測図(6)



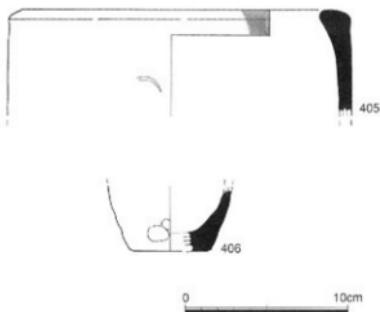
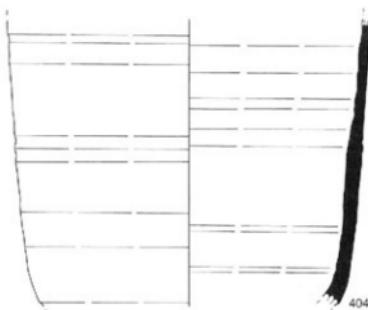
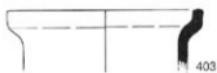
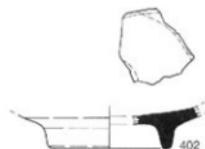
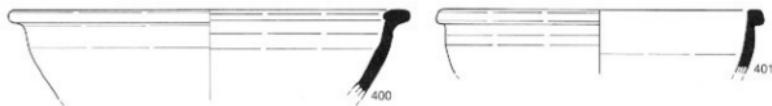
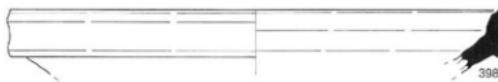
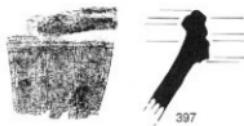
第101図 C区 SR1002実測図



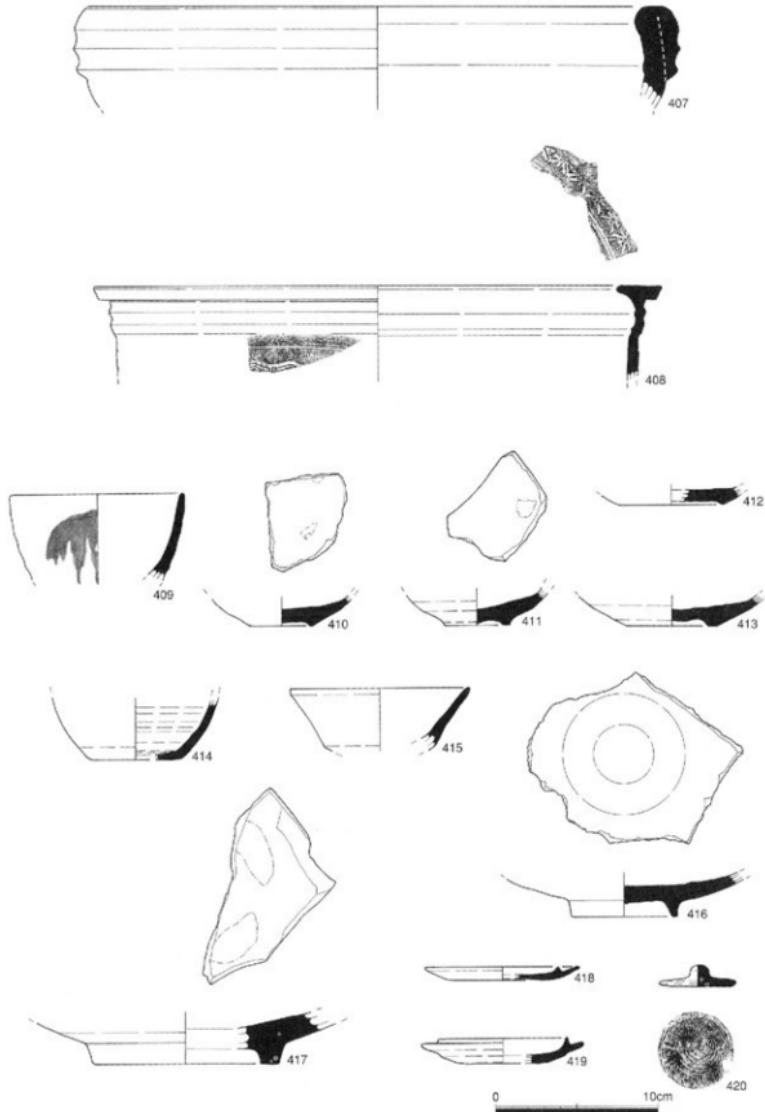
第102図 C区 SR1002出土遺物実測図



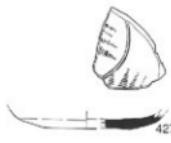
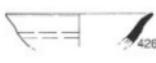
第103図 C区第1包含層出土遺物実測図(1)



第104図 C区第1包含層出土遺物実測図(2)



第105図 C区第1包含層出土遺物実測図(3)



428 (S=2/3)



429 (S=1/2)



430



431



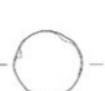
432



433



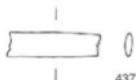
434



435



436
(S=1/2)



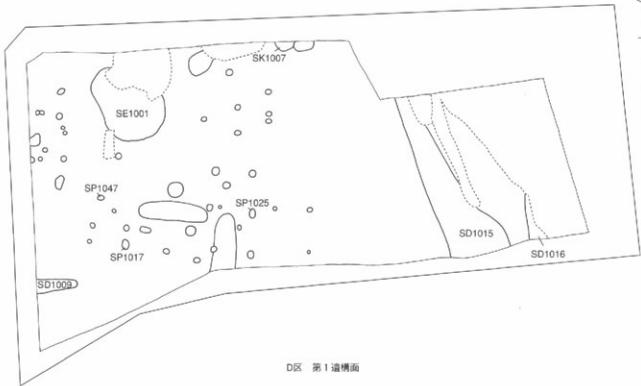
437



438



第106図 C区第1包含層出土遺物実測図(4)

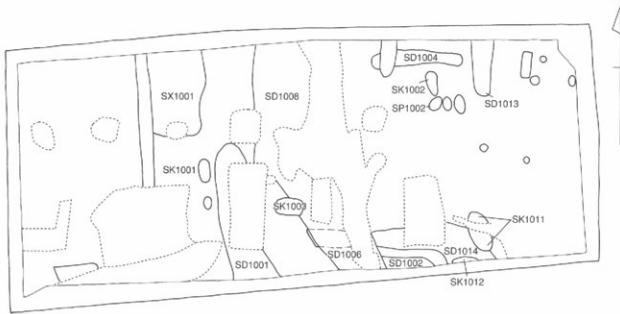


D区 第1遺構面



D区 第2遺構面

0 10m



E区 第1遺構面

第107図 D区・E区遺構配置図

(4) D 調査区・E 調査区〈03年度〉(第107図)

D 調査区

最終調査となる5次調査は、調査区のはば中央を、南北に走る道路で分断されるため、道路西側をD区、東側をE区と2調査区に分割して設定し、D・E区合計875平方メートルの調査を実施した。D・E区共に、他の調査区同様、建物基礎による搅乱が多く、造構の全体像を把握することは容易でなかった。

D区については2面の造構面が確認出来た。第1造構面はE区と対応する中世末の造構と考えられ、第2造構面は造構が南西隅に集中し中央から東側には造構が途切れる。

検出した造構は

第1造構面 SP…42基、SK…4基、SD…5基、SE…1基 計 52基

第2造構面 SD…1基、SK…6基、SP…16基 計 23基

合計 75基であった。

第2造構面

溝

SD2001 (第108図)

位置 D-39・40グリッド。

規模・形態等

南壁と西壁に切られるため全体は不明であるが、長さ7.2m以上、幅3.0m以上、深さ0.23cmの溝である。調査区内では東西方向の部分が検出されたが、東端は南北方向にはば直角に曲がっており、区画溝である可能性が高い。底部は南側(区画の内側と考えられる側)が深く、北側(区画の外側と考えられる側)が浅くなっていた。埋土は南側の深い部分は黒褐色砂質土であり、青磁、瓦器碗等が含まれていた。北側の浅い部分は、やや粘性のあるシルト質の埋土であったが、遺物は土師質皿、高台付椀、瓦質杯、羽釜、青磁碗などが出土した。遺物より、鎌倉時代に構築されたものと考えられる。

出土遺物 (第109図)

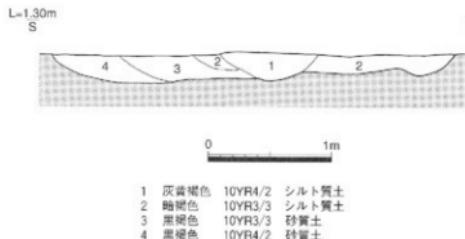
439は瓦質の杯である。回転ヘラ切り痕を留める杯で、底部丸底状で内面にわずかに凸凹があり、外面に成形による凸凹が顕著に見られる。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。440は土師質の高台付椀の底部である。断面一三角形の高台を貼り付ける。吉備系土師器椀である。441は土師質高台付の椀である。断面三角形の高台が貼り付けられる。吉備系土師器椀である。442は土師質の皿である。底部外面に回転糸切り痕を留める。443は瓦質の羽釜である。口縁部が体部から斜め上方に延びるもので口縁端部を内側に肥厚させている。444は須恵質甕の底部である。平底で、色調は灰白色を呈する。445は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に幅広い鍋蓮弁紋を有するもので、横田・森山分類案の龍泉窯系青磁碗I-5bに属する。

土坑

SK2001 (第110図)

位置 E-40グリッド。

規模・形態等



第108図 D区 SD2001実測図

柱穴

第2遺構面 SP群

SP2001

位置 E-39グリッド。

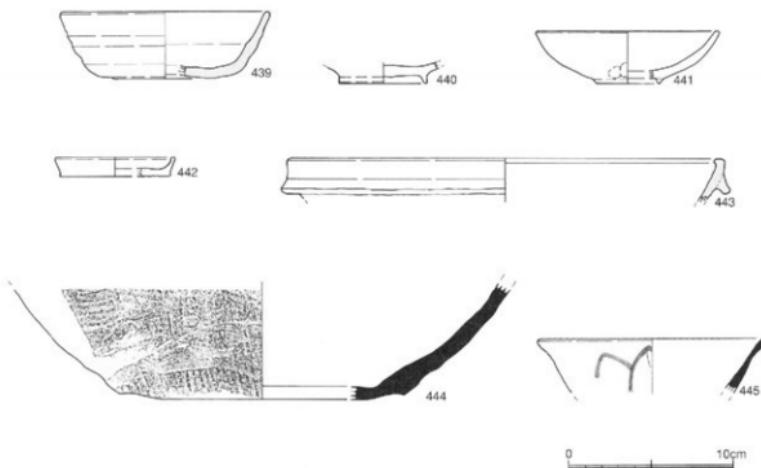
規模・形態等

調査区西部に位置する柱穴で平面形態が円形で長軸0.25m、短軸0.25mを測る。断面形態は深さ0.14mのU字形である。

SP2002

位置 F-39グリッド。

規模・形態等



第109図 D区 SD2001出土遺物実測図

調査区西部に位置する土坑である。平面形態が南北方向に長い陽丸の長方形で、長軸1.43m、短軸0.56mを測る。断面形態は深さ0.25mのU字形である。出土遺物は土師質椀、高台付椀である。

出土遺物（第111図）

446・447は古墳系土師器碗である。446は底部の高台は断面三角形である。

調査区西部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長軸0.5m、短軸0.3mを測る。断面形態は深さ0.16mの不整形である。

SP2011

位置 D-40・41グリッド。

規模・形態等

調査区西部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長軸0.75m、短軸0.7mを測る。断面形態は深さ0.14mの逆台形である。

出土遺物（第112図）

448は土師質の鍋である。口縁部が「く」の字状で、端部はやや平坦に仕上げている。口縁部・体部内面にはヨコハケ目が、外面には指オサエが施されている。449は須恵質の束縄系こね鉢である。口縁端部の上下への拡張がわずかに見られる。口縁部形態から分類すると、森山福牛第2期2段階に比定される。450は石製品の砥石である。

第1遺構面

溝

SD1009（第113図）

位置 D-39グリッド。

規模・形態等

東西に延びる溝である。調査区の西端に位置し、西側は西壁にあたるため全体は不明であるが、長さ2.1m以上、幅0.8m、深さ0.17mを測る。断面形態はU字形で上層はにぶい黄褐色シルト質土の1層である。出土遺物は土師質の高台付椀である。

出土遺物（第114図）

451は吉備系土師質の椀である。

SD1015（第115図）

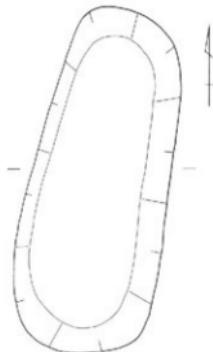
位置 D・E・F-43・44グリッド。

規模・形態等

北西から南東方向に延びる溝である。調査区の東側に位置し、南側は南壁にあたるなり東側も搅乱に挟まれ全体は不明であるが、長さ9.1m以上、幅3.2m、深さ0.1mを測る。断面形態はU字形で上層は褐色砂質土の1層である。出土遺物は土師質杯、鍋、瓦質壺、陶器碗、青磁碗、煙管などである。

出土遺物（第116図）

452は土師質の杯である。底部に回転糸切り痕を留め体部の器壁が薄く、底部の器壁はやや厚めに仕上げられている。453は土師質の鍋である。内外面には煤が付着している。454は瓦質壺の底部である。外面には格子目状の叩きを施す。455は京焼の陶器碗である。全面施釉の全体に貫入が見える。(17C後半)456は肥前系唐津の陶器碗である。器壁は薄く底部よりやや内湾。口縁部外反し端部はやや尖る。457は瀬戸・美濃系陶器天目茶碗の底部である。高台は削り出し高台で腰部からヘラケズリ調整し、見込部には艶のある茶褐色の鉄釉が厚く施釉されているのが見える。458は伊万里の青磁碗である。底部から



内湾しながら立ち上がる。口縁部直線的で端部はやや尖る。(1630-1650)459は銅製の煙管雁首である。1700年代のものと思われる。

SD1016

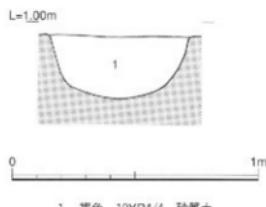
位置 D・E-44グリッド。

規模・形態等

SD1015のすぐ東隣に位置する溝である。1015同様、南側は南壁にあたり、東側も混乱に挟まれほんの1部しか確認出来ないため、全体は全くの不明である。長軸2.4m以上、短軸1m以上を測る。深さは不明である。銅鏡が出土している。

出土遺物（第117図）

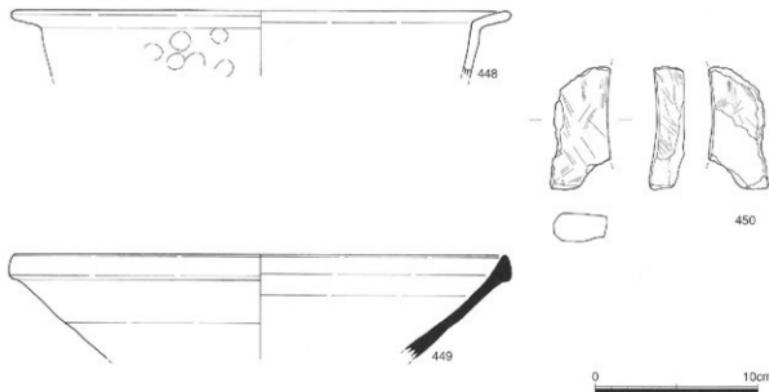
460・461は銭貨である。鎧が全体を厚く覆い詳細は不明である。



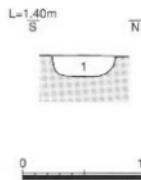
第110図 D 区 SK2001実測図



第111図 D 区 SK2001出土遺物実測図

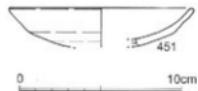


第112図 D 区 2面 SP 群出土遺物実測図

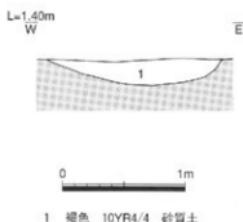


1 にびい黄褐色 10YR4/3 シルト質土

第113図 D 区 SD1009実測図



第114図 D 区 SD1009出土遺物実測図



第115図 D 区 SD1015実測図

土坑

SK1007 (第118図)

位置 F-42グリッド。

規模・形態等

調査区の中央部北側に位置する土坑である。北側は北壁にあたるため全体は不明であるが、長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.14mを測る。断面形態はU字形で土層はにびい黄褐色のシルト質土1層である。出土遺物は上師質杯である。

出土遺物 (第119図)

462は上師質の杯である。底部切り離し技法が回転糸切りで、底部から大きく内湾して立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部外面には成形による棱がつき、体部内面には丁寧なナデが施される。形態は備前焼の碗に類似する。

井戸

SE1001 (第120図)

位置 F-40グリッド。

規模・形態等

調査区北西部に位置する近世の井戸と思われる。掘方は長さ4.2m、幅3.3mを測る楕円形内に石組みが組まれている。出土遺物は近世の陶器皿、捕鉢、錢貨である。

出土遺物 (第121図)

463は陶器備前の捕鉢である。桃山期の頃のものと思われる。464は陶器唐津の灰釉皿である。高台部を除き白湯した薬灰釉が施されている。見込と高台部分には砂目積みの目痕が見られる。465は銅錢の「洪武通宝」である。

柱穴

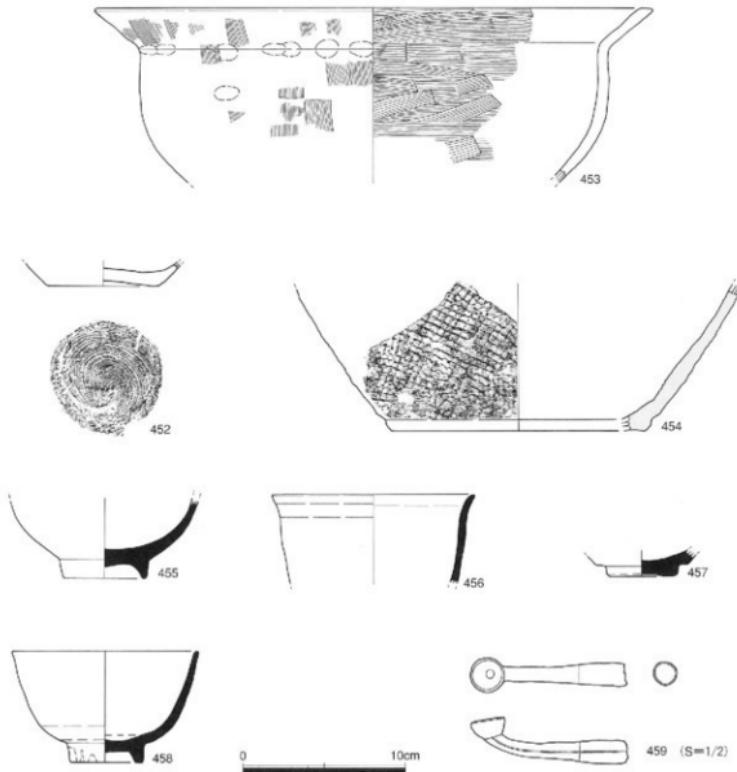
第1遺構面 SP群

SP1017

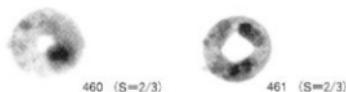
位置 D-40グリッド。

規模・形態等

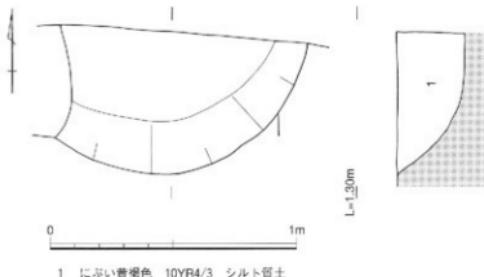
平面形態が長軸0.5m、幅0.35mを測る楕円形である。断面形態は深さ0.14mを測る不整形である。



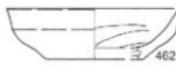
第116図 D区 SD1015出土遺物実測図



第117図 D区 SD1016出土遺物実測図



第118図 D区 SK1007実測図



第119図 D区 SK1007出土遺物実測図

SP1025

位置 E-41グリッド。

規模・形態等

平面形態が長軸0.45m、幅0.30mを測る橢円形である。断面形態は深さ0.20mを測る不整形である。

SP1047

位置 E-40グリッド。

規模・形態等

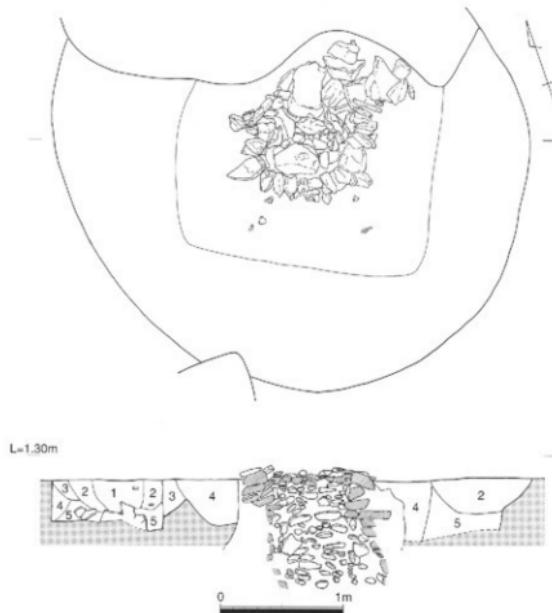
平面形態が橢円形で長軸0.35m、短軸0.25mを測る。断面形態は深さ0.28mの不整形である。

出土遺物（第122図）

466は土師質の皿である。467は肥前系伊万里の磁器皿である。見込み部に染付が施されている。468は肥前系の磁器皿である。初期伊万里で内面には染付が施されている。

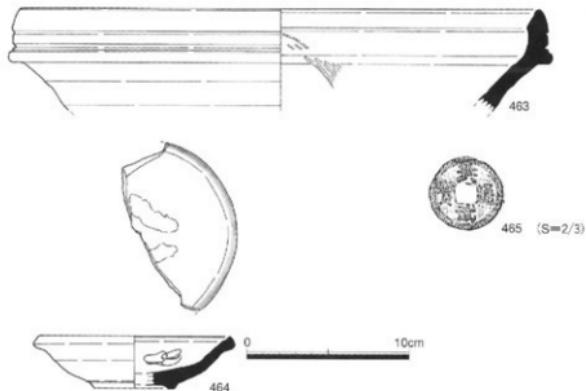
包含層出土遺物（第123~125図）

469は土師質の杯である。底部より緩やかに内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。470は土師質の杯である。底部切り離し技法が回転糸切りである。471は土師質の皿である。体部が直線的に延びる。全體に器壁は薄いが、底部に比べて体部の器壁がやや厚い。472は土師質の皿である。473は土師質の皿である。底部切り離し技法が回転糸切りで、口径8.6cmを測る。474は吉備系土師器碗である。底部から内湾して立ち上がり口縁部をわずかに外反させる。器壁を薄く仕上げ、体部外表面中位にはヨコナ

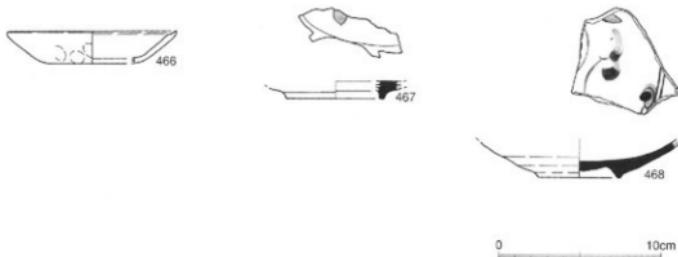


- | | | | |
|---|--------|---------|-------|
| 1 | にがい黄褐色 | 10YR4/3 | 砂質土 |
| 2 | 灰黄褐色 | 10YR4/3 | 砂質土 |
| 3 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 砂質土 |
| 4 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト質土 |
| 5 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト質土 |

第120図 D区 SE1001実測図



第121図 D区 SE1001出土遺物実測図



第122図 D区1面SP群出土遺物実測図

デによる縁が付く。体部内面は全体にナデが施される。高台は退化傾向が顕著で、断面逆三角形の小さな高台が貼り付けられる。475は土師質の鍋である。口縁部を「く」の字状に屈曲させ口縁部端面を凹面に仕上げる。476は土師質の羽釜で短い断面三角形の鋸が水平に貼り付けられている。体部外面に平行叩き目を施し、煤の付着が顕著である。477は瓦器椀である。底部より内湾して立ち上がり、口縁端部は尖り氣味に仕上げる。炭素の吸着は不良で、色調は黄灰を呈する。478は瓦器椀である。炭素の吸着が不十分なため、色調は灰色である。479は瓦質の火鉢である。体部外面に菊花文が押捺された奈良火鉢である。立石奈良火鉢分類の浅鉢Ⅲに比定される。480は東播系須恵質こね鉢である。口縁部を下方にやや拡張している。481は堅く焼き締められた備前陶器の擂鉢である。擂目はわずかに見えるが条数は不明である。482は陶器擂鉢である。口縁端部は上下に拡張が見られる。堺・明石系の擂鉢である。483は備前陶器の匣鉢である。外面体部には自然釉が掛かる。484は瀬戸・美濃系陶器の壺である。485は肥前系陶器で唐津の皿である。486は肥前系磁器の輪花皿である。内外面に染付による文が描かれている。487は青磁碗である。488は磁器青花皿である。口径10.6cmを測る。489は肥前系青磁染付の碗である。外青磁で、内面には四方擣、見込二重圓線内五弁花文が描かれている。490は土鍤である。土師質の管状土鍤で全体にナデが施されている。491は土師質の大型管状土鍤である。全体に指オサエの跡が残る。492は土師質の加工円盤と思われる。493は石製品の砾石である。494・459は銭貨で北宋錢の皇宋通宝である。

E調査区

第1遺構面

(5) E調査区〈03年度〉(第107図)

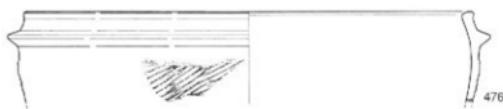
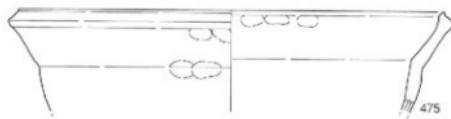
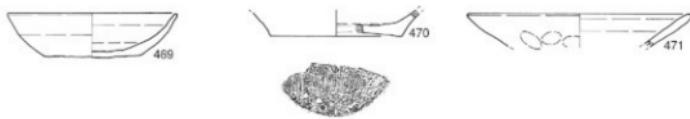
同時調査であるD調査区の道路を挟み、東側をE調査区と分割設定して、D・E区で合計875平方メートルの調査を実施した。

他の調査区同様、建物基礎による攪乱が多く、遺構の全体像を把握することは容易でなかった。

E区においては第1遺構面のみ確認出来た。中世末以降の遺構と考えられる。

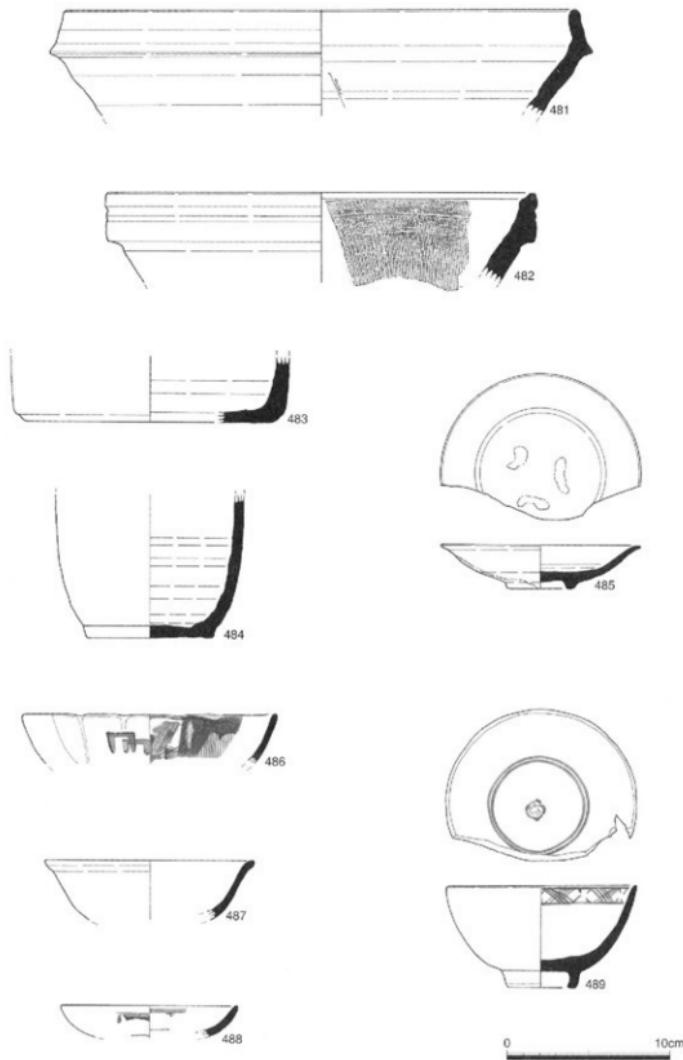
検出した遺構は

SP…8基、SK…9基、SD…9基、SX…1基 の合計 27基であった。

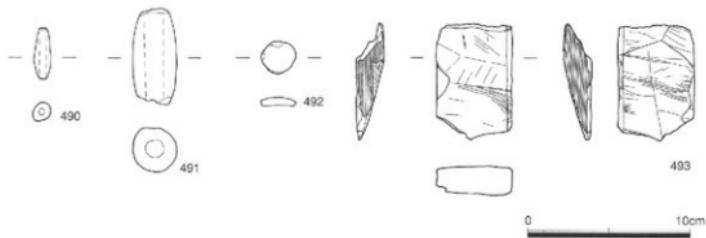


0 10cm

第123図 D区第2包含層出土遺物実測図(1)



第124図 D区第2包含層出土遺物実測図(2)



第125図 D区第2包含層出土遺物実測図(3)

溝

SD1001 (第126図)

位置 E・F-49・50グリッド。

規模・形態等

調査区中央部に位置し南北に延びる溝である。南側は南壁にあたり、搅乱にも削平されたりと全体は不明であるが、長さ7.2m以上、幅1~2.2m、深さ0.16mを測る。断面形態はU字形で土層は暗灰黄色の砂質土の1層である。出土遺物は土師質杯、高台付碗、土鍋、土錘、瓦質椀、須恵質こね鉢、青磁皿などである。

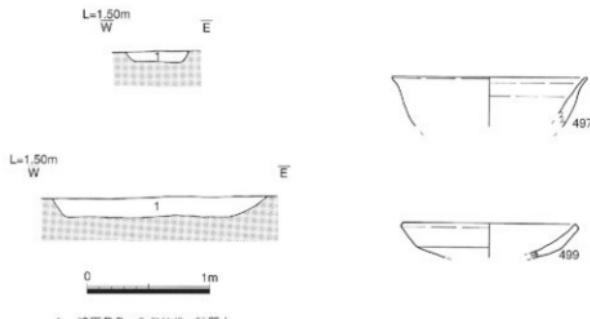
出土遺物 (第127図)

497は土師質の杯である。器壁は体部肥厚で口縁部は薄い。498は土師質の鍋である。口縁部は「く」の字状の形態である。内面には全体にハケ目(12本/cm)が施されている。499は土師質椀である。底部から大きく内湾して立ち上がり、口縁端部はやや平坦に仕上げる。体部外面には成形による稜がつき、内面はやや丁寧なナデが施される。500・501は吉備系土師質椀である。底部から内湾して立ち上がり、口縁部を僅かに外反させる。全体に器壁を薄く仕上げ、体部外面中位にはヨコナデによる稜が付く。また体部内面中位から底部にかけては、指オサエの跡が残り、体部内面は全体にナデが施される。502は和泉型の瓦器碗である。体部内面に渦巻き状のヘラミガキが施される。森島編年IV-4に比定されると思われる。503は須恵質の東播系こね鉢である。口縁端部の上下への拡張がわずかに見られる。森田編年のII期2段階に比定される。504は輸入磁器の青白磁で器壁はかなり薄く、内外面にはいずれも刻線により蓮弁が描かれている。小壺の口縁部と思われる。505・506は土師質の管状土錘である。

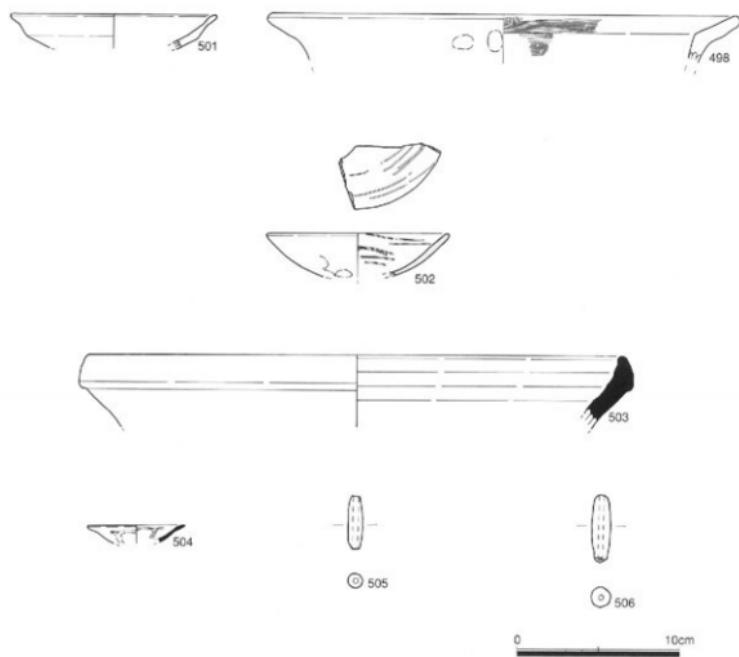
SD1002 (第128図)

位置 E-51・52グリッド。

規模・形態等



第126図 E区 SD1001実測図



第127図 E区 SD1001出土遺物実測図

調査区の南端に位置し、南壁にあたるため全体は不明であるが東西に延びる長さ2.5m以上、幅0.5m、深さ0.16mを測る溝である。断面形態は不整形で土層は暗灰黄色砂質土の1層である。出土遺物は瓦質羽釜である。

出土遺物（第129図）

507は瓦質羽釜である。体部・口縁部が内済し、口縁端部はやや丸くおさめる。体部内外面にヨコナデが施され口縁部直下に断面方向の短い鈎が貼り付けられる。

SD1004（第130図）

位置 G-51・52グリッド。

規模・形態等

東西に延びる溝である。調査区の北端に位置し、1部 SD1003に直角に切られるが、長さ4.8m、幅0.8m、深さ0.22mを測る。断面形態はU字形で土層は暗灰黄色砂質土の1層である。出土遺物は陶器瓶である。

出土遺物（第131図）

508は備前系の陶器無釉焼き締め徳利形瓶である。外面体部には窯印が施されている。

SD1006（第132図）

位置 E-50・51グリッド。

規模・形態等

調査区の南端に位置し、攪乱や南壁にあたるため全体は不明であるが、長さ2.9m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。断面形態も不整形で土層は暗灰黄色砂質土の1層である。出土遺物は土師質羽釜である。

出土遺物（第133図）

509は土師質の羽釜である。口縁部は直立し、口縁端面は外側に少し拡張されて平坦に仕上げている。鈎は断面三角で短い。

SD1008（第134図）

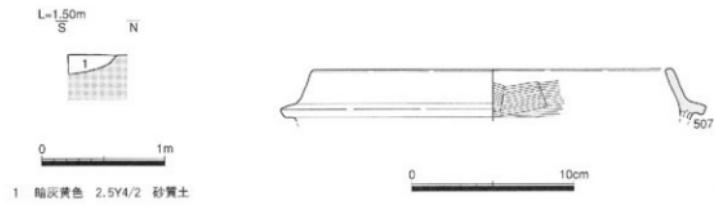
位置 F・G-50グリッド。

規模・形態等

調査区中央を南北に延びる溝である。北壁にあたり攪乱にも大きく削平されて全体は不明であるが、長さ9.2m以上、幅3m、深さ0.14mを測る。断面形態は不整形で土層は暗灰黄色砂質土の1層である。出土遺物は土師質杯、高台付椀、鍋、土鉢、瓦質椀、陶器碗、壺、磁器皿、青磁碗などである。

出土遺物（第135図）

510は土師質の杯である。回転糸切りで後ハラ切りされている。511は吉備系土師器碗である。底部から内湾して立ち上がり、口縁部をわずかに外反する。全体に器壁を薄く仕上げ、体部外面中位にはヨコナデによる稜が付く。また体部外面中位から底部にかけては指オサエの跡が残り、体部内面には全体にナデが施される。512は吉備系土師質の高台付碗である。全体に口径・器高が狭小で、山本吉備系III-3期C-3類に相当する。513は土師質の鍋である。外面には煤が付着している。514は和泉型の瓦器碗である。色調は青灰色で、底部外面には指オサエが見られる。515は陶器碗の底部である。外面に回転



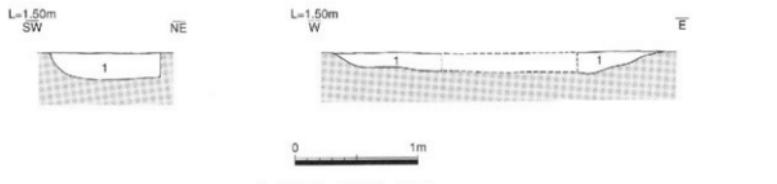
第128図 E区 SD1002実測図

第129図 E区 SD1002出土遺物実測図

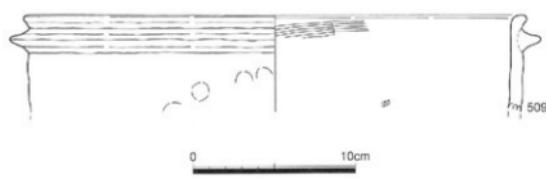


第130図 E区 SD1004実測図

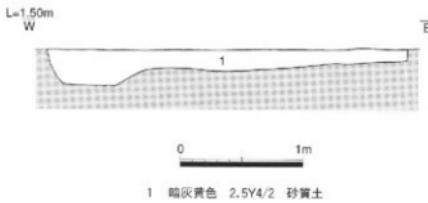
第131図 E区 SD1004出土遺物実測図



第132図 E区 SD1006実測図



第133図 E区 SD1006出土遺物実測図



第134図 E区 SD1008実測図

糸切り痕を留め全体に器壁を薄く仕上げる。色調は灰白色で備前焼である。516は瓦質の羽釜である。断面方形の短い鉗がやや下向きに付く。517は肥前系陶器の壺である。斑唐津で頸部には10条の櫛指があり、内外面には釉薬がまだらに掛かる。518は初期伊万里白磁の皿である。内面には型打による陽刻紋が施されている。519は初期伊万里青磁碗の底部である。内外面には淡緑釉が高台部を除き施釉されている。520は土錘である。521は石製品の砥石である。

SD1013（第136図）

位置 G-52グリッド。

規模・形態等

南北に延びる溝である。調査区の北側に位置し、北側は北壁にあたるため全体は不明であるが、長さ2.5m以上、幅1.2m、深さ0.14mを測る。断面形態はU字形で土層はにぶい黄褐色の砂質土の1層である。出土遺物は須恵質のこね鉢である。

出土遺物（第137図）

522は東播系の須恵質こね鉢である。口縁端部の上下への拡張がわずかに見られる。森田編年第Ⅱ期2段階に比定される。

SD1014（第138図）

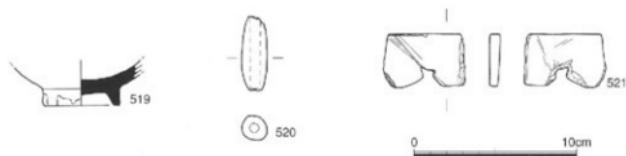
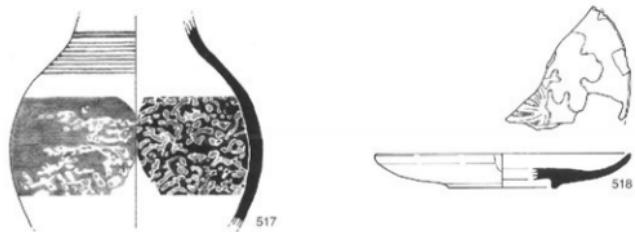
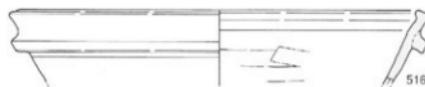
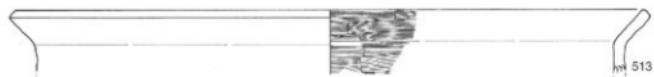
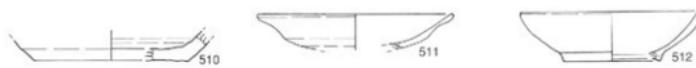
位置 G-51・52グリッド。

規模・形態等

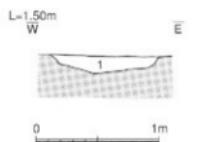
東西に延びる溝で東端は大きく南に曲がり南壁に突き当たる。そのため全体は不明であるが、長さ6.7m以上、幅2m、深さ0.2~0.4mを測る。断面形態は不整形で上層は上層がにぶい黄褐色の砂質土で下層が灰黄褐色シルト質土の2層である。出土遺物は土師質皿、高台付椀、羽釜、土錘、瓦質羽釜、須恵質こね鉢、陶器皿、磁器皿、火打ち石などの他にシジミを中心とする貝殻が多量に含まれていた。

出土遺物（第139・140図）

523は土師質の皿である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、色調はにぶい橙色を呈する。524は瓦質の椀である。体部内面には丁寧なヨコナデが施される。胎土は砂粒を含むが概ね精良である。525は土師質羽釜である。口縁部は直立し端部は平坦におさめる。口縁部直下に端部が丸みを帯びた鉗が貼り付けられている。また口縁部内面にはハケ目が施されている。526は土師質の羽釜である。口縁部がやや内湾し断面台形状の鉗が付く。527は土師質の羽釜である。口縁部やや内湾し断面三角形の短い鉗が貼り

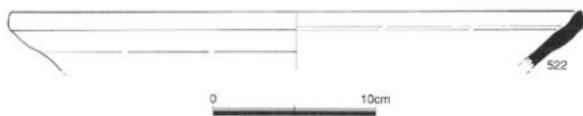


第135図 E区 SD1008出土遺物実測図

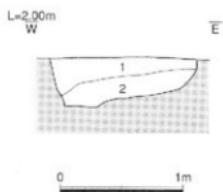


1 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土

第136図 E区 SD1013実測図



第137図 E区 SD1013出土遺物実測図



1 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
2 灰黃褐色 10YR4/2 シルト質土

第138図 E区 SD1014実測図

付けられる。体部内面にはヨコ方向のハケ日を施す。528は瓦質の羽釜である。口縁部はやや内湾させ、端部を尖り気味に仕上げる。529は瓦質の鍋もしくは羽釜の脚部と見られる。指オサエ後縦方向のナデを施している。断面の形状は円形状で胎土は砂粒を多く含んでいる。530は東播系須恵質のこね鉢である。口縁端部は上下に大きく拡張され「く」の字状の形態の縁帯を形成している。森田編年Ⅲ期2段階に比定される。531は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部が上下に拡張され「く」の字状の形態を示している。森田編年Ⅲ期2段階に比定される。

532は肥前系陶器皿の底部である。見込・高台部に砂目痕をもつ。533は初期伊万里の白磁皿である。型打成形による菊花型である。534は肥前系磁器の碗である。縦方向に5条1組の鎬を間隔置いて入れ、その間に「福」の文字を入れている。口縁部付近はやや内側に凹ませ染付による帶線を巡らせている。535は初期伊万里の磁器碗である。底部より内湾しながら立ち上がり、高台脇には鋸齒紋の入る特徴的な高台無軸の碗である。536は土鍤である。537は石製品の火打ち石である。

土坑

SK1001 (第141図)

位置 F-49グリッド。

規模・形態等

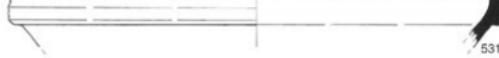
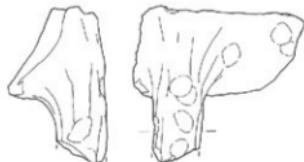
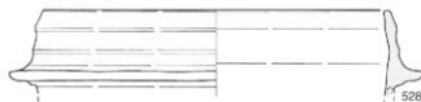
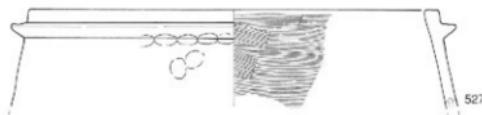
調査区中央部や西に位置する土坑である。長軸が南北方向で1.11m、短軸0.5m、深さ0.16mを測り、平面形態は丸長方形である。断面形態はU字形で土層は黒褐色砂質土の1層である。出土遺物は上師質高台付椀、青磁碗である。

出土遺物 (第142図)

538は上師質の椀である。色調が灰白色の吉備系土師器椀である。539は龍泉窯系青磁碗である。

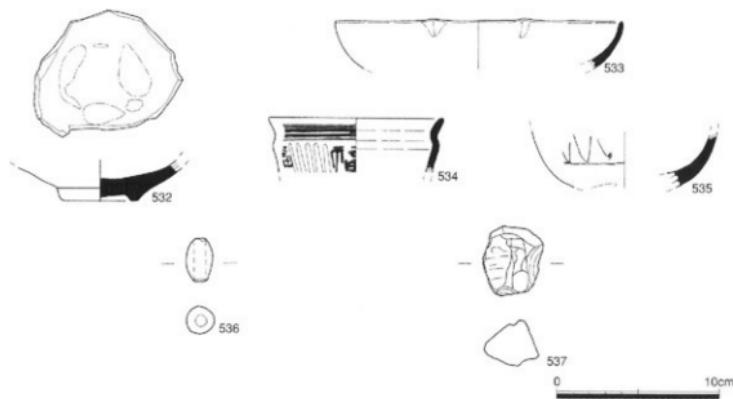
SK1002 (第143図)

位置 G-52グリッド。

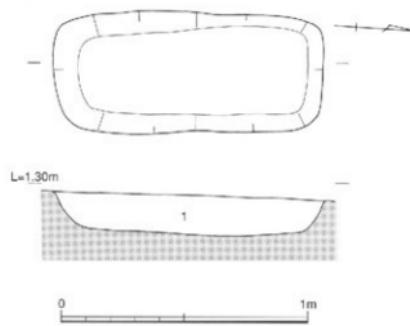


0 10cm

第139図 E区 SD1014出土遺物実測図(1)

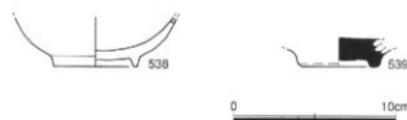


第140図 E区 SD1014出土遺物実測図(2)



1 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土

第141図 E区 SK1001実測図



第142図 E区 SK1001出土遺物実測図

規模・形態等

調査区の北壁近くに位置する南北に長い長軸1.32m、短軸0.8mの楕円形の土坑である。深さは0.13mで不整形の断面形態を示す。埋土は暗灰黄色砂質土の1層のみである。土師質杯、瓦質羽釜が出土している。

出土遺物（第144図）

540は土師質の杯である。底部回転ヘラ切りを留める。541は土師質の杯である。底部切り離し技法は不明である。542は瓦質の羽釜である。口縁部がほぼ直立し端部を平坦に仕上げる。体部外面に指オサエが施され、口縁部直下に断面三角形の鈎が付く。

SK1003（第145図）

位置 E・F-50グリッド。

規模・形態等

調査区中央部に長軸が東西を向きSD1008の肩部を切る形で位置する、長軸0.76m、短軸0.41mの平面形態が隅丸長方形の土坑である。深さは0.1mで不整形の断面形態を示す。埋土は黒褐色砂質土の1層のみである。土師質杯、高台付椀が出土している。

出土遺物（第146図）

543は土師質の杯である。底部より緩やかに立ち上がる。544は土師質の椀である。

SK1011（第147図）

位置 E-50グリッド。

規模・形態等

調査区南東部に位置する遺構中央部が搅乱により切られているが、長軸2.24m、短軸1.15mの平面形態が楕円形の土坑である。深さは0.2mでU字形の断面形態を示す。埋土は暗灰黄色砂質土の1層のみである。陶器碗が出土している。

出土遺物（第148図）

545は陶器碗である。口縁部外面に重ね焼きと思われる薄い痕が見える。備前の碗である。

SK1012（第149図）

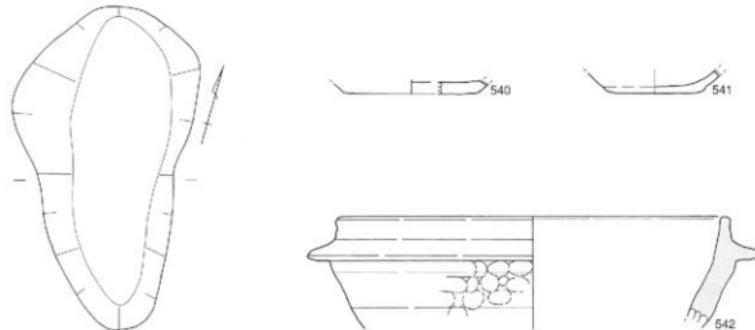
位置 E-52グリッド。

規模・形態等

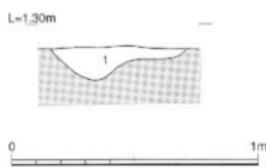
調査区南東部隅に位置し長軸が東西を向き南壁にあたる、長軸1.62m、短軸0.4mの平面形態が隅丸不整形の土坑である。深さは0.12mで不整形の断面形態を示す。埋土は暗灰黄色砂質土の1層のみである。土師質杯が出土している。

出土遺物（第150図）

546は土師質の杯である。体部外面には成形時の稜が多く見える。

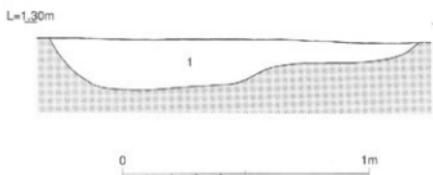
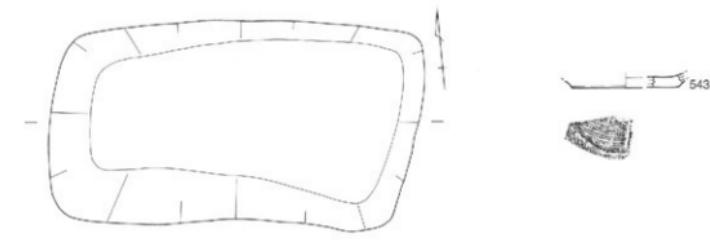


第144図 E区 SK1002出土遺物実測図



1 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質土

第143図 E区 SK1002実測図



1 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土

第145図 E区 SK1003実測図

第146図 E区 SK1003出土遺物実測図

柱穴

SP1002

位置 F・G-52グリッド。

規模・形態等

調査区北東部に位置する柱穴で平面形態が梢円形で長軸0.8m、短軸0.55mを測る。断面形態は深さ0.36mの逆台形である。

出土遺物（第151図）

547は土師質の椀である。吉備系土師器椀で底部から内湾して立ち上がる。高台は退化傾向が顕著で、断面三角形、一部台形で低い。548は土師質の椀で、吉備系の土師器椀である。

不明遺構

SX1001（第152図）

位置 F・G-49グリッド。

規模・形態等

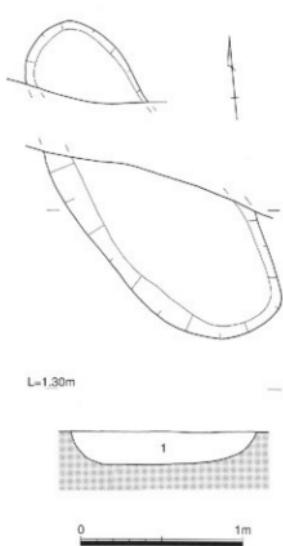
調査区北西部に位置する長軸が南北を向き北壁にあたり、西側もSD1005に切られるため全体は不明である。長軸3.64m、短軸2.94mの平面形態が不整形の不明遺構である。深さは0.14mで不整形の断面形態を示す。埋土は暗オリーブ褐色砂質土の1層のみである。土師質羽釜、土錘、磁器皿などが出土している。

出土遺物（第153図）

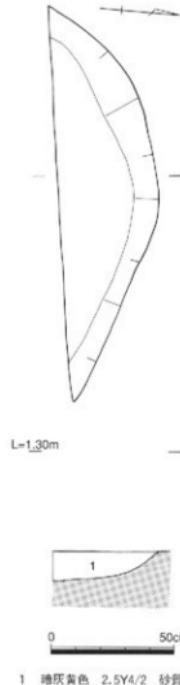
549は土師質鍋である。体部・口縁部が内湾するもので、口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。体部外面には指オサエの跡が残る。550は磁器青花皿である。基底で内外面には呉須による文が描かれている。551は白磁皿である。口縁端部がわずかに外反する。552は土師質の管状土錘である。

包含層出土遺物（第154～157図）

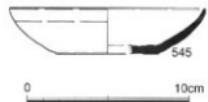
553は土師質の杯である。底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、体部は直線的に立ち上がり、器壁を薄く仕上げている。色調は橙色で吉備系の土器である。554は土師質の杯である。体部やや内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味である。555は土師質の椀である。体部外面には成形による稜がつき、体部内面には丁寧なナナギ施される。断面三角形の高台が貼り付けられている。556は土師質の鍋である。口縁部を「く」の字状に屈曲させ、口縁端部を平坦に仕上げる。557は土師質の羽釜である。体部はほぼ直立し口縁部よりやや外方へと延びる。体部外面指オサエ後ヨコナデ。558は土師質の羽釜である。559は瓦器椀である。体部内面に施されたヘラミガキは全体にまばらで、外面体部には指オサエが施される。560は和泉型の瓦器椀である。体部内面にヘラミガキがわずかに見られる。561は瓦質の羽釜である。口縁部が内湾する。562は瓦質火鉢である。563は東播系須恵質こね鉢の底部である。体部がやや内湾して立ち上がる。564は東播系須恵器のこね鉢である。口縁端部の上下の拡張が顕著である。口縁部外面には焼成時の重ね焼きの痕跡が見られる。森田編年第Ⅲ期1段階に比定される。565は須恵質のこね鉢である。口縁端部が上下へ拡張し、口縁部外面には焼成時の重ね焼き痕跡が見られる。566は須恵質甌である。567は備前陶器の描鉢である。体部上位が直線的で、口縁部はほぼ直立する。口縁端部は上方に拡張し、上端部はやや尖る。体部内面に6条以上を単位とする柳描条線が施される。真



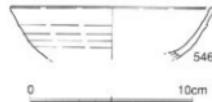
第147図 E区 SK1011実測図



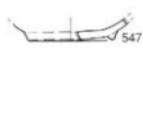
第149図 E区 SK1012実測図



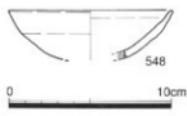
第148図 E区 SK1011出土遺物実測図

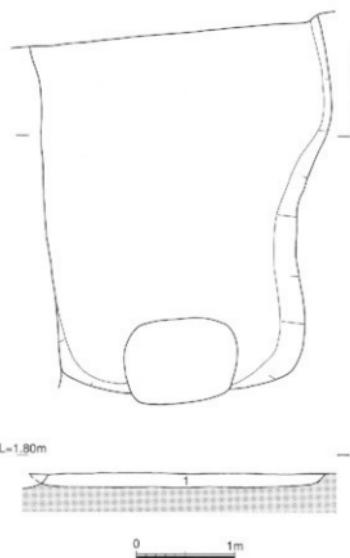


第150図 E区 SK1012出土遺物実測図



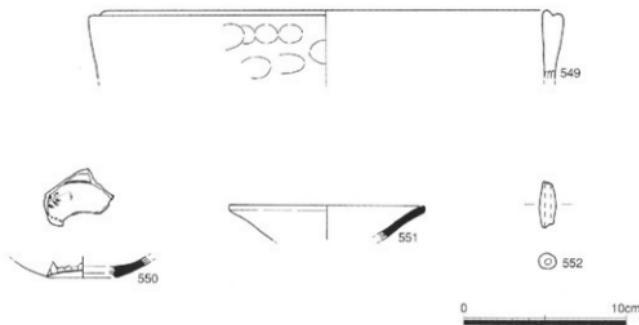
第151図 E区 SP1002出土遺物実測図





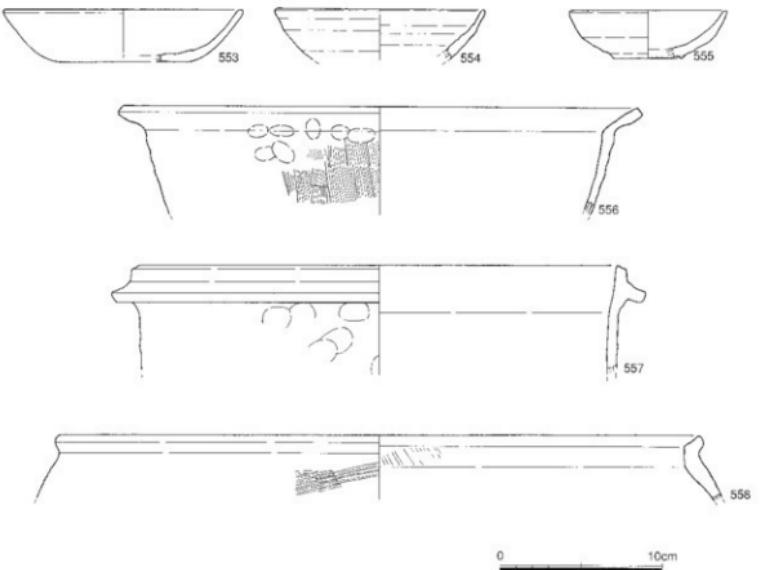
1 緑オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂質土

第152図 E区 SX1001実測図

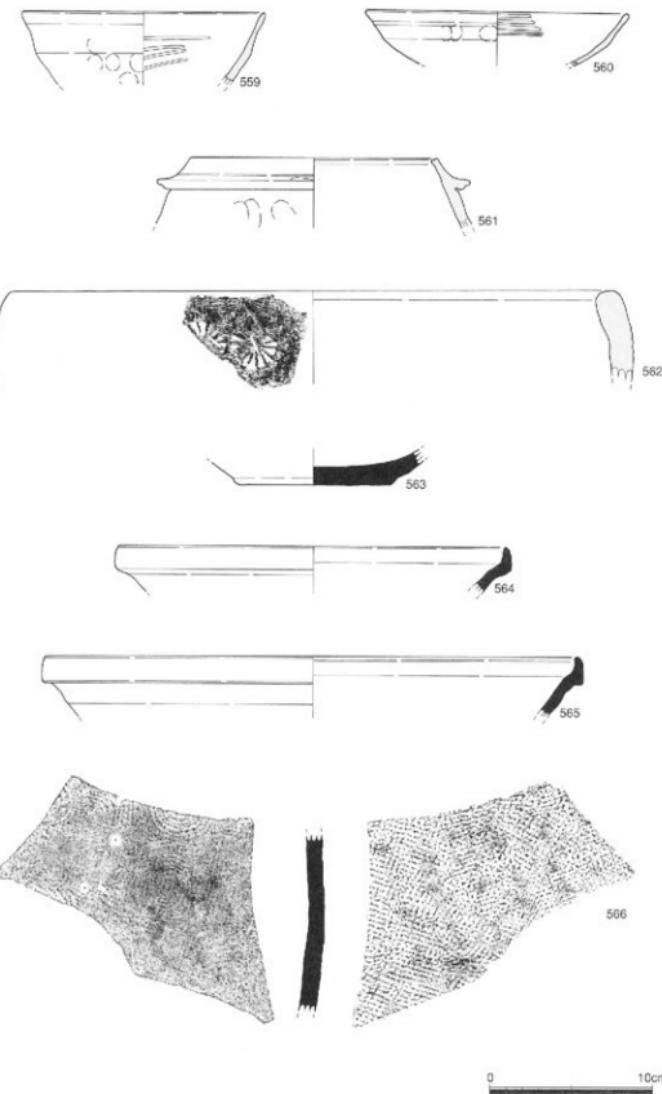


第153図 E区 SX1001出土遺物実測図

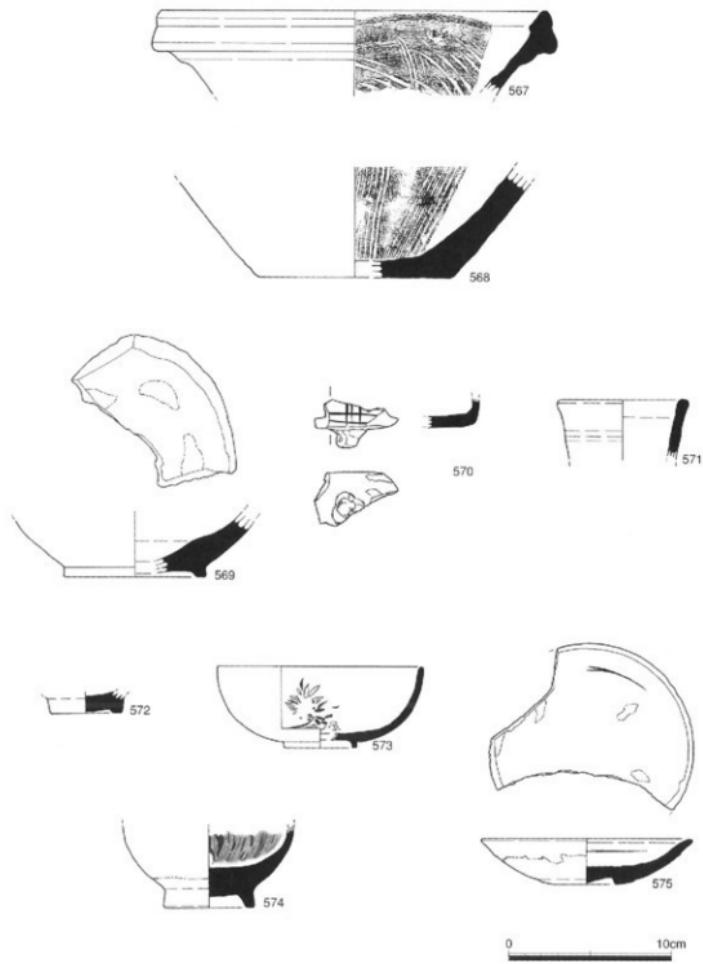
聖編年V期に比定される。568は備前焼陶器擂鉢の底部である。体部内面には7条単位以上の櫛指条線が施されている。569は肥前系陶器で唐津の大鉢である。570は瀬戸・美濃系陶器で織部の向付けである。571は瀬戸・美濃系陶器の灯明具である。口縁部には煤が付着している。572は瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗の底部である。573は京・信楽系陶器の碗である。高台部を除き内外面は施釉され全面に貫入が見られる。574は肥前系陶器で斑唐津の碗である。575は肥前系陶器で絵唐津の皿である。576は伊万里青磁の碗である。外面は口縁部を除き青磁釉が、内面には透明釉が施された天目系碗である。577は青磁碗の底部である。高台内無釉で内外面には濃緑色釉が施されている。578は磁器碗である。内外面には呂頬による文が描かれた、中世後期の貿易陶磁器である。579は磁器皿の底部と思われる。見込と高台部に呂頬による文が描かれている。580は土師質の大型管状土錐である。581・582は土師質の管状土錐である。583は銅錢である。嘉定通宝である。



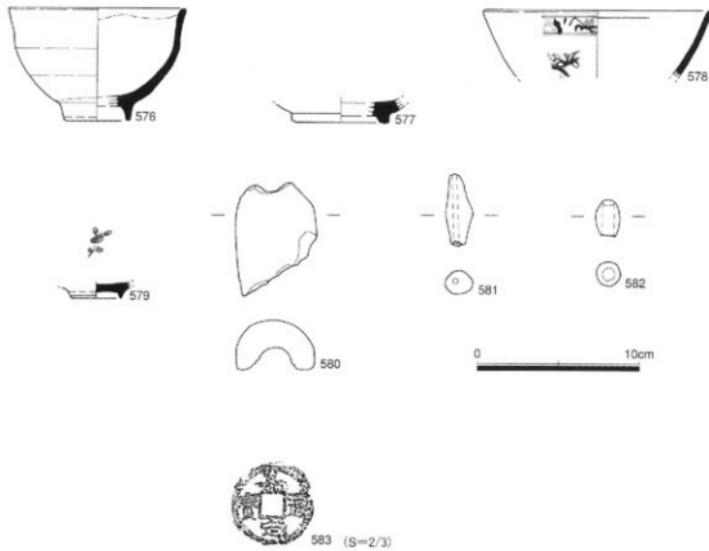
第154図 E区第1包含層出土遺物実測図(1)



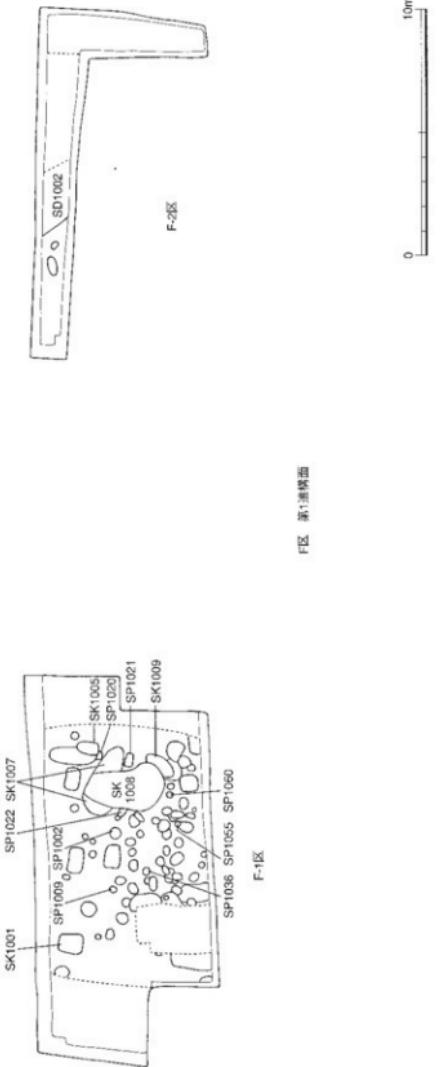
第155図 E区第1包含層出土遺物実測図(2)



第156図 E区第1包含層出土遺物実測図(3)



第157図 E区第1包含層出土遺物実測図(4)



第158図 F区構造配置図